

恋人未満な九歳差

黒マメファナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

奥沢美咲と紡ぐ、歳の差恋愛譚

目次

| | |
|----------|-----|
| 言えない関係 | 1 |
| 呼べない名前 | 10 |
| 返しきれない恩義 | 22 |
| いらぬ遠慮 | 32 |
| 止まらない幸福 | 42 |
| 避けられない邂逅 | 50 |
| 変わらない彼女 | 59 |
| 安定しない情緒 | 70 |
| 考えたくない未来 | 80 |
| 隠せない本音 | 90 |
| 止まらない紅涙 | 99 |
| 収まらない狂騒 | 109 |

| | |
|-------------|-----|
| 放っておけない仲間 | 118 |
| 知らない昔話 | 128 |
| 塞がらない傷跡 | 137 |
| 戻らない時間 | 146 |
| 正しくない恋情 | 155 |
| 向き合えない二人 | 165 |
| 語る必要のない幕間 | 173 |
| 二人きりになれない団欒 | 184 |
| 揺るがない愛情 | 193 |
| 語られない始点 | 203 |
| 本当ではない家族 | 212 |
| 救えない過去 | 222 |
| 苦味のない幸福 | 232 |

引けない覚悟

誤魔化せない欲求

必要のない憂慮

どうしようもない醜悪

見えない真実

忘れられない相愛

始まっていない未来

243

253

262

270

278

287

298

言えない関係

接客業は、己を売る戦いだと感じる。

営業もそうなのかもしれないが、俺はその世界に身を置いていない以上、接客業にそんな印象を抱いて仕方がない。

作り笑いを浮かべて、毎日毎日、そんな接客とバイトどもを纏めるための店長業務も並行してやらなきゃならんのだから、本当に参る。それでいながらそんな作業をできる人員は五人もいやしないんだから、嫌になって突然辞めだすのも無理はないよな。

「はあ……」

——いや辞めんな。俺が困るっつーの。ばーかばーかと言くらい文句を言っつてやりたい。同エリアとはいえ別店舗だ。そんなこと言えやしないけど。

ともあれおかげで店長がいなくなつて俺はデスマーチ状態。割とホワイトだからとバイトに言いくるめていたのに一転ブラックに早変わり。もうこの店いつぞ不思議なことが起こつて黒い太陽に焼かれて燃えねーかな。

「はあ……」

当たり前のように溜息は漏れる。そりゃ話し相手がないんだから独り言つてのも

まあ虚しいし、鼻歌か幸せを逃がすかのどつちかくらい。ひどい世の中だ。こんだけ働いても、俺の給料はあがりやしない。そりやそれなりに稼いでるけどな。

「宮坂みやさかさん。納品来ましたよー」

「わかった、今行く」

事務所のパソコンで事務作業をしているところに、ひよつこりと黒髪をボブに切りそろえたバイトが俺を呼んだ。彼女は奥沢美咲、ウチのバイトの中でも若い方で、そして高校生にしてはそれなりにちゃんと働いてくれるヤツ。そう、奥沢は真面目で、店長代理をやらされてる俺を何かと助けてくれる、気の回るヤツだ。

「ホントに今日はラストまでじゃなくていいんですか？」

「お前高校生だろーが」

「はあ、いっつも別でつけてもらってなんだかんだでいますけどね」

そんなの知ってる。知ってて、たまには高校生らしく十時より前に帰れつつってんの。今日は他にもいるし、悔しいことにそんなに忙しいわけじゃないんだから。

十時閉店のウチで高校生を十時過ぎに退勤させたなんてバレたらマジで問題なんだからな。

「それじゃあ、あたし、今日は九時半で帰りますんで」

「おう」

「……あのさ」

彼女が何かを言いかけたところで、恰幅のいい運送のお兄さん……もう四十代だけど、お兄さんがお疲れさん、と元気に挨拶をしてくれる。

——今日も多そうだな。嫌になる。

それと同時にレジヘルプの業務連絡が重なり、彼女は俺に何かを言うわけでもなく、バックヤードから出ていった。

「どうした！ 元氣ないぞ元氣！」

「……まあ、最近連勤っスから」

「店長さん、二店舗掛け持ちなんだろう？」

「ええ、そうなんです……こっちはほとんど来ないんですけど」

大変なのはあのヒトの方なだけだな。でもあのヒトは超が三つくらいつくやり手だ。そもそも元々の経歴も、いくら大卒歴が俺の方がいいつつも入って四年目のペーパーに比べること自体が間違ってるんだろうが、本部勤めの経歴もあって、今は人員不足のココのエリアに降りてきてるだけ。そんなヒトに任せたと云ってもらえるんだから俺は頑張れるようなものだ。

「頑張れよ、宮坂さん」

「ありがとうございます」

受領のサインを終え、事務作業詰めの鬱屈した気分を晴らすために伸びをしてからバックヤードから店内へと出ていく。

すると白髪の爺さんにちよつとと呼び止められ、商品案内を頼まれた。

——まだバイトだった頃は、これが割と好きだったんだよな。客の話を聞いて、案内して、ありがとうと言つてもらい頭を下げる。そうしたら時々、また来てくれて俺に挨拶をしてくれる、なんてこともあったりして、そんな客の話を聞きながら笑う。楽しかった。社員になりや、もつとそれが多く繋がれるって思つて就職したのに、俺の心は妙にカラカラだ。

ヒトは空腹は何日か耐えられるが、渴きは何日もやつてられない。急速に死に近づいていく。

「はあ……」

客に聴かれないようにそつと、俺はまた溜息を吐き出した。現実つてのはやつぱり、理想よりもはるかに色の滲んだものなんだな——つてのは、大人になった証拠なのか。

もう俺には理想が重すぎるほど、弱つちまつてるのかな。そんなことを考え、俺は彼女の背を見つけた。

「納品、した方がいいよね」

「頼む」

「りよーかい」

——そんなこんなでなんとか最後まで耐え抜き午後十時を過ぎ、俺は店の鍵閉めをする。これで業務は終わり、大学生のバイトとパートの男にお疲れ様です、と別れを告げる。ま、何人かは明日も会うんだけどな。と苦笑いをしながら電車に乗り込みほんの二駅、ほんの数分の間だけ立つたまま目を閉じて、俺は自分のマンションへと帰宅した。

「ただいま」

自分の家のドアを開けると、おかえりと柔らかな声があった。一時間半前に見た黒のポブカット、髪留めはもうつけてないけど、俺はソイツの笑顔に水を注がれたような気分になった。

シチューできたけど、先にお風呂にする？ というあどけなく聞いてくる彼女に、俺は精一杯の笑顔で応えた。

「ありがとな、美咲」

「なに、急に」

「疲れたから、言いたくなるんだよ」

なにそれ、と美咲はあきれ顔をする。こんな風だが、俺と美咲は別に恋人じゃない。流石に九歳離れた女子高生に手を出すほど落ちぶれちゃいない。ひよんなことがあつて、俺は美咲に助けられて、美咲も俺に助けられた。だから、切れない縁になつてこう

して新婚ごっこを続けてるだけ。

美咲の親御さんは美咲を大層信頼してる。だから男の家にこうしてメシを作って、あまつさえ泊まっているとしても、間違いがなきゃいい、美咲が泣いちまうことがなければいいってスタンスを取ってる。それでバイト先まで受けてるのはやりすぎだと思っただけだな。

「なに？ あたしにムラつときたとかやめてよ？」

「ねーわ」

「ホントかなー？」

「ねーって、ガキに欲情するかよ」

せめてもうちつと色っぽくなってからにしゃがれと俺は美咲が用意してくれたシチューをスプーンで掬って、よく煮込まれた野菜を咀嚼する。柔らかくて、温かくて、なんつーかほつとする味だ。こんなん女子高生が出せていい味じゃねーよ。

「どうっ？」

「結婚したいくらいの味だな」

「……ばーか」

「お前バカバカ言い過ぎだからな。おかげで俺もふとした時に思わず口から出そうになるんだからやめろよな、ばーか！」

冗談とはいえ二十代ももう後半になる俺が18歳未満に結婚したいは犯罪な気がするけど世の中の目は俺の家の中にまで行き届いているわけがなく、美咲が怒るだけで処理されていく。

「あ、そうだ。明後日休みだよな」

「そうだな」

休みじゃなかったら連勤が十を超えるのでどうか休みであってほしい。ブラックに手を染めるなよ。

美咲はそこでもしよかつたらなんだけど、と前置きを置いた。別に俺は休みに出掛けるタイプだから遠慮はするなよとは思うんだけどな。

「暇だったらさ、ハロハピのライブ、来ない？」

「ハロハピ……美咲が着ぐるみやってる？」

「うん」

掛け持ち先のキグルミバイト。いやまあウチがサブなんだけど。そこで出会ったお嬢様とんやかんやあつて今はそのミッシェルとかいうキグルミでバンドを組んでDJをしているらしい。バンドでDJってなんとなくイメーজないんだけど、それは俺がバンド知識ないだけか？

確かに、俺はこれまで話で聞いてきたけど実際に見たことはなかった。そして興味が

ないわけじゃない。こうして俺を助けてくれる美咲が大切にしているものを、知りた
いってのもある。

「ん、わかった」

「あ、ありがと……み、み……」

「ん？」

「み、宮坂さん……」

「おう？」

なんでもごもごさせてんのか知らないけど、こつちこそゴロゴロ一日を過ごすつて性
に合わないから助かる、ありがとって言いたいくらいだ。

春風吹く、学生は春休みという時期。美咲が高校二年生になった年、俺と美咲の環境
は激変する。

美咲が巻き込まれるものに巻き込まれ、美咲が見るものを一緒に見て、美咲と一緒に
成長する。それまで俺を助けてくれるだけだった彼女が、さまざまなのが合わさつて
いく。

「で、どつちが先にお風呂入る？」

「美咲でいいよ」

「……何もしない？」

「何をする余地があつたんだそこに」

「覗くとか、お風呂飲むとか」

「そんなこと思いつくとか……さては変態かお前」

「——っ、ばーか！」

今はただ、こうしてじやれあうだけだけだな。

これがまた何かと楽しいから困る。性的対象じゃないからこそ、こうやって軽口が叩けてかつ年下だからこうして笑えるのかな、なんて思いながらただ俺は美咲がくれる幸福が多すぎて、溜息がでた。

呼べない名前

自慢じゃないが、いや本当に自慢にもなんにもならないが、俺と美咲の関係は簡単にヒトに話せるようなものじゃないと考えてる。

端的に言うことやましい。そりやあやましい。いくら俺が興味がないと言っても男女、それもそういうことができる男女だ。それが一つ屋根の下で一夜を明かすんだ。ロリコンだ性犯罪者だ言われても否定はできない。だからって言われるとキレそうなんだがな。

「あ、おはよ、み、宮坂さん」

「おはよう美咲」

「う、うん……」

でもまあエプロン姿の美人に朝起きておはようと言われる朝は素敵だ。これでメシが美味いってんだからもっと素敵だ。あと四つ年が近かったらなんと言われようと手を出していた気がする。というか結婚してくれって言いたい。結婚して。

「……ばーか」

「ん？」

「口に出てる……恥ずかしいなあもう」

なんと心の声が漏れ出てたらしい。でも残念ながら女子高生に手を出すほど俺は落ちぶれちゃいけないので冗談だよと注釈をしておく。

俺の朝は本来パン派なんだけど、美咲はいつも白米を炊いて、みそ汁。なんでと問いかけたらあたしもいつもパンだから、とか言い出した。じゃあパンでよくない？

「あたしが作りたくて作ってるんだから文句言わないだよ」

「いや文句はねーけど、大変だろ」

「別に」

とのことなのでもう何も言わない。美味しいし、美咲が手間じゃないって言うなら俺は美咲がこうして泊まるようになって充実する朝に文句があるはずはなかった。

コトン、と机の上のみそ汁のお椀と白米の乗せられた茶碗が置かれた。あとは今日は気分で卵焼き、と言われた。

「大根おろしある？」

「……大根おろしで食べるの？ それはだし巻き卵じゃない？」

「いいんだよ俺が好きだから」

「オッサンくさ……」

うわ傷つく一言。もうオッサンだなんて思いたくもないんだよコッチはさ。とにかく

く俺は大根おろしと大根おろしで食べる秋刀魚好きなの、時期じゃないけど。というかパン派とか言いつつ俺は和食派だって美咲も知ってるだろうが。

「知ってる……だから……」

「ん？」

「……なんでもない、ばか」

またバカつて言いやがる。お前は一日に何回俺を貶せば気が済むんだばーかばーか。と、言いたいところだがごほん作らないと拗ねられては困るので心の中にしまっておく。美味しい。

「今日もありがとう、ごちそうさま」

「ん……おそまつさま」

ダウンー雰囲気バリバリのクセに、こうやって律儀で頑張り屋な美咲は、俺がありがとう、と言う度に嬉しそうに口許が緩む。化粧っ気の薄い、というかすっぴんなのに肌はツヤがあつて白くて、なによりそんなあどけない笑顔を浮かべる奥沢美咲という存在が、ギリギリアウトな職場環境でもなんとか生きていける支えだった。

「さて、元気出たし、早めに出勤してくるわ」

「回らなかつたらあたしも行くからね」

「本番前の最終調整があるヤツが言うセリフじゃねーな」

「でも、夕方には終わるから……だから」

そんな心配しなくても、別に死んだりはしねーつての。今日は土曜で大変なのは大変だが、その分ヒトもいるしな。昨日の納品も、美咲が大分片付けてくれたおかげでなんとかなりそうだし、俺はマジで美咲に頼り切ってるな。

「そんじゃあ、行つてくる」

「行つてらっしゃい」

——行つてらっしゃい。そう言つてもらえるだけでこんなに心軽く家を出られるなんて思わなかった。充実した朝ごはんがこんなにも俺の活力になるだなんて思わなかった。嫁がいるヤツらはこんなに充実した生活を送つてんのか、なんて冒瀆的なことまで考えてしまう。

満員電車も今日は平気だな！

「——うげ」

やっぱ無理、日本の満員電車最悪、いや海外の電車乗ったことねーけど！ オツサンの匂いとかコロンのキツイ匂いとかマジで無理！ うわお前絶対カレーチエーン店でカレー食つたる！ 出勤前にカレーとか何考えてんだばーか！

——結局、美咲に貰った活力は満員電車ではぼ使いましたとき。

食器を洗って、掃除を軽く済ませて、ほっと一息をつく間もなく、あたしは支度を始めた。今日は本番直前の確認。いくらウチがアドリブが多いと言ってもその辺はしっかりしなきゃっていうあたしの提案をちゃんと聞き入れてくれるのはほんとーに助かる。三バカの二人、薫さんもはぐみも、本番前の心構え、みたいなのはちゃんとしてるからね。

「戸締りよし……っつと」

あのヒトから貰った合鍵できちんと施錠して、あたしはリュックサックの肩の位置を直す。思わず一人でも行つてきます、と言つてしまひそうなこの部屋は、あたしのもんじゃない。

でもあたしみきとの部屋みたいな優しさがある。それはきつと幹人さんのおかげだ。

——宮坂幹人さん。あたしより十くらい……って言うといつも九、って訂正してくるくらいの歳の差がある、お兄さん。あたしがバイトを掛け持ちすることになった直接の

原因のヒト。自分から望んで、だけど。

「はあ……今日も呼べなかった」

最近じゃ幹人さんって呼ぼうと頑張ってるんだけど、恥ずかしくなって、前の呼び方の宮坂さんって呼んじやう。バイト中はそっちのが都合がいいからいいけど、一緒の部屋にいて、まるで夫婦……うん、夫婦みたいな感じなのに苗字で呼ぶのはなんだか嫌で。

「ごめんね、ちよつと遅くなつて」

「ミツシエル！」

「ううん時間ピッタリだよ、ミツシエル！」

いつも見上げるくらい豪邸……こころの、弦巻こころの家に着いてまずは着替え、黒服さんに手伝ってもらいながら早着替えを果たしたあたしは、ピンク色のクマ、ミツシエルとなつて四人の前に躍り出た。なんとこの四人のうち、あたしとミツシエルが同一人物で、ミツシエルがクマのキグルミだつてわかつてるのが水色のふわつとしたサイドテールを揺らしてほんわか笑つてる松原花音さんだけなんだよねえ……ホント、氣付いてほしいような、そうでもないような。

「今日は最後の確認、ですよ、花音さん」

「う、うん……一回通して、プログラムを見直すくらい、だよ」

よかつたよかつた。これなら幹人さんの様子を見に行けそう。そんな安堵をして

いるところが抱き着いてきた。

いつもいつも、こころは楽しそうに笑う。笑顔をみんなに、世界中に届けようだなんて無茶苦茶な目標に向かって。こころはそんなヤツだ。まるで太陽と一緒に生まれてきたみたいな金色の髪と金色の瞳を輝かせて、あたしと全然変わらない小柄な身体を大きく動かして、バンドのリーダーとしてマイクを握る。

「今日も練習、楽しみましようね、ミッシェル！」

「……うん、やろう、こころ」

「ええ！」

——うん、まあ歌ってる最中に楽しくなって身体が勝手に動き出すのはどうにかしてほしいかな！ 下にマット敷いてるわけでもないのにバク転とかしないでもらえるかな、ヒヤヒヤするんだけど！

思いつきりの良さがこころの良さ。でもまあ、盛り上がるからよしとしちやう自分も、もうだいたいハロハピに染まつてるんだなあとしみじみ感じてしまった。明日が楽しみになってるしね。

「——つて、あ！ 時間！」

「ふええ……？」

「どうしたんだいミッシェル？」

夢中になりすぎて気付けばとつくに夜になってた。ああもうやばい、お店、夜のピーク始まつてるよ！

スマホも着替えと一緒に置いてきてしまったため向こうがどういいう状況かもわからないままだ。ヤバいって、これでもしあたしにヘルプかかってたらどうしよう。

「時間？ ミツシエルもしかして、もう帰らなくちゃいけないの？」

「え、あー、うん！ 実はさく、帰らなくちゃいけないくて」

「それは大変ね！ それじゃあまた明日ね、ミツシエル！」

「う、うん……！」

黒服さんに手伝ってもらって、またもや早着替え、スマホを確認すると連絡は来てない。けど、来てないのが一番危ない。余裕だったら幹人さんは大丈夫だから心配しないでいいってメッセージをくれる。ヘルプを飛ばしてきたことなんて急な休みが入った時だけだ。だからあたしはいつも、メッセージが来てないことを確認してヘルプに行く。

「奥沢様。お困りでしたら我々が送りましょうか」

「ほ、ホントですか？ お願いしますっ！ い、家じゃなくて、ここから二駅先の——」

そう言つて住所を示す。黒服さんたちはかしこまりました。と黒塗りのツヤのある高級車を走らせてくれた。静かな駆動音がして、あたしは腕時計を見た。午後七時過

ぎ、焦りが溢れてくる。メッセージを送ったけど、反応はない。接客してるのかな。ほんの十数分のことなのに、とても長く感じた。

「ありがとうございます！」

「お気をつけて」

「はい！」

頭を下げた黒服さんを見送りながら、賑やかな店内へと入っていく。そうすると偶々納品をしていたバイトの先輩が奥沢さんと驚いた顔をした。

きつと、あたしがあんまりにも切羽詰まった顔をしてたから。

「宮坂さんは……？」

「え、あ……たぶん接客中」

「ありがとうございます……忙しいですか？」

「うーん、ちよつとね」

さつきまでレジ開けてたんだよとのんびり笑う小柄な大学生の先輩にそうですか、と告げて幹人さんを探して、ちよつど接客が終わったところを見つけてあたしは、小走りになって彼の袖を引っ張った。

「みさ……あ、お、奥沢？」

「どーも……状況は？」

「お前な……」

露骨にそんなこと心配するなって顔であたしを見下ろしてくる。お生憎様、そんな強がりじゃなくてあたしが知りたいのはあんたの本音だつての。ちよつといいですか、とあたしは強引に幹人さんを事務所へと連れ込んだ。

「人手」

「は？」

「足りてないんでしょ、どーせ」

「……まだ大丈夫だつての」

「他のヒトはね、あんたは？」

いつも家にいる時のような口調で、幹人さんに詰め寄る。やや斜め左に視線が動き、大丈夫に決まってるんだろと言いつつ出した。はいアウト。忙しくてなんかできてない時の顔だからそれ。ほんつと、ばかなんだから。ばーか。

「そんな人事動かせねーって」

「じゃあご飯奢つてよ、それでいいから」

「足りてねーだろ」

七時半から十時まで、二時間半、確かに時給換算したらブラックもいいとこの違法労働になるだろうけど、別にあたしのことには気にしないでつて言つてんじやん。

——あたしが好きでやってるんだから。

「納品と？ 他は大丈夫？」

「……人の話聞けよ」

「はあ……とりあえず他のヒトに訊く」

一応タイムカードは切っておく。まったく、こんな初めてじゃないんだから、バイトのヒトもフリーターのヒトも、またかくらいな気分で見てるんだよね。宮坂さんとあたしの噂なんて流れないはずない。けどあたしは全然、これっぽっちも気にしてないし、なんならそう思われるのが……ちよつと、嬉しいし。

「集中集中……おはよーございまーす」

「奥沢さん？ ああ、今日もありがとね」

「いえいえ、ヘルプが必要などこあります？」

「あ、えつとね僕が八時からレジなんだけど、ちよつと納品が滞ってて」

「わかりました、引き継ぎますね」

「ありがとう」

二時間、九時半までで一旦タイムカードを切って、あたしはそこから宮坂さんの事務作業の手伝いをした。

ぶつぶつと明日本番なのに、だとか言ってたけど無視しておく。これはあたしが笑顔

になるために必要だから、いーの。あたしがやりたくてやってることにケチをつけられる謂れはどこにもないから。あたしは、幹人さんを助けたいだけだから。

返しきれない恩義

結局また、美咲のヤツに助けられた。納品だけじゃなくて事務作業とか売り上げ計算まで、何から何まで頼りになった。つかどこでそんなスキル身につけたんだよってくらい計算も早いし、事務作業も早い。コイツ經理の事務員になれんじゃねーのと本気で思った。

「帰ろー」

「は、お前今日は家に帰れよ」

「やだよ」

同じ電車の、けど違う車両に乗り込んで、同じ最寄り駅で降りる。明日はライブ本番だったのに、美咲のやつは俺の隣に来て合鍵を取り出した。お前んちじゃないんだけど。そして夜飯はコンビニで済ませようと思ってたのに、美咲はばーかとキーホルダーを指で引つ掛けて合鍵を回し始めた。

「あたしがラストまでいて、それでコンビニで済ませるなんて許すわけないじゃん。はーもうホント考えなよばーか」

「そうじゃねーよ、明日ライブ……」

「いい、明日の六時からだし」

それは朝家に帰って支度すれば間に合う、という意味か。なんだってそんなに自分よりも俺を優先しようとするんだよ。

今日くらい、俺はお前がいなくなつて……と言いたいところだが、言えない。さつき助けてもらったばかりでそれは、あまりに説得力なさすぎる。

「何がいい？」

「簡単なヤツ」

「ふーん、じゃあパスタでいいね？」

「おう」

簡単なものリストにサラッとパスタが入ってるのかと思つたけど、この間トマト缶買つてたな、あれか。トマトソースのパスタ。さつきと時短で済ませようとするのに美味いんだよな。なんか女子に興味なさそうな顔しといて美咲の女子力つてかなり高めなのは不思議なくらいだ。

「ふふ」

「なんだよ」

「いやあ？ あたしのこと女子力あるっていうの、み、宮坂さんだけだから」

「そうなのか？」

「どうやら美咲クラスがゴロゴロいるってことなんだろうか。え、それはねーだろ流石にさ。」

「こんな家事完璧な女子高生がイマドキ大量にいたら世界はもつと優しくなってるよ。俺はそう思うんだが。」

「まあ、こうやって料理作るの、宮坂さんだけだからね」

「……それは」

俺はその言葉にはっとした。

なるほど、それにはマジで俺から伝えなきゃいけないことがあるんだった。いつも思ってたこと、感謝の中にある、もう一つの気持ち。想い。

「なに？」

息を大きく吸って、扉に手をかけた美咲が背中越しに振り返った。

控えめなボブカットが揺れる。大きな瞳が俺を捉えた。月明りの下で、俺はどうしても伝えなかったことをここで伝えることにした。

「すつげえ、勿体ないよな」

「……は？」

なに言ってるのって顔をされた。いやだってそうだろ、そんな料理美味しいのに俺にか食べさせたことないなんてさ。あんなのもう金が取れるレベルだから、なんなら料理

店なり定食屋なり開いたら毎日通つちやうレベルだからな。

「ばーか」

熱弁したら半眼で、なんか本気で拗ねたようにそうやって言われた。お前はすぐに俺をばか、ばかつて言いやがるなばーか！

——と女子高生と同じ目線でケンカをするわけにはいかない。俺はコイツの九歳上だからな。

「はあ……ホントばかなんだから」

「またそういう」

「事実」

下味のついていた鶏肉をトマトソースの中に落とし、コンソメを入れて味を見ながら、俺に視線を向けずにそうやって俺のことをばかつて言いやがった。なんだよ、なんも変なこと言ってないと思うんだけどな。

「……ちよつとでも期待したあたしがバカだった」

「なんの話？」

「なんでもない」

「これまた視線向けずに一言、どうやら味付けは美味しいようだ。いいことなんだけど、素直に喜ぶことができない。明らかにバカにされてる。」

でも味が気になって隣に来たら来たで、なんだか口許を緩ませてもうちよい待ってと、そこでようやく俺を見た。

「テレビでも見てたら？」

「それは……申し訳なさすぎるだろ」

だからといって、実際のいい美咲の手伝いができるかと言ったらできない。俺はこういう状況においてまるつきり何もできないんだよな。やっぱ自炊とかできないのは致命的ってわけだ。反省しよう。

「あたしは気にしないから」

「俺が気にする」

けど、女子高生をパタパタと走らせて頼って、俺が座して待つってのは我慢できない。手伝えるだけでも手伝いたいし、なんなら美咲に頼らないでいられたら本当は理想的だ。

——相手は九歳下だからな。

「ばか……意地っぱり」

「なんだよ」

「すぐそれ……じゃあお皿出して」

「それくらいなら」

そう言つて食器棚を開けて取り出す。この食器棚がキレイに整頓されてるのも、実は美咲のおかげで、家主としてなんだかまづらいなという気分にはさせられる。仕事では店長代理として客、アルバイトやパートの力になつていられるのかもしれないけど、こう家に着いた途端に、ただの女子高生に頼り切る。情けないとは思うけど、どこかで俺は美咲ならいいかと思つてるんだらうな。

「ごちそうさま」

「おそまつさま」

「今日も美味しかった」

「そ」

そうやっていつものものように向かい合つてご飯を食べて、先に風呂入つてきなよと言われた。既に美咲は食器を洗おうとしてる状態で、それを少しだけ背に見てから、俺は湯船に浸かることにした。

——先に入つて、先に寝ていてほしかった。俺のために自分の時間を使い過ぎるな、つて言いたい。言えない自分の弱さに溜息を吐いた。

「……………ばーか」

浴室に響いた俺の声は、なんとなく歪んで聞こえた。もうとつくに日付は変わつてゐるのに、美咲は食器を洗つてきつとソファに寝転んでスマホでもいじってるんだらう

う。そう思うともう一度だけ、ばーかと言いたい気分になった。

翌日の朝、美咲はわざわざ朝ごはんを作って、それを食べて掃除をしてからパタパタと家に帰っていった。集まりは昼からだからいいの、の一点張りで俺は結局、ロクに手伝えることもできずに美咲の家事を見てることしかできなかった。

「昼は……テキトーでいいか」

でも一番ダメなのは、なんやかんや言いながら美咲がいなくなった途端にコレなこと。こりや美咲が放っておけないって言うのもわかるなど客観的に見ながらも、それを改善する気がない自分だ。

「……あ、そうだ。来週の会議の資料纏めないと……どこまでやったっけ」

ノートパソコンを持ってきて、リビングで作業をする。店長に、会議の出席はどっちでもいいと言われたが俺としては行く以外の選択肢がない。俺だっていずれは店長に

なつてキャリアを積んでかなきゃならないんだからな。

時間はあと二時間。アラムをかけて、サイレントにしてたなんて古典的ミスはしないようにして、俺はパソコンに向き合う。

やっぱり朝ごはんを食べてると集中力が違う。できるところまで進めて早二時間、アラムの音を合図に俺はキリをつけて伸びをした。

「でかけるか」

駅で昼飯を食べてからローカル線でのんびり向かってても余裕がある時間に出る、思わず行つてきまうと言つて、左右に誰もいないことを確認してから溜息をついた。

—— 幸せ、なんだろうな。こんな犯罪ギリギリ踏み越えてるような関係で幸せって責任ある社会人としてどうなんだって話なんだけどな。

「懐かしいな」

ローカル線に乗ると、美咲と初めて会った時のことを思い出す。俺は美咲を助けた……なんて言つてるけどそんな大層なものじゃなくて、ただ逃げ場のなかつた美咲の逃げ場になつただけ。それ以来、俺は美咲に助けられっぱなしだけど。

家事や料理をしてくれた。バイトに来てくれた。何より独りぼっちだった俺と、繋がりをくれた。

「なーんか、人間つてき、正しくなきゃ生きてけないと考えちゃうかなーつて、思うんだ

よねえ」

「なんでキミは、そう思ったの?」

「ここにいて、あたしは生きてるって思うから」

なんてね、と膝を抱えて笑った顔と会話を、俺はたぶん忘れない。忘れられない。

忘れてる時はいつも、美咲が傍にいる時だけだ。離れたらいつも、そのことを考えてる。今日もそれを考えてるうちに、ライブハウスの最寄までついた。小さな川沿いの、でも練習スタジオも併設してるから決して小さくはないライブハウス。美咲にタダで貰ったチケットを片手に、並び始めているその熱気の一部になっていった。

「バイトのヤツが言ってたけど、流行り、なんだっけ」

「ガールズバンドは空前絶後の流行らしい。玉石混交とはいえ粒の大きなアマチュアのグループがいくつもいて、ライブハウスなんかで日夜音楽技術を磨いてる……とそれは受け売りの言葉。玉石混交ってフツー大学生言わねーだろ。俺だって使わねーよ。その熱く語られた言葉通り、ライブハウス前の熱気はすごい。これアマチュアなんだよな。なつてくらいに開演を待ち望んでる人の多さに、俺は改めて美咲の本来の姿はすごいんだなと思わされる。」

「さあ、今日もみんなの笑顔を見せてちょうだい!」

わあ、と歓声上がる。金髪の子が手を振りながら袖からやってきてくるりと前方宙

返り。初見の俺にとってはいきなりのビックリパフォーマンスを披露した。

そしてクツションもないのにキレイに着地したら、行くわよ、と瞳を輝かせ、ライトが消える。

「ハロー、ハッピーワールド！」

再びライトが着いた時には、楽器の前にそれぞれのメンバーが立っていた。まるでマジックショーのような始まり。美咲の言葉を借りるならイリユージュンこそが、第一の魔法つてことなんだな。

美咲、ミツシエルのDJパフォーマンスはものすごいな。というかあのキグルミでどうやって演奏してんだよと思った。

夢のような時間、自然と笑顔になれるような時間だった。魔法にかけられたように熱気と楽しさに満ちた時間でも、一番印象に残ったのは、かわいい顔をしてあげつないパフォーマンスをするドラムの子でも、ギターが物凄く様になってる長身のイケメン女子でも、元気に跳ねる短髪のベースの子でも、一番目立つ金髪のボーカルでもなくて、ピンク色のクマのキグルミがほんの一瞬、俺の方に小さく手を振った時だった。

——終わったらお疲れ様ってメッセージを送っておこう。んで、明日はバイトに来てくれるから、なんか甘いもんでも買ってきてやろう。それが、俺が返しきれないものをもらってるせめてものお礼だ。

いらぬ遠慮

ライブから数日経ち、春満開のこの季節、寒々しい冬に出逢った美咲が高校二年生になった。こころ、ハロー、ハッピーワールド！ のボーカルの弦巻こころとクラス離れちゃったな、なんて少しだけ寂しそうに笑った美咲に、俺はどーせ構ってほしくて飛んでくるって言うておいた。会いたいつて思う気持ちがありや面倒なはずでも来るだろってな。そうしたら、よくわかってんじやんばーかって言われた。なんで？

俺の方は、人事が変わるかと思つてたけど、そんなことはなく、俺は店長代理のまま、店長は二店舗店長のまま。当然研修とかできる状況じやないから新入社員が入つてくる可能性はゼロ。俺はほぼ孤立無援状態な一年が始まつていた。

「学校終わつたらそつち行くから」

「今日は六時からだからのんびり来いよ」

「すぐ行くから」

ヒトの話を聞けと言うのに、朝っぱらから電話してきた内容がこれ。孤立無援状態云々を知っているせいなのか、絶対に譲ろうとしない。バンドの練習も、キグルミで商店街のイベントにも出なきゃならないのに、そんなに働いたら扶養から外れるから気を

付けろよと返してやった。

——返事は、キグルミバイトは手渡しだから大丈夫、だそうで。それは大丈夫とは言わねーから、脱法って言うんだからな。バレたら脱税でバカみたいに払わされるからな。それは親を困らせるってことだからなお前。

「……わかつてるよ、うるさいばーか」

「またそれか」

「うるさい、もう切るから、じゃね」

最後の一言がこれ。全然わかつてない反応だったなありやと思いつながらニュースをBGMにトーストにかじりついた。美咲が春休みの一週間は散々どっちに長くいたのかわからんくらいにいたからな、なんとなく家が寂しい雰囲気だ。それがあるべき姿、つてヤツなんだけど。

「……行つてきます」

自然に言葉に出て、俺はなんとなく気分がしやきつとした。美咲が学業に専念できるように、俺は俺のやることをやるだけだ。

取り敢えず、まずはネットのアルバイト募集要項を更新しよう。新生活始めたてのこの一ヶ月が勝負だからな。

今日もさっそく、それを見越したアルバイト募集の男子大学生の応募があつたもん

で、俺は頭に入れたプロフィールを思い浮かべた。履歴に怪しいところはなかったから、後は人柄かな、五時からの面接のためにいつもより制服をきちんと整えてきたしな。「さーて、頑張りますかね」

面接のことを伝えた以上、まあ美咲が五時より前に来ることはねーだろと高をくくつての仕事だった。接客をして、いつも絡まれる……もとい散歩の途中だというのにわざわざ俺みたいな若輩者のためにご高説を垂れていただく爺さんの相手をして、たまにはなんか買つてけよと悪態をつき、昼飯にサンドイッチを食べて、あつという間に四時過ぎになり、そして。

「おはよーございます、宮坂さん？」

「は？ 帰ればーか」

嘘だろホントに。家にも帰らずに一直線に来るやつがいるかってんだばーかと言いたいのを我慢して、それだけで我慢しておく。美咲は練習帰りだし、と俺の揚げ足を取ってきた。ああそう、入学式だから午前で終わったのね、なるほどね。やつぱバカじゃねーかばーかばーか。

「ばか、面接までの事務作業手伝いにきただけだし」

「はあ……」

「溜息はひどいと思うんだけど……」

溜息もつきたくなる。俺の立場もわかってほしい。なにせ美咲が来ると一部のバイトやパートが嬉しそうに俺に報告に来るんだから、マジでなんにも隠しきれてない。この間主婦の方にありがたい年の差の話されたんだからなコッチはさ。

「それで？ 今日来るのどんなヒト？」

「……理系大学生、バイト経験なしで週三ー二時間ほどを希望らしい」

「うーん、人柄だね、そーすると」

そんなことお前に言われんでも把握してますー。

——花咲川女学園制服姿の美咲は近くのコンビニで買ったらしい470mm紙パックのミルクティーをストローで飲みながら事務所のパソコンで事務作業をしている。コイツマジで社員としての俺より長く働いてる遅番パートよりできること多いよな。俺がバイトん時はできて精々発注とかそんなもんだっただけだ。つかその格好で社員ばりのことやんのやめてほしい。ギャップがすごい。

「あ、そーだよな。このカツコだと面接で怪しまれるよね」

「……そつちじゃねーよ」

「宮坂さんのプライドどうこうは知らない」

どーせプライドなんて一ミリもないですとも。つーかさあ、仕事なら敬語を使っておくれ礼儀の正しい女子高生さん？

イヤミっぽくそう言うとき美咲はミルクティーを飲みながらのまま、は？ と心底バカにしたような顔をしてきやがった。コイツ……

「あたし今給料発生してないし」

「あいな……」

「だったら働くな、もなしね。あたしは知り合いのよしみでみ、宮坂さんを手伝ってるだけだから、今は敬語は使わない」

そこ、こだわるところかよとツツコミたくなつた。大丈夫面接の時はちゃんと敬語使うから、って面接ん時は出てけよ女子高生。

明らかにこの光景を見たヤツ全員が全員、痴話げんかと言うだろう会話を繰り広げていると、業務連絡で俺の名前を呼ばれた。たぶん、来たな。

「せめてエプロンつけてくれ」

「はいはい。着替えるからゆっくり目に歩いてきていて」

「あいよ」

なんだかんだで、作業はめちやくちや捗るんだから悔しい。なんなら接客やトラブルで時間食われてもアイツが代わりにやってるつてのがもつと悔しい。

——どうせ、採用不採用にも口出してくるんだろな、と思いつつながら緊張気味の新大生くんを迎えにいった。

面接が終わり、あたしは息を吐いてから時計を見た。丁度六時前だったからあたしはタイムカードを切る。

トントン、と机で履歴書と書類を整えた宮坂さんにあたしはお節介かとは思いつつ、一言だけ呟いた。

「採用でいいんじゃないですか？」

「そうか？」

あたしの言葉に、宮坂さんは確認をするように、一応の意見を取り入れようとあたしに問い返してきた。

ちよつと前まで帰れだとか、いらないだとか言つてたくせにガツツリ頼るつもりなんだから、なんというか、宮坂さんらしい。

「受け答えは緊張の範囲だと思いますし、そもそも業種に興味があるってことはそれな

りにモチベーションもあるってことじゃないですか」

「……そうだな、よし」

正直、あたしが口を挟んでいいことなのか、って言われたらよくないんじゃないかって思う。仮にもあたしはなんの責任もない学生バイトなわけで、面接とか採用とかの人事には社員としての責任が必要で、冷静に考えれば、あたしが口を出すこと事態がおかしいことで。

——宮坂さんは採用を決めた。あたしの口添えがなくても決めてたかもしれないけど、そうじゃないかもしれない。チリつと胸が焦げるような痛みを感じた。

「んじゃあ美咲はまずレジだな、販促は？」

「大丈夫」

「ならよし、接客行ってくる……ってどうした？」

その痛みが嫌で、思わずあたしは宮坂さんの手を掴んでいた。チリチリする、胸が痛い。最近のあたしは、出過ぎてる気がする。

世界を笑顔に、そんな夢に当てられたあたしの気の迷い？　ところが、みんながいなくて、あたしはまだまだ、こんな弱い人間なんだ。

「今日」

「ん？」

「やっぱり……泊まっても、いい?」

弱いから、あたしはこの九歳年上の幹人さんに依存する。こころたちがいる時のあたしと、幹人さんを助けてるあたしの奥底に眠る、こころたちに、幹人さんに必要としてほしいと泣きじやくるあたしがいる。

——自分の存在意義がわからなくて助けてと叫ぶあたしの頭を、幹人さんは一つの溜息と共にちよつとだけ乱暴に撫でてきた。

「前に言わなかったか?」

「でも……」

「好きにしろ。お前はあそこで、ただいまって言っただけいいし、おかえりって言っただよ」

「ばーか、と言われてあたしは少しだけむっとした。ばーかって言いたいののはあたしだし、ばーか。」

なんて言いたいけど、その前の言葉に胸がほわんと温かくなつたから何にも言わないでおく。ただいまって言ってくれて、おかえりって言っただけいい。あたしもただいまって言える場所。あたしの居場所だ。

「ごめん……あたし」

「オムライス」

「へ？」

「今日のメシはオムライス、今俺が決めた」

「……作るの、あたしなだけどね？」

そりやそうだ、俺はキレイに包めねーもん、と子どもみたいに幹人さんが笑った。それと同時に、好きにしろって言葉より深く、あたしの胸に安堵が広がっていった。それじゃあ、今日はちゃんと時間通りに上がるでしょう。

先に作って、お風呂沸かして、おかえりって言いたいから。

「ほら、もう出勤時間とつくに過ぎてる。行つてこい」

「……はいっ」

あたしのアイデンティティは、それだけですっかり元通りになった。ちょうど接客に宮坂さんと呼ばうと事務所に来てたバイトの女子大生のヒトに、もう用事終わった？とすれ違いざまに聞かれた。

——まさか、聞いてたの？ そう思つて慌てたように振り返ると、彼女はさあね、と笑つて事務所に入つていった。え、なにそれ怖いんだけど。

「……まあ、いいけど」

あたしとの仲を幹人さんは絶対に否定するし、たぶん事実としてあたしに女としての興味なんてこれっぽっちもないんだろうけど。

いつも言うその九歳差は、あたしの中でそれほど重要なものじゃないってことに気づくのは……いつなんだろ。あたしがちやんと言わないと気付かなさそうなのは、なんか好意にニブい幹人さんらしいけど。ばーか。

止まらない幸福

あたしはどうしてあたしなの？ どうしてあたしじやダメなの？ そんな風に泣きじゃくる。膝を抱えてうずくまる。あたしが正しくないから、正しいのはあたしじやないから、そんな黒いモヤがあたしを覆っていく。寒い、冷たい、あたしの体温を奪っていく。

——それを覚えてくれた。あたしに温かい逃げ道と、温かい優しさをくれた幹人さんが、あたしに正しくない生きる意味をくれた。

幹人さんがたがいま、と笑う。あたしは、それにおかえりと返事をする。

まるで子どもみたいな夫婦ごっこをあたしと幹人さんが始めてもう、四ヶ月が過ぎた。冬は終わって、新しい春が来て、それでもあたしと幹人さんの距離は変わらない。

——いつか、幹人さんは恋人を作って、あたしは夢から覚めなきやいけない時が来る。どうしても埋まらない九歳差は、いつかあたしを突き落としていくんだ。

「奥沢さん、奥沢さん？」

「——あ」

未来、なんていう名前だけは一人前な真つ暗闇を落ちて、墮ちて、オチテ、あたしは

そこでようやく意識を現実に戻すことができた。目覚めた先には同級生の市ヶ谷さんの顔。心配そうな顔をしてあたしを覗き込んできた。

——既に放課後で、あたしは寝てたということがようやくわかった。そっか、今日はこころと約束してなかったから、起こされることもなかったってわけか。

「大丈夫か？　なんかうなされてたみてーだけど」

ちよつとだけ乱暴な言葉遣い、なのにお淑やかな……若宮さん風に言うなら大和撫子、みたいな雰囲気がある市ヶ谷さんは、少し誰かに似ていてあたしはほつとしたようになんでもないと首を横に振った。

「ちよつと悪夢を見た……みたい」

「みたいって」

「あんまり覚えてない……あ、もう忘れちゃってる」

ほつとしたせいも、急激に夢の内容が思い出せなくなっていく。なんだよ、心配させんなよって言う市ヶ谷さんにあたしはありがとって返事をした。

——無性にあのヒトに、幹人さんに会いたい。今日はバイトもなかったけど、部活終わったら行こうかな。

「んしよつと、それじゃああたし、部活行ってくるね」

「おーう」

「……ありがとうね、市ヶ谷さん」

別に、と市ヶ谷さんはあたしから視線を逸らしたまま、手を振ってくれた。本当にありがとう。そうお礼を言いながら教室を出て、あたしはスマホを取り出してメッセージを送った。今日は何が食べたい？ ってそれだけ。

それと同時に家族に泊まることを伝えた。お母さんからおつけい、ってスタンプが返ってきて、でもお礼がしたいから一回家に帰ってきてね、って続けてスタンプが送られてきた。

あたしがお礼されたいくらいなんですけど、いつも働かされてるの、あたしだし。そんな溜息をついたところで、幹人さんから、カレー食べてーと気の抜けるキャラクターのスタンプと一緒に送られてきた。

「カレーかあ」

なんか前にカレー食ったやつは口臭でわかるから最悪なんだよって愚痴ってなかった？ と返事をしそうになってそれをバックスペースキーをタップしてから、了解って返事を改めて送信した。ちゃんと歯磨きしてくれるからいつか。

「……あれ、でも今冷蔵庫の中あんまり入ってないな」

あたしは幹人さんの家にある冷蔵庫の中身を思い出す。あれは実質、あたしの冷蔵庫みたいなもので、中身なんて幹人さんは知らないと思う。じやなきやあの壊滅的な状況

でカレーなんて言ってこないし。

でも、他ならぬ幹人さんの要望だからしよーがない。あるだけ自分ちの冷蔵庫から野菜でも奪ってから、足りない分とカレー粉は買っていきますか。

「ふふ……あはは、はあ……溜息もでちゃうよねえ」

溜息を吐くと幸せが逃げるとは言うけど、こんなに胸いっぱい幸福感なんでもん、パンクする前に吐き出しとかないとき。あたしはそれはそれでどうしたらいいのかわかんなくなるじゃんか。

部活をしながらも、あたしは何回も何回も溜息を吐き続けた。夜のことを考えて、あのヒトの顔や声を思い浮かべては、溜息をついたのだった。

部活が終わって、ひとまずは言われた通りに家に帰る。泊まるねって連絡を入れるたびに思うんだけど、そんなでいいのかウチの親は。まあ、最近じゃミツシエルあの稼たぎし

は家に全部入れたおかげでお母さんのパートの時間を週二まで減らせたし、美咲あたしの稼あぎはちよつと貯金で残りはお小遣いだからサイフは潤ってる。その頑張りがあるからこの自由だつてお父さんは言つてた。

弟や妹には、ちよつとかわいそうなことをしてるけど。ごめんね、あんたより手のかかるヤツの相手しなきゃなんだ。

「はい、これ」

「おかし?」

「そうなの、宮坂さんにと買って買つてきたのよ」

ふふ、とお母さんはいたずらっぽく笑つてきた。我が母親ながらあざとかわいいし。割と幹人さんもお母さんにデレデレしてることもあるくらいだし。くそう、あたしの母なのになんであたしにはできそうにない魅力があるんですか、それでも三児の母かこの、と言いたい。言つたら怒られるから言わない。

「行つてらっしゃい」

「……つたく、行つてきます!」

更にカレー粉までくれたお母さんにそれだけを告げてあたしはまた外へと飛び出した。制服のままでもいいかと思つた理由は明日も学校だから。着替え何着も持つていくのはめんどいしね。下着とかパジャマならあつちにも置いてあるし。

リュックを背負って、あたしはローカル線に揺られる。幹人さんは便利だからって大きな駅近くのマンションに住んでる。一人暮らし用のマンションじゃないってところで、あたしは維持費とかを心配してるんだけど、あんまり趣味もないからって。流石にあたしが負担とは考えなかった。いくらなんでも女子高生にそれをさせるヒトじゃないから。

「よい、しよつと」

鍵を開けて家主のいないドアを開ける。おじやまします、じゃなくてただいま、と自然と口にしてからあたしは電気を点けた。暗くて寂しげだった部屋がぱつと明るくなって、あたしの帰りを喜んでくれてるみたい。おかえりと言われてる気分。

「流石にちよつと早すぎちゃったな」

幹人さんが返ってくるのは午後十時四十分ごろ。まだまだ時間は有り余ってて、お店に行つた方がよかつたかなあと思いながら制服を脱いで、あたしの部屋のクローゼットから部屋着を取り出した。着替えて、いいのにつて散々買ったのに買つてくれた部屋のベッドじゃなくて、あたしは幹人さんの寝室に入り、枕が二つ並ぶベッドに飛び込んだ。

転がりながらスマホで仕事は大丈夫？ と連絡をする。連絡をしながら、あたしは幹人さんがいつも使ってる枕に顔を埋めた。

「……みぎと、さん」

彼の匂いがする。まるで彼に抱きしめられ、慰められた時のような感覚に陥る。あのヒトはいつもいつもあたしのことを恋愛対象じゃないとか女子高生に欲情できないとか言うくせに、ううん、言うからこそ、あたしの心が迷子になると絶対、まるで子どもをあやすように抱きしめたり、頭を撫でたりしてくる。だからばーかつて思う。

——ばーかばーかつて悶々と考えているとスマホが反応した。幹人さんからの返事が来た。今日は本当に大丈夫つぽそうだ。内容には、おなか減ったというスタンプが送られてきて、思わず笑っちゃう。

「……ばーか。帰ってきたらすぐ食べれるつての」

あたしは、幹人さんに甘えてるだけなのかな。独りになるといつも、あたしは弱くなる。自分が弱いことを忘れていられるのは幹人さんの隣にいる時、幹人さんが笑顔でいてくれる時。だから、幹人さんがいない時にここにいると、いつもあたしは彼の匂いを探すものを探す。枕、ベッド、ソファのクッション、それから……時々、服、とか。そうして幸せと自己嫌悪を溜息で処理してから、あたしは幹人さんに見せるあたしになる。

「おかえり……宮坂さん」

「ただいま、美咲」

結局今日も幹人さん、つて呼べなかつたけど、一緒にカレーを食べて笑い合えたから、

満足できた。いつもありがと、なんて言われてコンビニスイーツも、あたしには過ぎたご褒美だった。

「今食わねーの？」

「うん、ホントは夜食べ過ぎると太るんだから」

「美咲は十分細いだろ」

「今はね」

ソファでくつろぎながらあんだけ動き回っててカロリー過多になることあんのかよ、なんて言ってきた幹人さん。あたしはそれが悔しくてお風呂上りの頭を幹人さんの肩に乗せた。ちよつとは意識しろって意味をこめたのに、幹人さんはどうした、なんてかわいくない反応をしてきた。ちよつとは慌てたり、ドキつとしたりしろばーか！

避けられない邂逅

休日、俺はフラフラと駅近くのショッピングモールで時間を費やしていた。映画を観て、お昼を食って、お金を使う代わりに有意義な休日を過ごす。まあ趣味って言えるものもあるわけじゃないし、貯金もしていけるくらいに稼いで……もとい稼がされてるわけだし。確かに家の維持費は高いけど、それでも誰かさんに心配されるような稼ぎじゃねーしな。

「今日は、アイツ、何作るのかな……」

無意識に呟いて、俺ははっとした。すっかり来ることが当たり前になってるんだよな。

奥沢美咲は、別に俺のカノジョでも奥さんでもなんでもない。ただ赤の他人とシラを切るには近い関係ってのは確かだ。なにせ俺の家にはアイツの部屋があって、冷蔵庫の中身だとか調味料のあるなしってのは寧ろアイツの方が詳しい。美咲専用のオーラルケアやヘアケア商品が洗面所に置いてあって、風呂上りはリビングのソファでくつろいでスマホを触ってるようなヤツ。完全に第二の家として機能してる。制服姿で行ってくるね、と言われることなんてよくある話だ。

——行つてらつしやい。まさかヒラヒラ膝上スカートの女子高生にその言葉を使うなんて誰が想像できたんだろうか。おはよ、となんの気なしに挨拶をしながらみそ汁の匂いがする朝を、エプロンを外した制服姿の女子高生と過ごすなんて誰も想像なんてできやしない。

「なんなんだろうな、俺とアイツの関係って……」

何度も考えたこと、何度考えても答えはでないけど、とにかく俺は今の生活が気に入ってる。美咲はどう考えてるんだろうか。嫌だったらこんなことしない、と思いたい。義務感に縛られてるんなら、それは、正すべきものだからだ。

「伸びちやうわよ?」

「あ、ああ……そう……だな……?」

ラーメンを食べながら思考の海に没していたところに、サラつとした春の日差しのような声がかかる。あまりにも当たり前のように声を掛けられたことで俺は別に誰かと一緒に来ていたわけではない、ということに気づけず反応が遅れて、一口すすつてから改めて向かいの席を見つめた。

「……だれ?」

「あら? あなたはあたしを知らないの?」

いや知りませんが、新車の美人局かなにか? それにしては若いし見た感じ制服着

てるように……制服……ううん、どう考えても見たことあるセーラー。花咲川の制服だ。確かに昼から映画を観始めてフラフラものを見てからの遅めの昼だったけど、と思つてそこでようやく時計を見たら四時過ぎてた。おやつですぬもうこれは。休みの日になると時計全然見なくなるんだよね。

——それでも、キミは誰だと言いつつになつて、俺はその子の顔をじいつと見た。流れるような金髪、楽しそうに揺れる金色の目。あどけないその顔は間違いなく、美咲のいるハロー、ハッピーワールド！ のボーカル、弦巻ころだ。

「つ、弦巻、さん？」

「やつぱり、あたしのこと知ってるじゃない！」

思い出しただけなんだけど、それでその弦巻さんがなんで俺に話しかけてきたんでしようか？ 正体がわかつたらわかつたでそれは不可解なところが多い。逆にキミは俺を知らないでしょう。

「あなたのお名前は宮坂幹人、でしょう？」

「……なんで知ってる？」

「美咲のスマホに名前があつたわ」

それで興味を持った、ということらしい。それで俺の正確な位置がわかるメカニズムはわからないがなんとなく、それは知らなくていい気がした。

弦巻さんはふふと笑ってから、ライブにも来ていたの？ と問いかけてきた。

「まあな」

「ありがとう、嬉しいわ！」

屈託のない笑顔、キラキラってよりはもう、ピカピカって感じだ。美咲はコレとバンドを組んでるのか、やっぱダウンナーでも女子高生だ。俺にはもうこんなエネルギーは浴びただけで灰になりそうだよ。

「それで、わざわざ来て、弦巻さんは何か目的でもあんの？」

「ええ、そうよ」

こんな休日のをんびり過ごす俺んとこにわざわざ来たんだからそりやそうだよな。弦巻さんは太陽の光を直接浴びせられるような笑顔を崩すことなく、まっすぐに俺にとって大迷惑な言葉を発した。

「あなたの家に連れて行ってほしいの！」

「……へ？」

いやいや、お前なに言ってるのとツツコミを入れたくなかった。この天真爛漫女子高生様はなんと、なにを考えたか俺の家を案内しろと要求してきたのだった。そんなに俺を犯罪者にしたのかこの世界はと慟哭したい。叫びたい。叫んだら捕まるけど。絶対こんな誰かに見られたら警察行きでしょ、嫌だよそんな理由で犯罪者なんて。

「どうして、俺の家になんて？」

「美咲がお昼に連絡していたでしょう？」

「あ、ああ」

映画に行く少し前の話だな。今日は部活が終わったら行くから六時くらいって言った。あんまり遅くなって真つ暗になるようなら駅まで迎えに行くって送ったんだよな。返事はばーか、だったけど。

んで、それが弦巻さんが俺の家に行きたがる理由とどう繋がるのかちつともわからな
い。

「その時の美咲、とても嬉しそうだったの！」

「だから？」

「だから、気になったのよ！ 美咲にとって素敵なことがあるのなら、気になるじゃない
？」

「あー、そういうこと……」

つまり、弦巻さんは俺の家に美咲が笑顔になれるような素敵な、それでいてカタチのある何かがあると思ってるわけね。何にもないです。俺は案外あの家思い入れがあるわけじゃない……って言ったらウソだけど、それも思い出とかそういうカタチに残らないものだし。

「弦巻さんの期待通りにはならねーと思う」

「そうなのね？」

「おう」

俺はそうやって断っておいてから性格もなにもかも全然違うタイプの女子高生を家に案内することになった。

やれやれ、美咲に連絡しておこう。部活が終わった後にも見てくれるだろ。

部活は三十分早く切り上げることができた。走れば間に合うということと部活終わりになのにダツシユをしてローカル線に乗り込んだ。やればできるじゃんあたし、なんて自分を褒めたくなったところで、スマホを確認しようとしたら、あれ？ と声が聞こえた。

これは、花音さんの声だ。

「美咲ちゃん?」

「花音さんに、白鷺せんぱい。これから喫茶店ですか?」

「そうなのよ」

吊革につかまっている先輩二人に挨拶をする。片方はハロハピのドラムのおええな先輩、松原花音さん。そしてその隣の腹黒……じやなくてなんとなく女王様風味なおーラのあるヒトは花音さんの親友で、しかも芸能人でもある白鷺千聖せんぱい。こんな人がいっぱいいるローカル線に乗って大丈夫なのかと思つたけど、人を隠すなら人込みの中、つてことか。みんな下向いててあんまり白鷺せんぱいのことなんて見てないだろうしね。

「美咲ちゃんは どうしてこっちに?」

「あ、あー、あたしは買い物、ちよつとほしいものがあつて」

「そうなんだあ」

そんなハロハピでも痛感させられてる花音さんのふわふわオーラに癒されていると、白鷺せんぱいはなにやら意味深な笑みを浮かべてきた。え、なにこの先輩こわ。というか白鷺せんぱい市ヶ谷さんにも、なんならあの花園さんにも恐れられてるからね。あなたは何をしたんでしょうね。いえ聞きたくはないですけど。

「下手な演技ね、うふふ」

うわー、なんだこのヒト！ 魔性というか、悪魔的というか、小柄なのにそれを感じさせない大人な雰囲気があたしは苦手だ。大人っぽくない大人とかが好きなんです、あたしは。

とにかく女子高生が出しちやダメでしょその色っぽさ。

「私、実は知ってるのよ？」

「何を、ですか？」

「あなたのバイト先」

ぞわつと嫌な汗が出た。いや、なんだかんだで花音さんと仲良しな白鷺せんぱいのことだからそれを脅迫の材料とかにはしない善良なヒトだろうけど。というかあんなところになんの用事だったの、別にどうだっていいけど。ただ、このヒトには勝てないなあと思わされるから、あたしも苦手な先輩なのに変わりはない。

「ねえ、美咲ちゃん」

「あ、はい」

「千聖ちゃんの言ってたこと、今度聞かせてね……う？」

「……はい」

まー、よく黙っていられた方だと思うけどね。花音さんにはなんでもどこでも言っ
てなかったけど掛け持ちでバイトしてることも知ってるし、こころには今日、あたしの

スマホの中をうっかり見られて、バツチリ幹人さんの家に行くのバレてるし。その時の顔がものすごく不安だったけど、なんにもしてないよねこころ？ と思いながら、あたしは花音さんと白鷺せんぱいに挟まれてローカル線を過ごすのだった。

変わらない彼女

「通報する」

「待て待て、落ち着け美咲」

「落ち着いてる。これ以上ないくらい冷静だから」

——そして、何故かこうなった。なんで美咲のやつこういう時に限ってスマホ見てねーんだよ。というわけで美咲の顔から表情が消えたブリザード状態。それでスマホの緊急電話番号をわざわざ俺に見せるように110にしてグレイシヤルなアタックをしようとしてくる。それフィニッシュしちゃうから。マジでヤバいからやめてね。

「なんでこころがここにいるの!?!」

「成り行き?」

「ふーん」

「あ、待って通話ボタンは押さないでくださいお願いします美咲さん!」

これが怒りに染まった九つ年下に縋りつく二十代後半男の泣き叫ぶ図です。残念ながら警察は弱いものの味方なはずなのに容赦なく俺を断罪しようとするでしょう。これで女子高生の方から家に来てくれたんだって言ったなら精神鑑定RTAが始まる恐れ

までである。あると思います。

「……つたく、あたしが油断するとあんたはいつもいつも」

「いつも女子高生連れ込んでない」

「通報する」

「なんで？」

なんで今日こんな怒ってるの？　なんかあった？　電車で嫌な先輩に絡まれてもしたか。えらく不機嫌な様子なんだけど。そう思っていたら弦巻さんが、美咲はどうしてそんなに怒っているの？　と命知らずな爆弾を放り投げた。おいおいおい死んだわアイツ。

「別に……怒ってないけど」

「怒ってるわ！　ココがきゅーってなってるもの」

弦巻さんは眉間の皺を指した。その金色の太陽さんの言葉に美咲はむっとしたような顔の後に困った顔をして、それから全てをため込んでため込んで、それをはあく、と長い長い溜息と共に吐き出してみせた。

「……ごめん、美咲」

「別に、み、宮坂さんのせいじゃない、こころが来るって言い出したんでしょ？」

「そうよ！」

「じゃ、宮坂さんのごめんは意味わかんない」

「……だよな」

それでも何か思うところはあろうと唇を尖らせて美咲は着替えてくると部屋に引っ込んでいった。リビングに残された俺と弦巻さんは、しばらく顔を見合わせていたが、弦巻さんがふふつとまた春の日差しのような優しい笑みを見せた。なにこのちよいちよい見せてくる慈愛の瞳は。元氣っ子だと思つてたのにお嬢様みたいな上品さもあるんだな。

「美咲は、とつても心配性なの」

「……痛感してる」

そうやって苦笑いをする和弦巻さんは違うわと首を横に振つた。何が違うんだよ、と返すと弦巻さんは美咲の向かった部屋のほうを見て、美咲は変わるのが怖いよ、とつても怖がりなんだわつて言葉を足してくれた。

「美咲はあなたと一緒にいられる時間がなにより大切なもの。なかつたら美咲じゃないくらいに、大切にしているのよ」

「……そんなにか?」

「ええ、だから、それが崩れちゃうかもつて思うと、ああやつて泣いてしまうんだわ」

弦巻さんはすごくやさしい顔をする。ホントに美咲のことを見ているんだなつて顔。

俺なんかよらずっと、一年間もの間、美咲に向き合ってきたって表情で弦巻さんはだから、あなたはあなたでいなくちゃダメなのよ？」と俺に視線を合わせた。

「俺じゃなきや」

「そうあなたがいなくちゃ、美咲を笑顔にはできないわ」

「言い過ぎだろ」

「そんなことないわ、あなたは……そうね！ もつと単純に考えてもいいと思うの！ あなたがどうしたいか、美咲に、どうしてほしいのか、まっすぐそれを伝えられたら、きつともつと笑顔になれるわ」

もつと、ね。俺は今でも美咲のおかげで笑っていられてるって弦巻さんに判断されたってことか。

間違ってる。俺が笑っていられるのは美咲のおかげだ。美咲がおかえりって言ってくれるからだ。

「……つたく」

「美咲」

「ん？」

まだ唇を尖らせながら出てきたラフな部屋着姿の美咲を、呼んで、弦巻さんに、ごめんと謝っておく。

——ここからは、俺と美咲がなんとかする番だから。

「ちよつと」

「いいから」

俺の寝室に通して、弦巻さんには聞こえないようにする。聞き耳を立てられたら無意味だけど、そういうことはしないだろうし。

なにより、たぶん、美咲はあの子がいると怒れない。自分が大人でなくちゃいけないと思ってる。そんな気がしていたから。

「なに？」

「おかえり」

「……は？」

「だから、おかえりって。言っでなかつたから」

取り敢えず言いたかつたこと。くだらないこと言っで、いつもみたいに怒っでほしかつた。そういう意味で言つたんだけど、美咲はぽかんと口を開けて、その顔がにやけ顔に変わった。噴き出すのを堪えるように、でも堪えきれなくて、美咲は口許を手で押さえて笑い出した。

「ふつ……ふふ、あんた、ホントさ、ばかだよね……ふふ」

「は、はあ？ 笑うとこじゃねーから」

文句を言ってみたけどツボに入った美咲はしばらく笑い続けた。まるで安心して、堰を切ったように。

美咲は一通り笑い、そして笑い疲れたのか、ベッドに寝ころんではあく、と俺を見た。

「ふふ……ただいま……」

「美咲……」

「まだ言いたいことあるなら言えば？」

「いやそれ俺のセリフなんだけど」

あたしはしないよと美咲はすつきりしたような顔でそう言うてから、けれど不安そうに俺の腕を掴んでくる。

——美咲は一緒にいられる時間を大切にしている、か。そうだよな、いつまでもこうやってるわけにはいかねーし、俺だって転勤の可能性もないわけじゃねーもん。

「なあ美咲」

「ん？」

「俺、有給溜まってるんだけど」

「うん、それで？」

美咲はそう問い返してくる。まるで何かを期待しているような口調だった。

女子高生相手にこんなことを言っ、まるで俺が誘っているようだという恥ずかしさ

があつた。でもそれ以上に弦巻さんの言葉、単純に考えるというものが俺の背中を押していた。

「連休取つて、どつかに出掛けたり……二人で」

「二人、つて強調する必要、ある？」

「……ないな」

からかい交じりの返しに俺はやっぱり気恥ずかしくなつて苦笑いになつた。それにあたし部活もハロハピもバイトもあるんですけどー、とまで言われてしまつては俺はごめん、としか言えなくなつた。

ここに居るのも恥ずかしくてベッドから立ち上がろうと腰を浮かせた瞬間、美咲は俺の左手の指の間に自分の指を絡めて、思いつきり手を引いてきた。

「うわ、ちよ、美咲……？」

「あはは」

支えられるはずもなく、俺はベッドに逆戻り、無様に白いシートに倒れこんだ。文句を言おうと左側を見たら、美咲は今までにないくらいに嬉しそうな顔をして笑つていた。いつもとは違う、無邪気な雰囲気があつて、不覚にもドキつとしてしまう。

「どい行へっ？」

「え、あ……」

「どうせの連休なら、遠出がいいな。どこかに連れてってよ」

すっかりと絡まった指が少し動いた。甘えるような言葉は、やっぱりいつもの美咲らしくはないけど、でも、そうだよなんて納得するところはある。美咲は、まだまだ十代の女子高生だ。大人なんかじゃ、ないんだよな。

「行きてーとこある？」

「み、みき……宮坂さんとなら、どこでもいい」

そんな言葉、俺じゃないやつにしろよな。あとと思わせぶりな発言には気を付けた方がいいと思う。四年ほど歳が近かったらお前襲われてるからな、俺に。こういう美咲が少女じゃなくて女性の顔をするたびに、九歳差でよかったと思うことがある。

「んじゃあ行く場所決めるから、その間に美咲は」

「ん、ごはん作るね」

そう言うとき美咲はもぞもぞと、何故か更に俺の近くに転がってきた。懐かしい気分になるな。美咲は不安だったり不満だったり、そういうマイナスの感情があると俺に近づいてくるってクセがある。

——なにせ初めて会った日の美咲は最大値のマイナスからスタートして、このベッドで一緒に眠ってるんだからな。でも肝心の距離まで近づいてこないから、俺は溜息をつけて美咲のことを抱き寄せた。

「わっ……もう、女子高生に欲情はしない、んじやなかったんですかー?」

「してねーよ、ばーか」

「ホントかなー」

「ホントだから、今日は一緒に寝るか?」

「は?」

「は、っってお前……」

思ったよりもひどい反応をされて傷ついた。だってこのベッド、宮坂さんの匂いするもんって、そんなに臭いか? ついに俺もオッサン臭がするように……いやそんなバカなことがあるか。接客業として、さらに美咲と会ってからそれは一番気を付けてることなのに。

「ばーか」

「……なんだよ」

「やっぱばかだなんて思ったただだよ……みきとさんはホント」

「ん? なに?」

「ほら、やっぱりばーか」

後半の言葉は俺の腕に吸い込まれて俺自身に届くことはなかった。でも美咲はここで、漸く素直でかわいらしい笑顔を浮かべてくれた。そしてこころ待たせてるから、行

こつてあつさり起き上がる。もうその顔はちよつと前までの不安とか心配をしているようには見えなかつた。

「それより、忘れないでよ」

「なにを？」

「デ……えつと、旅行の話」

「覚えてるよ」

「信じたからね」

——部屋を出ると、こころはいなかつた。机の上には置手紙があり、美咲が笑顔になつてよかつた、また来るわね、という彼女らしい伝言と、それとは別にものすごく丁寧な字で、突然の訪問への謝罪と、これからもこころ様をよろしくお願いいたしますという文言が書かれていた。誰？ 弦巻さんの親……にしてはおかしな言い回しだな、と首を捻っていたらいつもこころと一緒にいて色々なことをしてくれる黒服さん、と美咲が説明してくれた。マジのお嬢様だったのかあの子。

「そうそう、明日さ、ハロハピの練習あるけど終わったら手伝いに行くからね」

「金曜だからか？」

「そ」

金曜の夜は忙しいからな。素直に言うのと美咲がいてくれるのはありがたい。そして

この言葉は明日の夕ご飯の話もしてるんだろ。練習終わりに買い出しをしてくれて、俺んちに置いてから来てくれるってことだ。それを言ったら俺はいつもどっちかでもいいって言うから、美咲は言わないだけ。でもどっちかじゃなくてどっちもってところが、美咲なんだよな。

「カンタンなのでいいよ」

「今日のはもう決まってるけど」

「明日」

「……そっか、わかった」

俺の言葉に少しだけ驚きが混じりながらも、はにかんだその顔は、まるで一番最初に美咲の手料理を食べて絶賛した時に似ている気がした。

あの時から美咲の感情は、たぶん変わらないままなんだろうな。エプロンをつけて作り始める美咲は、鼻歌でも歌いそうなくらいに口元が緩んでいた。

安定しない情緒

朝、いつもの苦手な満員電車に乗り、ほんの数分揺られて二駅ほど。俺は通い慣れちまった店へと出勤する。今日は鍵開けじゃねーから、のんびり歩いて事務所に行くのと、既に鍵開けをしていた化粧品担当の先輩がおはよーと手を振る。

「おはようございませう駒沢さんこまざわ」

「ん、宮坂は今日も元気だね」

「まあ、若いんで」

「そうね」

そうねと笑う先輩は四つ年上の今年三十路突入なんだけど、そうは見えないエネルギーがあるよな。当たり前な気もするけど俺より背も五センチくらい小さくて、あんまり年上な雰囲気がないから俺は付き合えてる気がする。年上の女のヒト、苦手だし。

「いや、にしてもさあ」

「なんです？」

「宮坂は最近ツヤツヤしてるよね、やっぱり、コ・レ？」

「違うし言い回しが古いですよ」

小指を立てる先輩に、俺はあきれ顔で返事をした。駒沢さんは美咲とも仲がいいからそういうことを言ってるんだと思う。パートさん方が出勤してきて、賑やかになる。朝礼をして、店を開けて、今日も俺の戦いが始まる。

——ここから、六連勤ほど。

「……それで、一日目から忙しくてこのザマなんですね」

「うるせー」

やるぞと気合を入れてから早数時間、さつきまで制服姿だった黒髪ボブカットが俺の上から呆れ声を降らせてくる。コイツしれつと俺の前で着替えてたけどなんで平気なの？ 俺は密かにお前が変態なんじゃないかって疑い始めてるんだけど。

「なに、コーファンする?」

「しない」

ガキの下着姿でコーファンするかっての。じゃあいいじゃんと妙に納得がいかないんだけど反論もできない理論、というよりはや暴論を振りかざしてくる。まあもう着替えちゃってるし、気にもしてないからいいんだけど。

「まあ、泊まる時は万が一見られてもいいようにしてるし」

「………どういことだよ」

「………ばーか」

なんでそこで返事がばーかなんですかねばーか。

既にタイムカードを切っている美咲は、俺に向かってだれてないで指示くださいと冷たい瞳をしてくる。ホントこの女かわいくない。

「んじゃあ……レジは？」

「今日はないよ？」　　「ううかなんも書いてないんだけど」

「なんで？」

と首を傾げる。今日のシフト作ったの駒沢さんじゃなかったっけ。あのヒトがそんなくだらないミスするようなヒトだと思わないんだけど。

じゃあわざと白紙？　　なんでこんなクソ暇な時に限って？

「じゃあ、あたしの判断でいいってことですか？」

「いやそれはダメだろ」

「じゃあ指示ください」

　　といつてもやっぱり納品も足りてるから期限チェックとかその辺かなと考えてると丁度シフトを作った駒沢さん本人が事務所のドアを開けて美咲ちゃんおはよーと笑顔を浮かべた。

その笑顔は俺にとって確実な悪意がある気するのは気のせいでしょうか。

「駒沢さん、あたしのシフト真っ白なんですけど」

「あーそれ？ 美咲ちゃんは自分の好きなようにしていいから」

「は？ ちよつと駒沢さん」

「宮坂？」

目が怖いです先輩、黙ってろってか。ええ黙らせていただきますとも。そう言つて上体を起こしてパソコンに向き合っていると、美咲は意を決したようにそれじゃあ、と俺の方を見た。なんとなく予想ができてたよ、この展開。

「宮坂さんの作業手伝いでも、いいですか？」

「うん、いいよ。じゃあそれで、宮坂も」

「……わかりました」

そう言つて駒沢さんはじゃあお先、と手を振つた。早番いいですね。俺なんかフルですよフル。たまには代わつてほしいけど、そんなこと言つたつて俺と駒沢さんじゃできることが違うので言わないでおく。

それじゃ、と更衣室に消えていく駒沢さんを見送り、俺は溜息をついた。

「……なんか、ごめんね」

「美咲が謝るイミわかんねーけど」

「だって」

あーあー、お前の泣き言とか迷いとか聞きたかねーんだけど。今業務中だし、万が一

事務所に誰か来たらなんて説明すりゃいいのかわかんねーんだからさ。

——そう思いながらも美咲、と名前を呼んで、その髪を撫でちまうのはよくねーことなんだろうけど。

「落ち着いたか？」

「……ん」

「正直手がいっぱいだから、美咲が手伝ってくれるんだったら助かる」

「……ん」

猫の手でも借りたい、というヤツだ。実際に美咲の手は頼りになり過ぎるほど頼りになるんだけどな。

しばらく撫でていてもまだ下を向く美咲に今勤務中だ、と声をかける。

「今日も泊まってくんだろ？」

「……いっ？」

「いつも言ってる。好きにしろよ」

「……ん」

最近の美咲は妙に様子がおかしいことが多い。何かあったんだろうとは思うが、俺はそこに踏み込むだけのエネルギーを持ってない。俺にとつて、美咲がかけがえのない存在だったとしても、恋人でもなんでもない、ただ夫婦ごっこをしてるだけの関係だから。

——いつまでも続く関係じゃないからな。

今日は対して手伝いにもならなかったような気がする。あたしはずっと集中できなくて、どこかで上の空だった。最近、なんか情緒不安定だ。

十時になって、お店が閉店する。事務所にあり疲れたく、とやってきたバイトのヒトがあたしを見てぱつと笑顔が変わって、美咲ちゃんもお疲れくと手を振って、タイムカードを切った。

「今日も旦那の手伝いで残業？」

「旦那……別に、宮坂さんはそんなのじゃないですよ」

「あは、照れちゃって、かわいー」

大学三年生の彼女は学生バイトなのにそれなりにいるから何かとあたしを気に入っ

てくれてる。曰く女は三度の飯よりも恋バナ、だそうでいつもあたしと宮坂さんをそういう関係に収めてからかってくる。あたしにはわかんないや。

「おい喜多見、早く着替えろ」

「はーい」

更衣室に消えていく喜多見さんを見送って、あたしはタイムカードを切った幹人さんのすぐ近くまで行く。

優しくて大きな手が、お疲れ、とあたしたかくあたしの頭を撫でてくれる。情緒不安定になったあたしにとって、幹人さんに触れてもらうというのはそれだけで安堵感に繋がる。だからって長時間抱きしめられたり、一緒に寝るのはムリ。ドキドキしすぎてどうにかなりそうだから。

「……ありがと、み、宮坂、さん」

「元氣出たか？」

「うん」

素直に頷いたあたしに幹人さんはならよし、と笑った。太陽……には届かないけどキラキラした笑顔だった。これがあたしがあげられた笑顔なんだっていうのは、ちよつと自惚れかもしれないけど。

——幹人さんが初めて笑顔を浮かべた時はもつと、無理をしてる感じだった。傷つい

たあたしに手を差し伸べてるくせに、一番傷だらけなのは彼だった。だからあたしはその傷だらけの手をとって、一緒にその傷を塞いできた。だからあたしも笑えるんだ。

「そーいえば、宮坂さんと美咲ちゃんっていつの間にか仲良しでしたけど、なんで？」

「さあな」

「えー教えてくださいよ、ね、美咲ちゃんも」

「ナイシヨです」

「うわゝアヤシイなゝ」

口には出せないけど、まず順序が逆なんですよ。バイトをして幹人さんと知り合ったんじゃないかって、知り合ったからあたしはこのバイトを始めたんです。歳の差は離れてるし、幹人さんは地元の人じゃないし、でも一緒に電車に乗るしってことで、喜多見さんは頑張つて推理しようとしてる。けどその順序が逆な限り絶対に分からないと思う。

結局考えは纏まらなかったようで、喜多見さんはお疲れ様ですと帰っていった。

「……送つてかなくていいの？」

「喜多見を？」

「うん」

喜多見さんかわいいし、こんな遅くに一人で帰らせるのはどうなのという意味を込めての言葉だったけど、幹人さんは大丈夫だろ、と駅の方へと歩き始めてしまった。なん

でそんなに、とあたしは幹人さんの前に立ちふさがる。

「この時間に美咲連れまわす方があぶねーよ」

「そう、かもだけど……」

「それに喜多見は歩いて二分とこに家があるからな」

「……そうなの？」

そう、と幹人さんはからかうように笑ってきた。

なんで知ってるのか聞いたら、ずいぶん前に送ろうと提案してたらしい。早く言つてよばか。また空回りをしたあたしに、幹人さんはそんなことより腹減つたよとまた笑つてくる。

「今日は生姜焼き」

「重いなあ」

「今日あたしはもう出かける前に食べてきてるから」

「りょーかい」

確かにこの夜に生姜焼きは重い。でも、これから六連勤の誰かさんには、倒れてなんてほしくないから。あたしなりの頑張れつて意味がこもってる。

——でも、やつぱりあたしは重いのかな、つてちよつと思ふことがある。重い女は嫌だ。もつと気楽に過ごせるヒトになりたいな。重くなつても、あたしの想いが幹人さん

に届くことは、きつとないんだろうから。

考えたくない未来

あたしは、今がすごく幸せだ。ご飯を作つてると、帰ってきておかえりつてそれを迎えるのも、一緒に帰ってきて一緒にご飯を食べるのも、その後に行つてきますつて手を振るのも、行つてらっしゃいって見送るのも、全部幸せ。あたしは幸せだ。十分に満たされてる。

——でも、幹人さんにとっては、どうなんだろう。あたしはあくまで恋人なんかじゃなくて、夫婦ごつこで、本当に幸せなんだろうか。

「なあ、美咲」

「うん？」

「……実は俺さ、この間恋人ができたんだ」

聞きたくない。聞きたくない聞きたくない。そんな幸せそうに笑わないで、嫌だ、やめて。

あたしを置いていかないで、あたしを独りにしないで。あたしを、惨めな女にしないでよ。なんでダメなの？　なんであたしじゃダメなの？　あたしだって子どもじゃない、あたしは子どもじゃない！　九歳差だから？　あたしに魅力がないから？

「だからもう……こんなごっこ遊びはおしまいにしよう、美咲」

ごっこ遊びでも、あたしは本気だったのに。遊んでたのは幹人さんだけだ。寄り道をしていたのは幹人さんだけだ。やめて、やめてやめてやめてよ！ あたしの気持ちはどうなるの？ あたしの本気はどうなるの？

「本気？ だって美咲は——」

その先は言わないで。幹人さんに言われたくないよ、あたしを助けてくれた、あたしを求めてくれたのに、それなのに！ 恋人ができた途端あたしは用済みみたいに捨てられるの？ 幹人さんにとってあたしが助けたつてことはそんなにも軽いことなの？

嫌だよ、捨てないで、あたしは幹人さんが、幹人さんが……！

「——ただ感傷を俺に押し付けてるだけでしょ？ 子どもみたいに泣き縋って、それが恋だなんて勘違いしてるだけだよ」

足元が崩れる感覚がした。彼は嘲笑う。あたしの恋を嗤う。あたしは突き落とされたように暗い奈落に墮とされていく。

必死に手を伸ばしても、幹人さんには届かない。暗い暗い底まで落ちて墮ちて、オチていく。

「美咲？ 美咲？」

そこであたしの意識は現実には引き戻された。現実、とは言うけど今までののが夢だとい

うことに、あたしはしばらく気付けなかった。目を閉じては開いて、幹人さんを見る。ソファでうたたねをしていたことも、幹人さんがお風呂に入ってたことも、思い出せないくらいに夢に没頭していたらしい。

「最悪……なにあれ」

汗びっしょり……つてほどじゃなかったけど、まだ心臓がドキドキと早鐘を打つていて、痛いくらいだった。夢か現か、あの夢にあったことが実は現実じゃないかとあたしは怖くなった。

幹人さんにカノジョができて、あたしが捨てられていくのは、現実？ それとも夢？

—— 幹人さんがあたしとの関係をごっこ遊びだと嘲笑っているのは、現実？ それとも夢なんだろうか。

「みきとさん……あたしは」

「落ち着いたか？ うなされてたけど」

動悸が収まらない、息の荒いあたしに幹人さんはホットココアを持ってきた。ありがとう、と言おうとして、こびりついた悪夢があたしを臆病にさせる。幹人さんは心の中であたしを嗤ってるんじゃないか。そんな不信感があたしの胸に広がっていた。

「いめん……」

「美咲？」

「……もう寝る」

「おい、ちよつと？」

ホントは眠りたくなかった。寝れそうになかった。

またあの悪夢を見る気がして、あたしは幹人さんにとって、ただ家事をしたり仕事を手伝ってくれる女子高生？　そこにあたしが好きだなんて言ったら、あんな反応をするの？

——また、あたしが正しくないなんて言つて、あたしを捨てるんだ。

「……ごめん、ごめんなさい……ごめんなさい」

その日を最後にあたしは幹人さんの家に行くことをやめた。幹人さんに過剰に手伝いをするのをやめた。連絡を取るのをやめた。

あたしにとってここは、帰る場所なんかじゃない。ただいまもおかえりも行つてきますも行つてらつしやいもおおはようもおやすみも、全部茶番なんだから。

あたしも、いい加減大人にならなくちゃ。大人になって、幹人さんを解放してあげなくちゃね。

——美咲が帰って来なくなつた。いや、本来は美咲の家じゃないんだけどさ。でもそれでもパツタリと来なくなつた。

最初は連絡しようとした。どうした、とか何かあつたのか、とか既読が付かなくてもそうやって俺の気持ち、みたいなのを伝えようとした。けど、これがもしもカレシとか気になる男ができたつて言うなら、話は別じゃないかと考えた。気になる男がいて、それで冬から今までにかけて通い妻してました、なんて、言いたくねーんじやねーのかなつて。

いくら俺と美咲にそういうアヤマチがなかったとしても、男にしてみれば嫌なヤツなんじゃないか。

「……やつぱり、ごっこはごっこ、つてことか」

自嘲する。夫婦ごっこをしていて、俺はどうやら少しでも、この関係に何かホンモノのようなものを探していたらしい。バカげてる。相手は女子高生だ、有り得ないだろ。

そう自分に言い聞かせていたけど、いざいなくなったらこんなにも、こんなにも空虚だとは思わなかった。もしかしたら、その空虚さを持つていたのは俺だけなのかもしれないけど。

六連勤もあとちよつとだけど、俺はまるで感情が胸からぽつかりといなくなつてしまつたように疲れたとか、悲しいだとか、そんな気持ちを感じることもなく業務に励み、そして最終日、美咲がバイトに来る日だつた。

「おはよーございます」

「おはよ」

美咲はちつとも変わる様子もなく、ダウンナーな雰囲気そのままに挨拶をして、タイムカードを切つてから更衣室へと向かつていった。

風呂上りにひどくうなされてる美咲を見つけてから久しぶりに顔を合わせたというのに、美咲は至つて何事もなかつたのように接してきた。だから余計に俺のことが迷惑になつたんだと察しがついた。

「それじゃあ喜多見は納品、結構あるからよろしく」

「りよーかいですつ」

「奥沢はレジな」

「わかりました」

それならそれでいいと指示を聞き、事務所を出ていく美咲を見送り、作業に戻ろうとすると、喜多見は少し怒ったような表情で、宮坂さん？ と椅子に座った俺の真横に立ってきた。

「美咲ちゃんとなんかあったんですか？」

「なんかってなんだよ」

「ケンカとか」

「ばーか、なんで俺がバイトとケンカしなきゃならん」

寝言は寝てから言え、と鋭いところを突いてきた喜多見をあしらおうとすると、そーゆーのは今はいいです。と逆に返された。

喜多見は前から美咲のことを気に入っていたもんな。そもそも平日とはいえ夜の時間帯を選択する女性の学生アルバイトなんてそれこそ喜多見と美咲くらいだ。それだけ会話も多かった気がする。

「あんなぼんやりした美咲ちゃん、初めて見た」

「そうか、いつもと変わらんように見えたけど」

「……それ、本気で言ってます？」

初めて見るような表情だった。いつもにこにこ、もといへらへらしてる印象のある喜多見が怒気を声に含ませている。

別に誰かに二人の関係を言いふらしたりしませんよと前置きをして、もう一度だけ喜多見は何かあつたんですか、と聞き返した。

「……なんもねーよ」

「だつたらどうして」

「俺が知りてーくらいだよんなこと。風呂上がつたらうなされてて、心配したのに自分の部屋に引きこもつて、朝はフツーに学校行つたと思つたらそのまま帰つてきてねーんだよ、そんな俺にわかるわけねーだろ」

つい、つい言つちまつた。でもここで誤魔化せる気がしなくて、俺は喜多見にぶつめた。その事実には喜多見は驚いた顔をしてから、やがてそつか、と呟いた。あーあ、一応仲が良いこと以上には誰にもバレてなかつたんだけど、美咲と同じ場所で働いてる以上、こうなるんだよなあ。

「今の同棲してるっぽい発言は、今度お食事でもしながらゆっくり訊きます」

「……おう、もう喜多見に隠すのはムリそうだからな」

「だから聞きますね、美咲ちゃんとは恋人同士ですか？」

「違う」

違う、それは確実に言えることだ。俺は美咲に恋をしたら部屋を自分ちみてーにしてていいって言つたわけじゃねえ。

——俺のただの感傷だ。それを美咲に押し付けてるだけのちっちゃな男だよ。

「……美咲ちゃんも、宮坂さんも、不器用なんですよ」

「不器用？」

「自分の気持ちを相手に伝えるのが苦手すぎて、いつの間にか相手は察してくれるだろうって逃げてるんです。そんなの、伝わるわけがないのに」

喜多見の悔しそうな、悲しそうな言葉にああ、と納得の声を上げた。俺は美咲から気持ち悪いことを聞いたことはない。逆に、俺も美咲にちゃんと言葉にしたことはないんじゃないだろうか。

でもそうだとしたら、俺はどう伝えたらいい？ 美咲はもう俺から離れていったのに。

「……カレシでもできたって、それこそ勝手に決めつけたことじゃないですか！」

「そうだな……」

「宮坂さんも美咲ちゃんもめんどくさいですね」

めんどくさいってな。俺と美咲にも色々あるんだよ。お互いバカみたいに臆病者だからな。だから夫婦ごっこで満足してたのかもしれない。

——その先、俺や美咲が別のヒトを見つけた時に、いつでも壊れてもいいように。最初はそんなつもりだったんだけどな。いつの間にか、美咲がかけがえなくなっていくん

だから、俺ってのは単純な男だと思う。

「美咲ちゃんとお話してきます。多分二人ともめんどくさい勘違いしてると思うんでっ」

喜多見はそう言って事務所から出ていった。いやありがたいけど今は納品してくれ
た方がもつとありがたいんだけどな。

残念ながらその思いは口に出していないため、喜多見には届くことがなく、俺は諦めて事務作業に戻っていった。

隠せない本音

レジ業務は暇な時はとんでもなく暇だ。退屈で、何もしてないくらいなら納品とか発注とか、事務で幹人さんの手伝いをして、それで晩御飯を……ってダメだ。

また、幹人さんのことを考えた。自然と幹人さんの家に行くことを考えてる自分に嫌悪感が湧いてきた。

バイトも、正直顔を合わせたくない。いつも通りの幹人さんを見てると、あたしの妄想してみた考えが事実だって突き付けられているようで、キツイ。

「やめよつかな……バイトも」

元々このバイトだって、幹人さんの状況を知って助けになればと思つて応募したようなものだし。ここにいる意味もないんじゃないかって思う。同時に、あたしの生活の半分以上が失われていくような感覚が、辛い。

でも、あたしがこの気持ちを持つてることが幹人さんにとって邪魔なら、あたしはもう、あそこにはいられないから。

「暇そーだね、美咲ちゃん」

「……喜多見さん」

そんなあたしの前に喜多見さんが現れた。いつも通りにここに、というよりはヘラヘラって言うてもいい、あんまり真面目じゃない態度なのに妙に圧力の感じる瞳であたしを射抜いてきた。

「サボっちゃダメですよ、納品しないと」

「納品はしなきゃだけどさ、それより美咲ちゃんかなーって」

「……あたし、ですか」

「そ、今日全然元気がないからさ」

幹人さんじゃなくて喜多見さんが来たか。

夜まで入る数少ない同性のバイト。だから喜多見さんはあたしのことをよく見てくれた。もともと納品とかレジ業務とかの指導をしてくれたのは基本的に喜多見さんだったし、だから一番最初に幹人さんとの関係に気づきかけてたのもこのヒトだった。

——ヘラヘラにやけながらさ、美咲ちゃんって宮坂さんのこと好きなの？ って訊かれた時にはどうしようかと思ったよ。

「ケンカ中？」

「……え、いや、ケンカじゃないですよ」

「そう？ だっていつもだったら視線でイチャイチャしてるのに」

「そんなことしてません」

してない。して、ないよね？　そもそも視線で会話なんてしてないし、あたしが残業した方がよさそうだって思った時に幹人さんが必死に睨んで帰ってオーラを出すくらい……って心当たりあったね。イチヤイチャしてるつもりは全然なかったんだけど。

「カレシできたの？」

「できてませんよ」

幹人さんはカレシじゃないってば、という意味を込めた一言。その内心が伝わったのか喜多見さんはほらやっぱり、と少しだけ怖い顔で笑ってきた。なに、幹人さんと何かありましたか？　なんか出てくるの遅かったし、もしかして幹人さんが何かやらかしたとか？　セクハラ？　パワハラ？　モラハラ？

そんな風に訝しんでいると、喜多見さんは急に笑いを堪えるように口許を抑え、その場にしゃがみこんだ。どうでもいいけどそれ、吐きそうになってるようにも見えますね。

「ふっ、ふふ……！　ホント、美咲ちゃんってめんどろな性格してるけど面白いよねえ」

「貶してますか？」

「褒めてるんだよ〜」

絶対嘘だ。めんどろな性格してるけど面白いって、それはあたしの中では褒め言葉に

分類しないんですよ、驚くほど褒められてる実感ないし嬉しくもなんともないです。そんなことより、カレシってどういうこと？　というか幹人さんと何の話したらそういう話になったんですか？

「……み、えつと、宮坂さんがなんか言ってたんですか？」

「いや、あはは、美咲ちゃんがカレシでもできたかもーって弱ってたから」

「……は？」

何を勘違いしてるのあのヒト。カレシ？　何がどうなってその話になったの？　そう問いかけたい気持ちでいっぱいになった。

だから幹人さんは何も言わないの？　だから追いかけてこないで、あたしを放置してるの？　ん？　あれ、幹人さんがカレシができたと勘違いしてるってことは、幹人さんはあたしのこと、迷惑だなんて思ってるってないの？

「ねね、今日さ、うちに泊まりに来ない？」

「……え？」

唐突に喜多見さんはそんなことをあたしに言ってきた。お姉さんに話聞かせてよ、なんて話したらずっぽく言う喜多見さんにあたしは疑念が絶えない。まって、幹人さんどこまで話したの？　とかどういいう流れでその話になってるの？

「その辺も知りたければ、うちに来てください」

「……ずるい言い方ですね」

ホントにその言い方はずるい。あたしはずっと、喜多見さんを羨んでる部分があるのに。今年21歳の喜多見さんと幹人さんの年齢差はあたしより遥かに縮まった五歳差。夫婦ごっこどまりの九歳差にもどかしいのに、幹人さんはいつも言うんだ。

——あと四歳差が縮まってたらなって。幹人さんが許容できる歳差は、五歳差。だからあたしは喜多見さんが羨ましいし、どこかで妬んでるのに。

「今日はズルしてでも聞きたいからだよ」

「……あたしの話なんて大して面白くないですよ？」

「面白いよ」

苦笑いをする。美咲ちゃんの恋バナーとにやける喜多見さんは、恋バナ好きでした、忘れてました。

逃げ場はないだろうと察したからわかりました、と頷いた。どのみち、幹人さんの家には帰れないし、喜多見さんが知ってることがあるなら聞きたい。逃げ出したあたしが言うのはなんだけど、いざこうやって帰らなくなると、まるで胸に穴が開いたみたい架空虚さがあるから。やっぱり依存してるなって自嘲したくなった。

——これじゃ感傷を押し付けてるだけって言われて当然だよな。

「それじゃあレジ代わるね」

「……………納品は？」

「あ……………ごめんね」

はあ、と溜息をついた。普段は結構しつかりとしてるヒトなんだけど、まあ、今日くらいはいいですよ、とあたしは喜多見さんとレジを代わった。

——そのあとに幹人さんのことを散々聞かされたあたしは、不覚にも泣いてしまうんだけど、それはまあ……………恥ずかしいから割愛させて。ただひとつ言っておくとばーかばーかって言いたくなかった。言いたい、ホントに、絶対次顔を合わせたらばーかって言いたい。言つてやる。

「仲直りしたら今度は美咲ちゃんの料理食べてみたいなあ」

「それじゃあみ、宮坂さんの家に行けば食べますよ」

「幹人さん、でしょう？」

「呼べないんですつてば！」

いつもは妹や弟がいるせいかな、喜多見さんはお姉ちゃんみたいな安心感があった。ぎゅつと抱きしめてくれて、大丈夫、大丈夫だよ、なんて子どもみたいにあやされて、あたしはうとうとと眠りにつきかけていた。

「ね、美咲ちゃん？」

「喜多見さん……………？　なんですか？」

「美幸みゆきって呼んでよ」

それが喜多見さんの名前を指すことはわかっていた。けど、いいんですか？ と問いかける。喜多見さんはもちろん、仕事中に呼んでもいいし、バイトが終わったら呼んでほしいなって思うなって微笑んだ。

「私は美咲ちゃんの味方で……宮坂さんの味方だから」

「……ダメですよ、みきとさんはあたしを女として見てませんって」

「……そうだね」

肯定された。やっぱりそうなんだろうなって思った。けど、それはあくまで強くそう思い込んでるだけって可能性もあるよ、と喜多見……美幸さんは精一杯のフォローをしてくれる。

いいんだ。幹人さんがあたしを置いていってしまいうわけじゃないと知ることができたから、思い込んでるその九歳差の壁を壊せるのは、あたしだけだから。

「美幸さん」

「んー？」

「あたし、まだ夫婦ごっこを続けます……幹人さんに、想いが届くように」

「その意気だよ、美咲ちゃん」

今まで誰にも言ったことのなかった、幹人さんを好きだって想い。それを美幸さんに

話ただけでこんなにも心が軽くなった。ヒトに怪訝な顔をされるだろう夫婦ごっこ
のことを話して、否定しなかった美幸さんに……あたしは救われていた。

——誰かとわかりあうこと。誰かを理解すること。誰かに理解してもらうこと。そ
れがきつと、笑顔を届けられるってこと。こころはそれが無自覚にできてるんだな
ってこともなんとなくわかった。

「私もライブ行きたいな。美咲ちゃんのカッコいいDJさばき、見てみたいな」
「あはは、あたしキグルミですけどね」

傷だらけだったあたしが見つけた居場所は、思わぬところで新しい縁を繋いでいた
みたいだ。美幸さんは、もうあたしにとつてただのバイトの先輩じゃなくなつてた。

でも、だからこそ少しでもヤキモチもあります。幹人さんが美幸さんには弱つてると
ころを見せたつてこと。美幸さんの方が幹人さんと働いてる期間が長いからそうなの
かもしれないけど、これからも幹人さんにおかえりつて言うのはあたしなのに、つて
思つちやうんだよね。

——寝る前に重い嫉妬を漏らしたあたしに、美幸さんは美咲ちゃんはかわいいな、
とまたあたしを抱き寄せて、頭を撫でてくれた。美幸さんの香りは甘くて、優しくて、こ
こしばらく寝るのが怖かったはずなのに、あたしはいつの間にか眠つていた。

その日見た夢は悪夢なんかじゃなくて、約束したデートをする夢だったから、あたし

は次の日の朝、すっかりその夢の内容を忘れたんだけど。まあ幸せだったことは覚えてたから、それがうれしくてあたしは溜息をついた。

止まらない紅涙

翌日、幹人さんが休みということもあってあたしはさつそく、学校が終わったらすっちに行くからと連絡を送った。

美幸さんに吐き出して、あたしはもう吹っ切れた。もう迷いたくない。迷ったら負けな気がする。

——とはいえ、いざ幹人さんと対面すると思うと溜息が出るんだけど。ああ、あたしはホントに意気地なしだ。

「美咲、なんだかお腹が痛そうな顔してるわ！」

「……そりやどーも」

実際胃が痛くなりそうなんだけど、あ、店の試供品の胃痛薬あったな……あ、でもストレス性じゃないからダメだ。つてそうじゃなくて、こころがあたしの顔を覗き込んでいた。お昼の時間、こころとはぐみと約束してたんだった。

「大丈夫だよ、こころ」

「そう？　彼と何かあったの？」

「……まあ、あったといえばあった」

「え、みーくんカレシ?」

ちようどタイムングのいいところではぐみが登場、あたしはカレシじゃないってとツッコミをしながら、中庭に移動し始めた。はぐみはなんだか目を光らせてねえねえ、こころんの言ってたカレシって誰? とあたしに疑問を投げかけてきた。うえ、はぐみって案外こーゆーハナシ興味あるんだ。しまったな。

「カレは宮坂幹人って名前なの、美咲のバイト先のヒトなのよ」

「そーなんだ!」

「ちよ、こころ」

「いいじゃない!」

よくないじゃない! あたしはともかく幹人さんは隠してきてるのに、というかそれで今日来るとか言ったらややこしいどころの騒ぎじゃないからね? そんな風にくこの口を塞ぎながらなんとかはぐみをやり過ぎていると、そーなんだ、と後ろからほんわかしした声があたしの耳朶を打った。

「その話、私も聞きたいなあ」

「……うげ、花音さん」

「その反応はちよつと傷つくよ……美咲ちゃん?」

しまった。花音さんにも説明せずに逃げてたんだ。あれ、これ薫さんも知ること

になってハロハピコンプリートの流れかな？ あはは、あはははは……笑えないんですけど。

花音さんが広げたレジャーシートにおじやましますと座って、あたしに微笑んだ。あ、あれー、花音さんもしかして怒ってます？ 怒っちゃってますよね？

「うふふ」

「……すみません。説明する暇もなくして」

「いいよ、美咲ちゃんが話してくれなかつたら千聖ちゃんと喫茶店に誘うだけだもん」

花音さん、ヒトはそれを尋問と呼びます。とんでもなく逃げ場のない中で、あたしの味方は誰もおらず、あたしはそれとなく事情を説明した。

はぐみは目を輝かせて、こころはなんだか穏やかな表情で、花音さんは納得しきれない感じであたしの話聞いてくれた。

「美咲ちゃんは、そのヒトのこと……好きなの？」

「はい……って言っても、それに確固たる自信があるわけじゃないんですけど」

「ううん、好きに自信とかいらないんじゃないかな……？」

私だって、ドラマもそういうところから始めたわけだし、と注釈してくれる花音さん。そこにはぐみがちよっとだけ憧れているように、好きになるってどんな感じ？ と訊ねてきた。うーん、そー言われるとあたしとしてもどんな感じかは言いにくいな、あた

しって特殊な恋してると思うしなあ。

「んー、なんだろ、ずーっと一緒にいたくなる……感じかな」

「そっかあ」

「あたしも、その辺あんまりわかってないし……でも、好きって気持ちはホント」

「素敵だわ!」

「……………ころ?」

あたしの照れ交じりの言葉に反応したのは花音さんでもなくはぐみでもなく、ころだった。瞳をいつもの如く、いやいつもの二割増しくらいの太陽の輝きを宿しながら立ち上がった。え、なに?

「だって、美咲の表情がとても素敵だもの!」

「……………変わってる?」

「ええ! きらきらしてるもの!」

こころには違いがあつたらしい。すごく元気いっぱいになって、こころはうずうずしだして、ついにグツと足に力を込めて芝生の上でバック宙をした。いやいや、なんで? こころは本当に時折行動が突飛でついていけない……じゃなくて!

「うくん、なんだかとも動きたくなったの!」

「そ、そっか……ごめん全然わかんない」

そんな感じで、あたしの昼休みは半ば尋問のような質問攻めで終わっていった。花音さんには今言ったことは白鷺せんぱいにも話してもいいことを伝えて、解散した。はぐみには口止めしても無駄な気がするけど一応内緒にしといてねと言い含めておいた。

——そわそわと部屋を行ったり来たりすること数分。漸くチャイムが鳴って俺は美咲を部屋に招き入れた。

そわそわすんのも、美咲が来てチャイムが鳴るのも、久しぶりすぎて、変に緊張しちまう。と、同時に話したいこと、という事前の連絡と、おじやましますという言葉に少しの痛みを感じた。

「どっどっど」

「どっどっど」

久しぶりに顔を合わせた気がするけど、その表情が俺の気のせいかもしれないけど、他人に感じてしまつて、俺はこの胸の衝動をなんとか堪えた。

喜多見からはなんのヒントも貰えなかった。いやほぼ答えに近いヒントとして、昨日の美咲と喜多見が一緒に帰っていくときに、じゃ、女二人で恋バナしますんで、と言われたからな。ただ、やつぱりいなくなるってわかるのは怖い。美咲が、いなくなるってことが怖い。

「……お茶、いるか？」

「いい」

「そっか……」

でも、俺は覚悟を決めないといけないうるかもしれない。美咲はあいつじゃないから。美咲は美咲の恋があるなら俺は嫌だと言う側じゃなくて応援する側じゃないといけなうんだから。

——二人でいつも食べていた机で向き合う。長い沈黙があつて、そんな静寂を切り裂いたのは、やはり話があると言つた美咲の方だった。

「あのさ……」

「……なこ？」

「()の間の()と……()めん」

頭を下げる美咲に、それはいいと返事をする。あのうなされた夢が何かあったなんて思ってもないし、俺としてはその時に美咲になにもしてやれなかったし、俺がごめんって言いたいくらいだ。

「みき……ん、宮坂さんは悪くないよ。あたしが勝手に、夢と現実がごつちやになっちゃっただけ」

「そうなのか……？」

「うん……実はさ」

そう言つて、美咲はやや震える声で夢の内容を教えてくれた。いつもの日の中で俺が突然美咲に対して恋人ができたことを告白する夢、美咲のことを感傷を押し付けてるだけの夫婦ごっこだと断じた夢を見たこと。その間に何かを隠してるような感じがあつたけど、俺が予想してたこととは全く逆の言葉に、驚きの声を上げてしまった。

「……どしたの？」

「いや……てつきり」

「あたしにカレシができて愛想を尽かしたと思つた？」

「……喜多見から聞いたのか」

うん、と返事をする美咲。おのれ喜多見、アイツ美咲にべらべらとしやべりやがつて。恋バナつても完全にブラフじゃねーか紛らわしい言い方だな。

——だが、その肯定で疑問、誤解、全てが氷解し、俺は笑うことができた。張りつめてたものが緩む感じがした。

「びつくりさせんなよ……俺は、美咲がてつきりそれで今までの関係がヤバくなったのかと」

「……それで、あたしの前ではフツーでいようとしたの？」

その問いかけに俺はそりゃあな、と答えた。美咲が俺のことをなかつたことにしねーと新しい恋が始められねーってんなら、俺はそういう態度を取る。そう決めてたからな。

すると、美咲はばーかと肘をついて笑った。

「寂しいならそう言つてよばーか」

「なんだと？ だいたいお前が——」

「——あたしは寂しかった」

お前が何も言わねーから、と大人気なく詰ろうとしたところで、美咲は急に年下の顔で内心を露わにしてきた。

じつと俺を見つめ、その瞳がだんだんと潤んでいく。涙が溜まって、頬を伝い始めていた。

「あたし、みきとさんに、きよぜつされた……って思つて、寂しかった……っ、寂しかった

た……から」

「……美咲」

「どこにもいかないで……あたしの、近くにいて……みきとさん」

項垂れた頭に手を伸ばして撫で、それじゃ足りない俺は机の反対側まで行き、美咲を抱き寄せた。

——あの時だって、初めて美咲と会った時だってこんなにわんわんと泣いたりしなかった。堪えるように、押し殺すように鼻を鳴らしていた。それだけは鮮烈に記憶に刻まれてる。なのに、目の前にいるコイツは、まるで幼い子どものように声を上げて泣いた。俺の腹に顔をうずめて、安心したようにしばらく泣き続けていた。

「……あはは、こんなにめっちゃ泣いたの、久しぶりかも」

「ごめんな美咲……俺」

「いーの。あたしはもう謝ってほしいわけじゃないからさ」

「……わかった。ならもうちよつと甘えてもいい」

「ダメ、今日はご飯作らないと。ドーセロクなの食べてないでしょ?」

凶星だったから何も言えなかった。けど、美咲も嫌がってる様子はなかったからお願いするよと笑った。

——じゃあパスタね。トマトソースの。そうやって目元を赤くした美咲が笑って、立

ち上がって、最後に一度だけ俺に抱き着いてからいつものようにフライパンを取り出していく。

初めて作ってくれた時と同じトマトソースのパスタは、今日は少しだけしよっぱかった気がした。

収まらない狂騒

「おはよーございませ……って、おやおやあ？」

喜多見は事務所に入ってくるなり口許に手を当ててにやにや笑いをしだした。ああ、はいはい、仲直りしましたとも。喜多見の目論見通りで大変よろしゅうございますね。俺がケンカつてことになるのか、とりあえずギクシヤクしてた相手の奥沢美咲は、喜多見よりも早くに来て、俺の隣で事務作業に口を出している最中だった。

「すっかり仲良しかあ」

「美幸さん、おはよーございます。おかげさまで」

「よかったよかった」

あれ以来、美咲はふつきれたように俺の傍にやってくるようになった。今だつて喜多見がいるつつうののに、俺の肩に美咲が頭を置いてるんだからな。喜多見はものすごい輝く笑顔で俺の方を見てきた。

「喜多見が期待してるようなことはないんだけどな」

「えー」

「ごめんなさい、期待外れで」

美咲も口添えをすると、そんなことないよー、と美咲に抱き着いた。そのせいで自然と距離が近くなった喜多見から、ほっとするような甘さのある香り、鼻腔をくすぐった。美咲のなんつうか素朴な、甘いとと言うよりは、大分シヤンプーそのままの匂いとは違う、部屋のアロマか、それともコロンかって感じの匂いだった。

「幹人さん？」

「なんだよ」

「手が止まってる」

しまったと俺は喜多見の匂い考察から一旦抜け出していく。

——そうそう、美咲はあの時以来から幹人さんって俺のことを呼ぶようになった。何やら心境の変化があったのはわからねーけど、悪くはない。そして、今まで名前を呼ぶときにもごもご言ってた正体も判明してすっきりしたしな。

「じゃなくて、はい夕礼始める」

「はーい」

「りよーかいです」

少しだけ変わりながら、俺と美咲の日常は再び動き始めた。九歳差という壁は未だ健在な俺たちは恋人未満で、せいぜい夫婦ごっこな関係だけだな。それはそれで、俺と美咲らしくていい感じだと思うけどな。

喜多見のやつは、なーんか、思ったのと違いますね、と苦笑いをしていた。なんだよ、女子高生に手を出せてのか。犯罪者にはなりたくないんでね。

「ま、その辺の事情は今日、たつぷりと聞かせてもらいますね?」

——そうだった。すっかり忘れてたけど、今日はこの五歳年下のバイト、喜多見美幸が俺の部屋へとやつてくる日だった。

家のキレイ汚いは問題ない。なにせ暇さえありや美咲が掃除してるからな。問題はそこで話さなきやならない内容つてのがまあ……俺や美咲にとつては少しだけ辛い内容つてだけで。喜多見のやつはそんなことだと微塵にも考えてねーのが悪い。

「とりあえずレジ行ってこい」

「はーい」

へらへらとしてるようで、あの時の反応はやっぱり俺が信用して仕事を任せてるヤツの一人なんだなって印象なんだけどな。接客をしながら俺はなんの気なしに、プライベートに近づいてきた喜多見を観察していた。

すると、後ろから背骨と筋肉の間を小突かれ、俺はそのあまりの痛みに目を見開いた。

「いつ……なにすんだよ、みさ、奥沢!」

「別に、ぼーつとしてるんで、仕事はいーんですかゝって聞こうと思っただけですよ、宮坂さん?」

きちんと仕事では宮坂さんと呼び分けてくるクソ生意気な女子高生バイトを睨みつけるが、美咲はふっと鼻で笑ったまま納品へと向かって行ってしまった。

あの野郎、なんだかんだで俺が雇い主会社の責任者だつてこと忘れてんじやねーだらうな、やめさすぞこの。いやまあ貴重な戦力だし真面目に働くしお客の反応も上々だからやめさせれそうな要素がねーけど。

そんな裏表のある態度に俺がまた睨みつけると、今度は何故かめちやくちやご機嫌ですれ違いざまに俺にいつもの罵倒を投げかけてきた。

「ばーか」

出た出た。久々に聞くとその言葉でも最高に幸せになれるから人間の脳ってマジで案外単純にできてんだな、と思った。

なによりも美咲が俺にむかってご機嫌そうな顔をしてくるつてのがホントに最高すぎて、奥さんにデレデレしないで早く仕事してくださいとレジをやった喜多見に怒られた。奥さんじゃなくて奥沢な。

美咲と喜多見が参加してから、あつという間に四時間が経過した。事務作業をしてくれている美咲が待つ事務所の扉を開き、俺はあー、と気を抜きつつの声を上げた。そろそろ五月だから客入りが増えてきているからな、閉店間際にも結構ヒトが来る。みんなゴールデンウィークには出かけるか一歩も出かけねーかの極端な二択なんだなと思いき知らされた。接客業に連休はありません。

「さて、じゃあ道案内よろしくね美咲ちゃん」

「りよーかいです」

「いや家主俺なんだけど」

なんだかんだでこの三人で上がることが多かったが、こうして喜多見まで同じ方面を歩いて電車に乗るといふのは初めてだから新鮮な気分だった。全部知ってて、事情を説明してほしいだけって喜多見が相手とはいえ、当然俺は美咲に対してぎこちない態度になつてしまう。

「なあ美咲、今日は何作るんだ？」

「……ふふ、ばーか」

「ばかってなんだばかって。お前はばかでも作るのかよ」

「いやいや。なんか幹人さんがいつもと違うから言いたかっただけだから」

「いやそれでばーかをチョイスする意味くないか?」

「なんでもいいでしょ、ばーか」

「お前また」

けど美咲の煽り文句がきつかけで圧倒言う間に演技をはがされ、喜多見はその様子が心底おかしかつたのか声を押し殺して笑っていた。いやそこで笑われるのは納得できない。おかしな要素どこにもなかったはずなんだけど。

「ホントに二人は夫婦ごっこしてきたんだなあって思ったら、笑えてきちやいますね」

「愚かしくてか?」

「そんな怖い言い方しないでくださいよ。楽しいんですよ、見てて」

楽しいも意味がわからないから。美咲はこんなしよっちゆうですよ、なんて喜多見に言いつけていた。やめろ、俺が九歳差と同レベルでケンカしてるバカだと思われるだろ、と思つたら既に思われてる気がした。手遅れだな、こりや。

「今日は美幸さんのリクエストでハンバーグです。時間かかるんで手伝ってもらってもいいですか?」

「ホントに？ 手伝う手伝う！」

こねる、と仕事中よりも更に軽い態度で喜多見は美咲と楽しげに雑談している。美咲も、ちよつと年上の姉貴ができたかのように俺といふ時とは違う顔をしている。そして、俺もこうやって三人でいるのは、思いのほかテンションが上がることに気付かされた。

「電車代、いいんですか？」

「もちもち！ つか美咲ちゃん、定期とか使えないんだ？」

「あー、はい。だからいつも家からこのマンションまでは自転車かローカル線だし、バイクの交通費も微々たるものですから」

「えー、なんとかならないんですか？」

なつてたらとつくに申請してるっつーの、と俺は即座に返す。美咲を採用するにあつて一番店長に言われたことでもあるんだ。それをちゃんと伝えた時に、初めて美咲が俺の仕事先のバイトを希望したかを知つただけだな。

「どーやって返事したの？」

「あたしは幹人さん……当時は宮坂さんでしたけど、とにかく、その仕事が辛いなら、あの部屋と一緒に、わけさせてほしいってだけ」

「なにそれ、めっちゃイケメンな発言じゃん」

「あはは……あの時は必死でしたから」

必死だったな確かに。俺も美咲も必死だった。自分自身がこの世界にとって正しくないものなんかじゃないって証明するのに必死で、だからお互いの抱えてるものを全て分割した。そんなことをしてもお互いの重荷なんて軽減できねーのに、ただがむしやらに。

——と、その辺の話はハンバーグができてからしやべってやった。マジで余すことなく全部、冬にお互いに出逢ってから今日までやってきた愚策とそれで得られた今の安息つつー結果を、つぶさに、誤魔化すことなく。結果喜多見はマジで反省したように頭を下げた。そうなるだろうと思ってた俺と美咲はほぼ同時に言っただけだな。

「謝ってほしくて話したわけじゃないですよ」

「俺は喜多見を信用してこの話をしたんだ。美咲と俺を助けてくれたお前をな」

息の合った俺と美咲の言葉に、喜多見は笑顔を浮かべた。そして俺が先に風呂をもらい、例のごとく美咲が美幸さんの入ったお湯に幹人さん入れたくないです、なんてことを言い出したから俺が先で、美咲と喜多見が後で一緒に入った。途中で美咲の艶やかなピンク色の声が聞こえたが聞こえないフリを貫き通した。何故か美咲には顔を真っ赤にしてばかと言われたけどな。

「それで？ 私はどこに寝ればいいんですか？ ソファ？」

「いや美幸さんはあたしと一緒に寝ましょう」

「え？」

「え？」

美咲が喜多見の反応になんですか？ と問い返した。

就寝の場所はなんなら美咲と喜多見に俺のベッドを貸そうかとも提案したが美咲に拒否されたため、狭いものの美咲のベッドで二人で寝るということに決まっていた。

「美咲ちゃんって宮坂さんと一緒に寝てるんじゃないんだ」

「ね、ねね寝てませんよ!? なに言ってるんですか!」

「そうだ、美咲はこの間が久しぶり——ぐふっ」

余計なこととは言わないでと鳩尾に肘を入れられた。俺としては別になんの気なしの言葉だったがどうやら喜多見としては面白い話だったようでニマニマと笑って、あれ——この間は一緒に寝たんだあ、聞いてないなあ、と美咲を煽っていた。

——二人から三人になって騒がしくなった。そして、ここに更ににぎやかしがやってくることになる。

キーワードは金色、太陽、そして……世界を笑顔に。そうすると一冊の本が出てくるわけだ。弦巻こころ、と名前の入った本が。

放っておけない仲間

ことの始まりは、美幸さんが泊まってから少しした頃、GWが過ぎたくらいの話だった。あたしはGW中は本業のキグルミバイトにハロハピと忙しく過ごしていて、その途中にも一度花音さんに話をしたことだった。

宮坂幹人さんという人物について。花音さんは少しだけ心配そうにあたしの話を聞いていたような気がする。そしてGWが明けて、すぐに花音さんはあたしと二人きりのご飯を誘ってきた。

「……やっぱり、私、心配だよ」

「それって……あたしのことですか？」

「うん……」

箸で器用に一粒一粒豆をつまんで口に運びながら、花音さんはポツリとそう零した。正直、あたしにはその花音さんの心配、がよくわからない。確かにバイトに部活にハロハピで忙しいけど、あたしはそれをどれも楽しくてやってる。忙しいってよりは充実してる気がする。勉強は時々幹人さんや美幸さんに教えてもらえるからむしろ成績はちよつとだけ伸びたくらいだ。

「……だからあんまりピンとこないです。花音さんの心配が」

「えつとね……そうじゃなくてね、その、相手の宮坂さんってヒト、26歳なんだよね？」

「今年でそうですね、26です」

「……九歳差、なんだよね？」

あー、えつと、なんとなく花音さんの言いたいことがわかった気がする。あたしは17歳の女子高生で、向こうは26歳の社会人。価値観も社会的責任もなにかもがかけ離れてる9歳差において、向こうがあたしを部屋に招いているということが、花音さんには怖いことなんだ。たぶんそれ以上に女子高生と夫婦ごっこなんていう特別な関係を築けてしまう20代後半の男、つてところに怖さを持つてるんだ。

「大丈夫ですよ。幹人さんは違いますから。それは確信してます」

「……そう？」

「なんなら花音さんにご飯、作りますよ？」

それは遠回しに自分の目で確かめてほしいって言葉だった。あたしがいくら擁護してても、騙されてるって言われたらそれまでだし、それこそ身体の関係とかそういうのじゃないって言っても、その真実を知ることができるのはあたしと幹人さんだけだから。

「あたしもおすすめるわよ、花音」

「ふえ？」

「こころ」

「あたしも行くもの、安心して！」

「こころ、あのさ、一ついい？ あたしと花音さんを見つけて駆け寄ってきてくれたのもいいし、難しい花音さんの背中を押すような言葉をかけてくれたのも嬉しい。嬉しいんだけどなんで？ なんでこころが付いてくることになるの？」

「あたし、まだ美咲のご飯は食べれてないわ！」

「いや昼に時々あたしの弁当食べるじゃん」

「そうじゃないの！」

「知ってる知ってる。あの時こころは用事があったから抜けただけで、本人としてはあのままあたしのご飯食べる気満々だったもんね。でもそんなころのおかげで迷った花音さんは、うん、そうだよね、と頷いてくれた。」

「こころちゃんもいるなら……自分の目で確かめてみるね」

「はい、それじゃあ今日の部活後でもいいですか？ バイトとかは……」

「大丈夫、私も今日は部活だけだから」

「あたしは家に帰ってこの間のお礼に何か渡せないか探してくるわ！」

「それじゃあチョコ系かな、あのヒト結構好きだし」

「わかったわ！」

こうして、こころは2度目の、そして花音さんは初めての幹人さんの家へ訪問することになった。しょーじき、ヤキモチを妬いてる自分もいるけど、腹立たしいことに、あたしと同じく九歳差のこころと、八歳差の花音さんは対象外だろうから、まだいいけど。それより最近美幸さんと幹人さんが話してるのをよく見かける方が気になるから今度美幸さんに問い詰めて……もとい何かあったのか訊いておこう。

連絡を受けた幹人さんは休みなのに、とぼやいていた。まあまあ、花音さんもかわい
いから目の保養にはなるよと返すと、女子高生だろーがばかと返事が来た。うっさい、
どーせかわいくないし女子高生ですよばーか！

接客業で、俺が店長代理である以上、休みの最中であつても連絡が来ることはある。
まあ絶対に社員が俺ともう一人、もしくは時々店長のどつちかがラストまでいるからい

いんだけど、それでも事務作業中でいなかったり、俺が預かってた案件だったりすると電話は来る。

「ああ、うん。悪いな喜多見」

「ホントですよ、マジで焦りましたから。こっちは新人研修中なんですよ?」

「悪かったって」

今回はお客さんの個別注文の商品に関連するものを俺が他のメンバーにフィードバックできてなかったために、予定より早くやってきたお客さんに手間取ったという文句つきで喜多見からの電話に応えていた。お客さんは全然怒ってなかったのが幸いだったな。危なかった。

「もう今日もそっち行って美咲ちゃんに癒してもらおっかな」

「今日は美咲の友達が来るんだ、悪いな」

「うへ、じゃあまた今度ですね」

「美咲に言えば、それは」

それで機嫌が回復した、というか満足したらしい喜多見はそれじゃあ失礼します、と電話を切った。一応美咲に連絡しておこう。最近新人バイトの話をよく聞くが、俺より一応同性の声を聞いたほうがいいだろうからな。

———そういうや、美咲も先輩か。ちよつと前まで、四月のバイトが入ってくるまで美咲

が一番後輩だったんだよなと思いつつながら俺は最近賑やかになったバイト先を思い浮かべた。合計で新人が三人。これで美咲が店に出てまで残業することも減らせるわけだ、安心安心。

「ただいまー」

「え、み、美咲ちゃん？」

と、噂をすればなんとやら美咲の声と、何やら戸惑う声が聞こえてきた。やっぱり美咲のただいまは俺を元気にしてくれる魔力みたいなのがあるな、丁度喜多見の愚痴に付き合われて溜息でもつきたかった気分だが、そんなのも吹き飛んだよ。

「お、おじやま……します……」

「おじやまするわね！」

「いらつしやい、弦巻さんに……キミが松原さん？」

「あ、はい……松原、花音……です」

確かに美咲の言った通りかわい子だなとは思いつつ、相手は女子高生なんで対象外です。十八歳未満じゃなくても彼女は紛れもない花咲川の制服で、見慣れてるけどまた美咲が身にまとってるとは違って緊張感がある。なにせ一歩間違えれば警察に通報されてマストダイ、だから。

「花音！ 緊張することはないわよ」

「いやいや、それは無茶でしょ……まあ、花音さんはテキストに座って。お茶出しますから」

「そうだわ！ チョココを持ってきたの！ この間のお礼よ！」

「お、サンキュー」

チョコつてのは美咲のチョイスだな、ナイスだ美咲。疲れた頭にはチョコが落ち着くんだよ。糖類だし疲れにはいいカフェインも入ってるしで俺は好きなんだよ。もちろん味もな。特にお高い、今こころが持つてるみたいなのチョコをつまみながらつてのは仕事の効率もよくなるから最高だな。

「松原さんもどうぞ？ 紅茶にも合っっておいしいよ」

「あ、ありがとうございます……ん、おいしい」

そしてその甘さは女の子を虜にする。特に松原さんは美咲によると喫茶店巡りが趣味らしく、同時に紅茶党だ。紅茶党つてことはチョコレートは大体合うんだよな。そう思っつて甘味と一緒に飲むとおいしいって勧められた種類のヤツを買っつてきただけはある。

「あんまり食べないでよ、今作つてるんだから」

「わかつてるよ、これはゆっくり食べるんだから」

弦巻さんはわくわくといった様子で美咲の料理を眺めてて、俺はその間に松原さんと

向き直った。おどおどして、でも後輩であり仲間である美咲のことが心配で勇気をもってこんなところまでやってきた。その勇氣には報いなきやな。

「美咲は、安定してるよ」

「……え？」

「ああやっていつもごはん作ってくれて、世話を焼いてくれて、笑ってる」

「笑って……」

「めっちゃくちや素直に笑ってくれるようになった、あんなふうにな」

俺の指の方向に松原さんの顔が向く。弦巻さんに見られてすごいわ、なんてキラキラした瞳をぶつけられた美咲は、はいはいとか言いながら口許が緩んでいたし目尻が下がってた。弦巻さんもきつとそれがわかっていいるから余計にキラキラした目で見てるんだろうと思う。

——俺が美咲の笑顔のもとになってる。それだけは誇ろうって、ついこの間から決めるからな。

「そう……ですか」

「美咲を知ってる松原さんが疑う気持ちは十分にわかるし、なんならつい最近まで俺自身も疑ってたくらいだけど……俺は、松原さんが心配になるようなことはしない」

「……信じてもいいですか？ 美咲ちゃんを任せても……大丈夫ですか？」

「もちろん」

まったく、美咲は愛されてんな。ちよつと妬けるよ。こんなに美咲を見てくれる先輩がいるんなら俺なんかいらなかつたんじゃねーかとすら思えるくらいだ。

でも、理想はどうあれ現実はどうしてそんな美咲を見守って心配してくれる松原さんから、美咲を託される結果になった。夫婦ごっこなんて誰にも理解なんかされねーはずのこの関係を松原さんはわかりました、つて言ってくれた。それに俺は応えていかなきゃな。

「そろそろできるから幹人さんお皿出して」

「りよーかい」

「あ、私も」

「お客さんなんだから大人しくしてください、こころもね?」

「わかつたわ!」

こうしてまた一つ、食卓が賑やかになった記憶が刻まれた。また喜多見も来るだろうし、帰りがけに送ってつた時も松原さんも弦巻さんもまた来る、と言葉を残していった。特に弦巻さんは無用なお世辞とか社交辞令は使わねータイプだろうからな、また来るつて言ったらまた来るんだよな。そんな時はまた松原さんもよろしくと伝えておいたから、松原さんも。前の弦巻さんの時とは違って二人とも沢山話せたし、俺は満足した。

美咲は何故か妙にソファで座ってたらくつついてきたけど、はて、俺は何かミスをしたのか。聞いてもたぶんばーかと言われるのでやめとこ、ちやんと理由いえつつのばーか。

知らない昔話

幹人さんが勤めてる会社はそれなりの大きさの会社だ。同業界は需要が高まっていく中で業務提携や吸収を進めていってる、戦国時代だって言ってた。あたしがバイトしてるお店は業界の中でも売り上げがよく、幹人さん自身も安定してるからバイトをから入ってることを聞いた。

——でも、その急激に伸びていく会社にありがちなのが、人材不足。特に接客業である上に社員として最低限活躍するには資格が必要ってことで、店長さんが二店舗兼任してる時点でわかってるけど、著しい人材不足だと思う。

「あ、奥沢さんおはよう」

「ふかやわ深沢さんに、店長も」

「久しぶり、奥沢ちゃん！」

昨日シフトを出し忘れたこともあり、あたしは一旦幹人さんの家で服を着替えてからバイト先へとやってきていた。すると事務所には珍しい社員さん、噂の店長さんがここにいた。久しぶりに顔を見た気がする。というか何か問題でも起きたんですか？

「ああいや、今度のレイアウト変更は流石に僕がやらないと思ってるさ」

「なるほどです」

店長、梅丘うめがおかさんがはつらつとした笑顔をあたしに向けてきた。歳はもう50になるっていうのに、むしろ幹人さんより元気な気がする。いや幹人さんは初めて会った時よりずいぶんエネルギーギッシュになったけど。

もう一人の少し落ち着いた雰囲気うらやまの社員さんは深沢さん。幹人さんと交代で鍵閉めをしてる幹人さんより二つ年下の社員さん。深沢さんは今日のシフトにいたはず。駒沢さんもいるはずだし、社員三人つてのは人事的にどうなんだとか幹人さんがぼやいてたけど、今日はそれをするだけの意味はあつたつばいことを店長がいるということうらやまで察知していた。

「奥沢ちゃんは今日入ってる？」

「いえ、シフト提出しに来たんですけど」

「だったら、宮坂待ちつてこと？」

「そうですね」

その言葉に深沢さんが今日は喜多見さんもないからいてくれたら嬉しいんだけど、と銀縁の眼鏡の橋をくいっと指で直した。すいません、あたしとしては貴重な休みで、しかもその喜多見さんと予定があるんで。

この店の店長代理は幹人さんだから、シフトを作ってるのも幹人さん。次いで化粧品ビューティ

スタッフの駒沢さんが幹人さんがいない間に入力する係で、深沢さんが研修中、あたしと美幸さんが口を出せる立場って感じた。それにしても今日は駒沢さんもいるから社員全員集合状態かー、珍しいこともあるよね。

「あれ、美咲ちゃん」

「美幸さん」

「シフト？」

「もしかして美幸さんもですか？」

「うん」

流石に店長と深沢さんがいる空間に長居をする趣味はないのであたしは化粧品コーナーで駒沢さんと雑談をしていたら、ひよこつと大学帰りらしい美幸さんが顔を出してきた。いやあ、ギリギリまで予定がわかんなくてさー、と愚痴をこぼしながらシフトの紙をヒラヒラとあたしに見せてくる。

「こんなギリギリになっちゃったよ」

「確かにいつももうちよつと余裕めに出しますよね」

「私、結構こういうのは忘れっぽいし、もらったら出すくらいの勢いだよ」

「ですよね」

そんな風と一緒にしゃべっていると、駒沢さん、と幹人さんの声が聞こえた。さつき

のレイアウト変更の書類のようなものを片手に化粧品売り場にやってきた幹人さんはあたしと美幸さんの顔を見ると少し怪訝な顔をした。なにその顔、はームカつとする。

「シフト？」

「そうですよ」

「なんで二人で示し合わせるように」

「たまたまです」

ん？ あーこれはあれかな？ 疲れてるからあたしがいてくれてちよつと話がいけど駒沢さんや美幸さんがいるから話せなくてそんな顔なのかな？ 幹人さんの顔を伺うとぷいっと顔を逸らされた。じゃあ後でいじって……じゃなくて相手してあげようかな。

その様子を見ていた美幸さんも気付いてるから、おそらくいじられることになるだろうけど。

「そういえばさ、よかつたの？」

「なにがですか？」

「好きなんですしょ？ 宮坂さんのこと」

幹人さんにシフトを手渡し、去っていったところで駒沢さんがあたしに向かつて爆弾を放り投げてきた。なんでバレて……るのも当たり前か。美幸さんにもバレてたわけ

だし、そもそもあたしがここで働いてる理由でもあるし。それでも突然言われてしまったら顔が熱を帯びるわけで。そもそも恋愛話は苦手なんです。

だからあたしは苦笑いをしながら逃げることにした。駒沢さんも美幸さんも恋バナすきだからなあ。

「あたしは苦手だけど」

「だろうな」

「……幹人さん」

ジュースでも買って帰ろうとしたところに、今度は手ぶらの幹人さんが話しかけてきた。ひよいとペットボトルのコーヒーを選んであたしにはい、と手渡してくる。お金は後でやるからって。

「先に買っとけばいいのに」

「持ってたんだよ、飲んじやったけど」

「ばーか」

「おい、すぐ」

「だって今日は否定できなくない？」

まったく、あたしが来なかつたら補給できなかったじゃん。その辺も考えてよね、という意味をこめる。あとあたしは別にもらわなくなつて買うよ。幹人さんが困ってる

なら、あたしがなんとかしてあげる。

——だって、あたしは幹人さんが好きだから。

「あ、そうだ幹人さん」

「ん？」

「今日はちよつと重めだから覚悟しといてね」

「カツとかそのへん？」

「せーかい♪」

幹人さんはマジか、と呟いてお腹をさすった。まあ無理だったら明日でもいいよとは言つとく。あたしも美幸さんと妙なテンションになつて作ろうと思つたけど流石に幹人さんを待つてたらお腹を壊しそうなので先に美幸さんと食べる予定なので。

「すつかり喜多見は常連になつたな」

「嫌だつた？」

「いや、俺は賑やかなのは好きだからな」

やつぱり、まだまだあたしのことは保護対象くらいにしか見てない。そのおかげであたしは幹人さんの傍にいられるんだけど、それでもやつぱりあたしはごっこじや嫌だつてはつきり自覚できたから。

言葉でただ好きって言うだけじゃなくて、幹人さんに意識を変えてほしい。九歳差が

キツイのはわかってるけどさ。

「そんなことより、さつき疲れてたでしょ」

「今も疲れてるよ」

「あんまりあたしに甘えてたら美幸さんにいじられるからね？」

「うるせーはよ買いにいけ」

はいはいとため息をついてあたしはレジに並ぶ。そういえばレジの新人さんとはまだあんまりしゃべったことがないからしよーじき苦手だけど、美幸さんが多少話してくれたから助かった。流石、もう仲良くなってるんですね。

「そりゃ、夜の時間帯の指導は私がしてるからね」

「お疲れ様です」

あたしの時もすぐくわかりやすく教えてくれたし、高校生の頃からいるってだけはあ。そうだね、そういえば幹人さんも大学生からここでバイト四年して、だからそこで出会ってるから、長い付き合いなんだよね。

「あーそそ、私の指導係は宮坂さんだからね」

「……ですよね」

「ヤキモチ？」

「ちよつと」

ちよつとだけです。ちよつとだけけど、ヤキモチなんだよね。あたしは幹人さんと知り合えたのはまだ半年にも満たないくらい前だから。

そう言うのと、それじゃあ今日は私の話をしようか、と妖しく笑ってきた。それは個人的にとつても気になる。でも美幸さんの過去も十分気になる。それ以上に美幸さんから見た幹人さんが気になる。

——あ、でも、あれも話に入ってくるかな。

「実は、その話、私は全然詳しくないんだよね」

「そうなんですか？」

「だからたぶん、面白くない話になると思うよ」

「いや、大丈夫ですよ」

あたしは幹人さんのことを知りたいし、美幸さんから見た幹人さんが知りたい。だからあたしは今日、美幸さんから語られる話が楽しみすぎて仕方がない。どうしようかな、もう一品増やそうかな。

「それじゃあレッツゴーってことで」

「はい、わかりました」

美幸さんは鼻歌を歌いながら、いつもとは違う方向に、あたしと同じ方向に帰っている。暗くなつてから一人で帰るのは正直怖かったから、こうやって、同性だけど美幸さ

んがいてくれると安心する。ホント、美幸さんはあたしのお姉ちゃんみたいだ。

だから思わず、あたしは美幸さんに甘えちゃうんだけど、美幸さんはそんなあたしを嫌な顔ひとつせずに甘やかしてくれる。抱きしめてくれる時に香るほつとする甘さのある匂いが、あたしを余計にそんな気分させていた。

塞がらない傷跡

そんなに面白い話じゃないよ、と前置きをしてから美幸さんはあたしに自分が入ってきた時のことを話し始めた。高校二年生の夏にお小遣いを稼ぐ目的で入ったこと。最初はコンビニでもしようかと思ってたけど、募集をしてないと断られて、しぶしぶながら今の店を受けたこと。そしてその研修で幹人さんに出逢ったことを。

「じゃあよろしく、喜多見さん」

「はい、よろしくお願いします」

「そんなかしこまらなくてもいいよ、俺なんてテキトーさの塊だからな」

当時、美幸さんは16歳、丁度あたしと同じ高校二年生で、幹人さんはその五つ上の21歳、大学四年生だった。幹人さんは資格試験に向けて勉強中で、だから美幸さんはその後、大学生になってから資格を取ったんだと言った。

——かくいうあたしも、少し興味が出ちゃったから、落ち着いたら挑戦しようかななんて思ってる。それはさておき、今よりもまだ気楽そうに働いていた幹人さんは初めてのバイトに緊張する喜多見さんに対して、仕事を教える合間にたくさん雑談をしてくれたい。今も確かにそういうところあるよね。

「いいんだよ。全部100パーセントやろうと思つたら疲れるから、適度に、サボることだつて大事だな」

「いいんですか?」

「もちろんサボつちやダメなところもあるけどな?」

その価値観は、あたしにとっては意外だった。あの幹人さんが、誰よりも100パーセントを目指す幹人さんが、そんなことを言つていたなんて。そんな驚きを美幸さんはそりやそうだよと笑つた。

「だつてさ? 責任者が適度にサボつてもいいなんて、それは監督不十分だよ、クビ確定」

「……そういうもんですかね」

「そーゆーもん。でも、宮坂さんは自分で頑張つて頑張つて、それでもその頑張りを私や美咲ちゃんに押し付けようとはしないでしょ?」

宮坂さんはめつちやヒトに頼るの苦手だからね、と美幸さんはほんの少しの寂しさをのぞかせた。あたしは家事とかそういうの頼つてもらえるけど、美幸さんは、頼つてもらつたことはないんだ。そっか。

「なに、嬉しそうな顔してるの?」

「あ、いや……あたしのは頼つてくれるから」

「惚気だねえ」

「美幸さんには、負けたくないですから」

それは本心だ。幹人さんが信頼してるバイトの一人で、もう四年も付き合いがある異性で、かつ幹人さんがやけに具体的に示してきた最低限の年齢、五歳差の美幸さん。あたしにとっては負けたくないって思う要素ばかりだ。美幸さんにその気がなくても、幹人さんが心変わりすれば、あたしの存在価値は、あつという間になくなってしまいうから。

「それはないでしょ、第一私が興味ないし」

「美幸さんになくても……」

「宮坂さんの元カノのこと、知ってるんですよ？」

身体が強張った。この話はいつも苦手だ。あたしは肺の酸素が一気になくなったような感覚に陥った。

確かに、直接は見たことなかったけど、美幸さんと似たタイプだった気がする。だからって確定するのはよくないけど、似たタイプを好きになりそうじゃないですか。そう言った瞬間、美幸さんはそっか、と悲しい顔で言いながら、あたしが知らない事実を口にした。

「……………え？」

「やっぱりそこまで知らなかったか」

「はい……幹人さんは、教えてはくれませんか」

「そーだよね、じゃなきや真っ先に私に聞くべき案件だもんね」

そんなところで繋がっていたなんてと驚きが大きかった。でもよく考えてみると色々腑に落ちる点は多かった。幹人さんが美幸さんと仲が良かった理由も、幹人さんの家を知っている口ぶりだった理由も、でも幹人さんが美幸さんを恋愛対象にできない理由も、その一言で片づけられる。そんな衝撃的な前置きを受けて、そうそうとあたしが興味を示す話だと語り始めた。

「なあ、美幸」

「宮坂さん？ 仕事中にそれはナシって言いましたよ？」

「あ、悪い……」

「それで、何か恋愛相談ですか？」

「恋愛相談に、何かはつかねーだろ」

暇だった時に事務作業中の幹人さんと休憩中の美幸さんの会話、休憩中だった美幸さんはポテトをかじりながら画面に集中していた幹人さんの言葉に、それで？ と耳を傾けた。当時からよく元カノさんに関する相談を受けていたらしい。

「それで？ おにーさまは何が知りたいのでしょうか？」

「その呼び方やめろ……いや、俺はアイツと歳の差はそう変わらないじゃないか」
「そうだなあ、確かに二つだもんねえ」

今よりも随分砕けた会話を繰り返していく美幸さんと幹人さんの。これがつい一年前の話らしく、店長代理をやらされ始めた頃は美幸さんがサポートをしていたみたい。だから美幸さんはできることが多いんだな、という今更な気付きはあたしの中だけにとどまった。問題はその先だった。

「——年の差って、そこまで重要なことかな」

「うーん、どうなんだろうね。私は別に幹人さんくらい離れてても気にしないかな」
「俺もだな」

懐かしそうに教えてくれる美幸さんが楽しそうな顔をする。どうやらあたしが思わずむっとしてしまったらしい。わかっている、この二人がそこまで発展できない理由もわかっているけど、あたしとしてモヤっとしてしまうから。

ああもう、重要なことはそっちじゃなくて、幹人さんの言葉だ。そのセリフは、今の幹人さんからは考えられないほどにかけ離れている。

「そーだよ、宮坂さんは、前は年の差じゃなくて想いの強さが大事だろ、なんて言ってた」
「……そう、ですか」

「もしかしたら……じゃなくてほぼ確実に、宮坂さんは美咲ちゃんを遠ざけるためにそ

の言葉を使ってるんじゃないかな？」

——九歳差の女子高生に手を出すほど、落ちぶれちゃいねーよ。幹人さんの言葉があたしの脳裏で反響した。

もし、そうだとしたら、あたしがとるべき行動はもつと、もつと大きな意味を持ったものじゃなくちやいけない。そんな気がした。手遅れになる前に。

美咲と喜多見がいなくなっただけからしばらくして、俺は接客中にとある顔見知りに出逢っていた。

水色の髪をパンジーの飾りのついたヘアゴムでサイドテールにしたかわいらしい女子高生、松原花音さん。松原さんは俺を見て、あれ、ときよとんとした顔をした。

「——ここは、宮坂さんのお店、美咲ちゃんのバイト先？」

「そうだけど、美咲に用事か？」

そんな風に、なるべく周囲にはお客さんの接客を装うように問いかけてみると、松原さんは困ったように首を横に振った。

——そして、苦笑いをしながら実は、と真実を明らかにしてくれた。

「……迷子に、なっちゃって」

「迷子」

「はい……迷子」

バイト先に行きたかったらしい。バイト先ってどこから歩いてるんだキミは。どうやら極度の方向音痴らしい松原さんは迷いに迷った末にたまたまここにたどり着き、道を訊ねようとしたみたいだ。そこは賢いけど迷子になる前にできないのかそれは。

「……ここから駅までの道は？」

「え、えつと……わかりません……」

だよね、それなら仕方ないと俺は店長と深沢に事情を説明し、道案内をすることにした。駅まで連れていけば、二つ先の電車で降りて事情を教えた美咲が後を引き継いでくれるだろうと。正直制服少女と一緒にこの夕暮れの時間帯に歩くのは気が引けるが、致し方ない。そう思って歩いてみると、松原さん、というふわりとした声が聞こえた。

「……で何をしているのですか？ そちらの人は？」

「……あ、えと、先生」

怪しいものじゃありません、と俺は事情を説明しようとして振り返り、その顔に驚いた。いや驚くのは本来おかしいんだ。

その先生はこの周辺に住んでいた。その先生は松原さんや美咲が通う花咲川の教師だ。

——俺が出会わねーなんて思うほど、そいつは手の届かないところへ行つたわけじゃない。なにせ喜多見が……美幸がまだ店にいるんだからな。

「……久しぶりじゃねーか、ゆずりは 紅葉、もう先輩つてつけた方がいいか？」

「なんだ、幹人くんだったのね、好きにして。松原さんは迷子？」

「あ……はい、え、えつと知り合いですか？」

そいつは紅葉。俺の高校・大学での二つ年上の先輩で、今は花咲川の生物教師をしていらしやる方だ。

松原に先輩だと告げるとそうね、と紅葉もふわりと肯定した。苦手だな、このヒトのなに考えてんだかわかんないミステリアスな笑顔も、少し背が高めなところも、相変わらずまるでアロマみたいな優しい匂いがするところも。

「紅葉……先輩がよければ松原さんを駅まで連れてつてやってほしいんだけど」

「ええ、行きましようか」

「はい」

最後まで俺を一切視界に入れずに、杠葉は去っていった。胸が痛い。ずきずきする。棘がまだ抜けてねーことだけはわかってたけど、実際に会うとまた辛さが違うな。

——なんで？　なんでそういうことを言うの？　幹人くんは、どうして……？

最後の言葉が未だに俺の頭からは消えねーんだよ。そんな何事もなかったような顔をされんのは、キツイな。

戻らない時間

——頭が重かった。胸も痛い。そんな精神的に満身創痍になって、それでもなんとか仕事を終えて、俺は電車に乗っていた。

二駅先、降りた先には、わざわざ三人の女性が俺を待っていてくれた。

「幹人さん……」

一人はもちろん、俺の家でご飯を作ってくれてるはずの美咲、奥沢美咲。疲れと精神的な傷で回らない思考回路をなんと最低限回しながら、俺はなんでここにいるんだろうと考えた。迎えにわざわざ来てるなんて、雨でも降らねーとないってのに。

「あ、あの……大丈夫、ですか……？」

そんなことを問いかけてくる二人目の女性は数時間前に別れたばかりの松原さんで、そこでようやく俺が、心配をされているのだとわかった。後ろには喜多見の姿もあって、無言で腕を組んでる。はあ、と溜息も聞こえてきそうな不機嫌な顔色も、全部が物語っていた。

——美咲に教えたな？ と文句を言うつもりもなかった。なにせこんな顔してたらどのみちバレることだからな。

「やれやれ、お姉ちゃんに会っただけでそれじゃあ、やっぱりおにーさまが心配だよ、私
は」

「その呼び方やめろって美幸……俺はもうお前の義兄あにじゃねえ」

前のテンションで話しかけてくる喜多見、美幸に対して、俺も前のテンションで会話を
をする。ホントにいつも思うけどかわいくねー義妹いもだよな。元、だけどな。

お姉ちゃん、そうだよな、俺はお前の姉あなちゃんに会っただけなのにな。

「……話してくれるよね、幹人さんの口から、詳しい話」

「そうだな……そろそろ逃げるのは限界だな」

別に美咲に話したくなかったわけでも、秘密にしたかったわけでもない。ただ胸の棘
が消えねーから、俺は話せねーってだけだ。話すとボロボロになるくらいに、俺はまだ、
去年の冬の傷が消えてねーから。

でも、美幸がしゃべって、松原さんがその存在を口にしたのなら、もう俺は語らなく
ちやいけな。俺の口から、くだらない感傷を。

「大丈夫、私も補足するから」

「頼む、主観だけじゃアイツが悪者になる」

「もう、しよーがないおにーさまだこと」

ちよつとだけおどけてくれる美幸が、今日ほどありがたいことはなかった。美咲にも

そんな余裕はないだろうし、松原さんは完全に巻き込まれた形だ。だから、俺は今日だけは元義妹に頼ることにした。

家に戻り、沈黙を一瞬支配したが、すぐに美咲が口を開いた。

「……喜多見、杠葉先生。花音さんと幹人さんが会った生物の先生は、美幸さんのお姉さんだったんですね」

「うん」

「気づきませんでした。いや、割と杠葉先生で覚えてたんで、気づかなかつたんですけど」

「まあ、似てるとは言われるけど」

それでもまさかそんな偶然があるとは思わないよな。確かに世間は狭い。俺だつて最初は美幸が杠葉の妹だつたなんて気づかなかつたよ。実家が近くにあることは知つてたけどさ、だからつて妹がいるだなんて知らなかつたし。

「それで杠葉は……喜多見杠葉は俺の、元カノだった。というかもう、結婚するかつてところまで来てたくらいだった」

「この家がすつごく広いのは、そのせいだったんですね」

松原さんがそんなことを呟いた。そうなんだよ、杠葉と暮らしてた家だからここは美咲の部屋があつて、俺のベッドが無駄に広いのも、全部アイツがいたから。

「ここは元々、杠葉の家でもあったんだ。半年前まではアイツがこの家でのただいまもおかえりも行ってきますも全部がアイツと俺の中にあつた。」

「でも、フラれたんだ。去年の冬、クリスマスの日にな」

「……うん」

それは美咲も知つてることだつたな。美幸もそれには意外で、びつくりするほど大声で叫ばれたつけ。

すると美幸が、まるで今思い出したかのように俺の肩を掴んだ。

「それでさ、幹人さんは私が幹人さんって呼ぶと怒るようになっただよねえ、無駄にそーゆーとこしつかりしてなくていいのに」

「でもな、もう美幸とはなんの関係もなくなつたわけだし……」

「それがムカつくんだよー」

確かに俺が杠葉のカレシだつたと知ると美幸は妙に懐いてきた気がするけど、それが解消されても、つてのはおかしいだろうって配慮だつただけど、どうにも美幸はそれで数ヶ月不満だつたと。

「そんな話をしてると美咲がやや不機嫌な顔でコホンとわざとらしい咳払いをした。話を続けろという態度に、俺も美幸も若干縮こまって、話を進めていく。美咲が妙に怖い。」

「……私、なんで別れたのか聞いてない」

「関係ねーと思ってる言ってるない」

「はあ……」

溜息つかれたし。美咲もそれが知りたかったようで、俺は覚悟を決めてから当時のことを語りはじめた。

言葉にするたびに棘が刺さる。まだ全然癒えてない、けどやつと癒すアテを見つけた傷を、俺は自分から開いていった。

——クリスマスの数日前、俺は年末の仕事に追われていた。というかその年は何回か言ってるかもしれないけど、店長代理をして一年目で、ばたばたしてどうにもならなかった時期で、また杠葉も学期末で忙しかった。それでちよつとすれ違って、お互いに

フラストレーションが溜まってたのが原因だった。

「クリスマス、やっぱり仕事に行く？　なんで？」

「……ああ、深沢だけに任せるのは、なんかいけない気がする」

「そんなの……前からずつとあつたでしよう？」

珍しく、普段は温和で、いつもフラットな態度をとる杠葉が、明確な苛立ちの感情を俺にぶつけてきた。ぶつけられてもどうしようもねーだろと思つてた俺は、そこに苛立ちで返した。どっちかが、つかこの場合は俺だよな、俺が折れなかつたのが間違いだつた。

「でも、年末調整あるし、それで仕事で問題起きたら」

「……そう、わかつた」

そう、わかつた。その突き放すような冷たい一言に、じゃあなんでわかつてるくせにイライラしてんだよと言葉をかけて、喧嘩をした。前から少し喧嘩が多かつたような俺と杠葉だけど、それはいつもとは違う冷たさを含んでいた。

「杠葉……」

「幹人くんはさ、わかつてくれないよね……私のこと」

わかつてくれない、なんて言われたつて、俺はわかりたいと思つてたさ。でもあんまり表情が読めなくてわかんねーし、なんなら俺が杠葉に告白をして、なんでオツケーを

もらえたかなんてわからないし、俺に何一切伝えてくれねー杠葉のことを、わかってうとしてるつもりだった。いや、これは今でもわかってうとしてたと思ってる。

だけでももう石は坂を転がり始めていた。それが逆向きに動くことなんて一切、どうあつたつて無理なのに。

「――結局、行っちゃうのね」

「そりゃ、杠葉はわかつたつて言つたる？」

「そういう意味のわかつたじゃなかつたのよ」

「……そうかよ。まあでも別にいいだろ、クリスマスみたいな人混みがひでー時期に俺なんかと一緒歩きたかねーんじや――」

「――っ！」

そしてクリスマス当日、なるべく平静を保とうとした言葉を放つた瞬間、頬を張られた。初めてだった。初めて、杠葉の涙を見た。初めて、杠葉がこれほどの感情をぶつけているのを見た。いつだって、それこそ男女の営みの最中にすら、これほど波のある感情はなかつたというのに。

「なんで？　なんでそういうことを言うの？　幹人くんはどうして……もつと私のことをわかってうとしてくれないの？」

「……はっ？」

「私はっ、幹人くんが好きで……大好きだからこうやって一緒に暮らしてるし、両親にも妹にも紹介した、なのに、幹人くんは違つたの……？」

「俺は……俺だつて」

「信じられない……もう、幹人くんの好きなんて、ただのごっこ遊びみたいなものじゃない！」

そう言つて、俺が逃げるようにして仕事に行つた帰り、もう杠葉はいなくなつていた。翌日、美幸から杠葉が目を真つ赤にして帰つてきたことを連絡された。別れた、と言われたけど、という言葉に俺はそこで初めて、自分が杠葉に愛想を尽かされたことを知つた。

——なにもかもがどうでもよくなつて、俺もこの家から出ていこうか、そう思つた矢先のことだつた。ここから先は、松原以外の全員が知つてる話だ。美幸は聞いて泣いてたっけ。

「……なあ、お前……もう夜中だけど、大丈夫か」

「……っ、ほつといて、ください……」

ぐじぐじと泣きながら、人差し指についていた指輪を握りしめて、路上に座り込む少女に出逢つた。

寒空で、予報じやもしかしたら雪が降るかもつてくらいに寒いそこで、一夜を明かし

たら当然人間として命の危険を感じるわけで、俺は通報しようとした。だが、袖を引っ張られ、少女は首を横に振った。

「……かえりたくない」

「家出か？」

「違う、けど……いまは、そつとしておいてください」

「いやそんなこと言われても、このままじゃ凍死コースなんだけどな？」

「それなら……それでいい」

そんな自棄になったとしか言いようのない少女を半ば無理矢理引きずって、俺は強制的に風呂に入れて、下手くそな、いつもは杠葉が作ってくれたから全然何がどこにあるかもわからないまま作った不格好な料理を食わせて、事情を聞いた。んじゃあ泊まつてつてもいい、俺も、一緒だからなんて同情と感情移入で一緒のベッド、昨日まで杠葉が寝ていたベッドで抱き合って寝た。

「今更かもしれないねーけど俺は宮坂幹人、キミの名前は？」

「……みさき、奥沢、美咲」

ここから数日落ち着くまで泊まり込みになる少女、奥沢美咲との出逢いと、そして今に至る夫婦ごっこにつながつていく。

これが俺の傷。未だに引っかかって取れない棘の正体だった。

正しくない恋情

あたしは、なんて言葉をかけるのが正解なんだろう。向かいにいる幹人さんの表情がわからない。

美幸さんは美幸さんで複雑そうな顔をしてる。義兄になるって信じてたヒトと、お姉さんの両方にそんな大事な事実を数ヶ月間、隠されてきたんだから、当然だよな。

「……今考えると、くだらない喧嘩だよな。俺も杠葉も、なんであんなにイライラしてたのかわかんねーくらい、くだらない」

「そう、だね。あたしは、杠葉先生の真意は、幹人さんの言葉だけじゃ測れないけど」
「そりゃ俺もだな」

ともかく、幹人さんの話じゃ、幹人さんの視点でしか伝わってこない。幹人さんの想いしか伝わらない。だからあたしは美幸さんの方に視線を合わせた。

美幸さんならなにか知ってる気がして期待のまなざしを向けると、美幸さんは幹人さんがいる右側に視線を向けながらくだらないって思ってるのも、幹人さんだけだよと指摘した。

「……そうですよ、あの時の先生、すごく痛そうな顔してました」

「だって、普段から幹人さんに会わないようにしてたんだもん」

「そうだよな、痛いのは杠葉だって同じだよな」

その言葉にズキッと胸が痛んだ。そうだ、杠葉先生はまだ幹人さんのことが忘れられてない。勢いだけでなにも伝えれてないから当然だけど、杠葉先生の中にも幹人さんがいて……幹人さんの中にも杠葉先生がいる。

——二人はまだ、両想いのままだ。その事実にあたしの心臓は穴だらけになったみたいだった。

「幹人さんは、ヨリを戻そうとか、思わないんですか？」

気付いたら、自然とそんな言葉が口から出ていた。ホントはそんなことしてほしいわけない。そのまま忘れて、あたしのことを見ていてほしい。

花音さんも美幸さんもあたしの気持ちを知ってるから少しだけ悲しそうな顔をしていた。それをあたしが口にしなきゃいけなかったことが、苦しかった。

「……どうだろうな」

「宮坂さんは……先生のこと、好き、なんですか？」

「それがわかんねーんだよ……フラれてから、時間が止まったみてーにさ」

好きという気持ちに似たナニカはまだ幹人さんの胸の中にある。でも、それ以上にクリスマスの日、家に帰ってきて誰もいなかった失望と、怒りをずっと抱えてるんだ。

あの日の幹人さんは、手にクリスマスケーキを抱えていたから。幹人さんは申し訳な
いって気持ちちはあつたんだ、でも幹人さんは杠葉先生の怒りを量り間違えたんだ。

「お姉ちゃんの怒りは、別にクリスマスから始まったことじゃないからね」

「そう、なんだろうな」

「その辺は美咲ちゃんの時に言ったことと全く同じことなんだけど」

「……そうだな」

——言葉尽くさなかった。言葉にせずに察してほしいばかり、お互いの存在と都合の良さに甘えて、結局ちよつとしたすれ違いで決定的に関係が崩れてしまう。美幸さんが口にした言葉は、そのまま幹人さんの過去とも関係のある言葉だったみたいだ。

「巡り巡って、まさか二回同じミスをしてるなんて、おにーさまはドジだねえ」

「器用だろ」

「いやそれ全然器用じゃないから」

「……ごめんなさい」

あたしなんてそのミスの当事者なのにそうやっておどけられるとイラつとするんだ
けど。隣の花音さんがまあまあと宥めてくれてなかったらあたしだって言葉を荒げそ
うになるくらいイラつとするから。

「ばーか、ばーかばーか」

「そんな子どももみてーに」

「どーせ、子どもですー、ばーか」

子どもって言葉は嫌いだ。幹人さんに言われると九歳差に壁を作られている気がして、泣きたくなるから。

ばーか、ばーかって言葉で強がりたかったのに、ちよつと泣きそうになった。じわりと目頭が熱くなってきた。

「あー幹人さん美咲ちゃん泣かせたー」

「な、まだ泣いてませんって」

「ほら、まだってことは泣きそうになってる」

「うるせーよ外野もう出てけ」

そう言つて、幹人さんはあたしの手を引いて他の二人、特に美幸さんに向かって聞き耳立てんなよと忠告して、寝室の扉を閉めた。

——二人きりの空間、なんだか懐かしい雰囲気のまま、幹人さんはベッドに座り、あたしはその隣に座った。

「…………ごめんな、美咲」

「なにが？」

「杠葉のこと…………黙つてて」

何かと思ったらそんなことかとあたしは溜息をついた。泣きそうで、もつとこう、なんだらう、優しく抱きしめて泣かせてくれる雰囲気かなと思つたら、やつぱり幹人さんからあたしに触れてくることはない。泣いてたりしたらそりや頭を撫でてくれたり、抱きしめてくれたりはするけど。

「いいよ……辛かつたんでしょ？」

「そうだけど、よくよく考えたら黙つたまま、美咲を受け入れてたんだなって思つたらさ」

「……そっか」

あたしは全然気にしてないよ。幹人さんの辛いこと、あたしは上手に聞き出せないから。幹人さんを傷つけてしまうから。だから、あたしがしてあげるのはいつだって、傷つける言葉なんかじゃなくて、助けてあげるだけなんだ。

「ね、幹人さん」

「ん？」

「紅葉、せ……さんのことで痛いのはわかつてますけど……後ろを向くのはやめませんか？」

「そう……だな」

幹人さんが触れられないなら、あたしが触れていく。手に触れて、腕に触れて、肩に

触れて、あたしは幹人さんの頬に触れた。

もう、杠葉さんのことを聞いたあたしは止まらない。杠葉さんが傷だつていうなら、あたしはその傷を塞いでやるんだ。

「あたしは、幹人さんが好きですから……前を向いてください」

「好きつてな、お前……」

「年齢差なんて関係ない……あたしは感傷とかじゃなくて、本気で幹人さんが好きです」
「……美咲」

忘れて、なんて言わない。忘れられないのはわかっているけど、だからつていつまでも後ろを向いても辛いだけだから。

——あたしは、幹人さんを笑顔にしたい。あたしなりのやり方で、あたしなりの、間違えた正しくない愛し方で。

「夫婦ごっこじゃなくて、あたしは通い妻でもなんでもいいから、恋人でいたい。恋人として、傍にいさせて」

「……美咲」

抱きしめて、抱きしめられて、その手には確かにあたしを想う気持ちが入められていた。

——ああよかった、あたしは、許されたんだ。やっと零れた涙は、幹人さんが掬って、

そつとあたしの唇に落としてくれた。

「はあ!? うそでしょ?」

「嘘じゃないです。別にあたしもそれでいいし」

それから一夜が明けて、あたしは喫茶店で美幸さんにあつたことを報告した。あたしたちはお互いの気持ちを打ち明けた。

そして、最後はキスをした。キスまでしたんだ。ちゃんとお互いが両思いだったことを確かめ合った。

「……なのにな? 付き合っていないの?」

「はい」

「なんで?」

「なんで……? なんででしょうね」

あたしが聞きたいくらいですけど、と苦笑いをしたら溜息をつかれた。幹人さん曰く、やっぱり俺の歳で女子高生と付き合うのはそれ相応の覚悟がいるとのこと。逃げられたっぽいけど、あのまま追いかけてもいい結果にはならなさそうだし、あたしとしては、今はまだ幹人さんと両想いで満足だし、というかむしろそれでも幸せがパンクしちゃいそうだし。

「はあ……」

「いや美咲ちゃん？　溜息をつきたいのは私なんだけど」

「幸せが逃げますよ？」

「うわ今初めて美咲ちゃんに腹が立った」

とにかく、幹人さんとしてはあたしのことも大切だけど、今はまだ杠葉さんの時についた傷を引きずってるから、中途半端は嫌だったこと。

——それにはあたしも同意だ。あたしだって、まだまだ、傷は完治してないから。

「そういえば」

そんなことは美幸さんもわかってて煽ってきてると思うから、話題を転換する。アイスコーヒーのグラスを机に置きながら、美幸さんはどしたの、と首を傾げた。幹人さんの気持ちは確認した。美幸さんも別に杠葉さんのカレシじゃなくても、バイト先の先輩として笑顔でいてほしいって気持ちがあることも。

じゃあ紅葉さんは？　あの場にいなかった彼女は、幹人さんのことをどう考えてるんだろう。

「……お姉ちゃんが話したがると思う？」

「まああたしだったら露骨に話を逸らしますね」

「でしよう？」

まあそうだよ、紅葉さんにとつては思い出したくもない過去つてことだからね。つまり美幸さんすら、紅葉さんの本当の気持ちは知らないつてことだ。はあ、そうすると想定しうる最大で最悪の展開が回避されてるわけじゃないつてことか。

「美幸さんはあたしのこと、応援してくれますよね？」

「うわ、美咲ちゃん腹黒だよ、それはさ」

なんとでも言つてください。幹人さんにとつて元カノ、美幸さんにとつて家族、最悪の場合あたしは孤立無援状態になるんだから、それはなんとしてでも避けたい事態だ。それに、幹人さんが立ち直つてきた今更出てきて、はいそうですか、つて渡せるほど、あたしは大切な場所にすらほどほどの人生なんて生きていたくないから。

「はあ……複雑な立場」

「じゃああたしのは応援しなきゃよかったんじゃないですか」

「私は恋する乙女の味方だもん」

「恋バナ聞きたいだけじゃないですか」

あたしのツツコミに美幸さんは当たり前でしょと言ひ出した。美幸さんは人当りがいいし明るいのにミステリアスなところがあつて、背が高いのに胸はあるしで、男性にも女性にもモテる要素がてんこ盛りなのに本人の恋バナは聞いたことないな。

「うゝん、高校の時に一人だけかな？」

「え、そうなんですか？」

「あ、付き合つたりとかはないよ？ 高校の時にすれ違う子がいてね、名前とか全然知らなかつたんだけど——」

まるでここまで頑張つたご褒美と言ふような感じで、美幸さんは語つてくれなかつた。美幸さんの恋を教えてください。よかつた幹人さんじゃなかつたんだ、と言つたら、でも今すぐ特定の誰かつて言われたらなあ、と流し目をされた。む、ライバルはこれ以上いりませんから、その昔の恋を叶えててよ、応援してるからね、美幸さん。おねえちゃん

向き合えない二人

あたしから見た見た杠葉先生は、優しい人、って感じた。

背は高めで、二の腕や太もも、腰回りは引き締まっていて、でもかわいらしいところもあって、くるとカールした肩甲骨まである髪をポニーテールにしているのを解いてスーツじゃなくてふわっとしたスカートで街で歩いていたらさぞかわいいんだろうな、と思えた。

「では、奥沢さん、こちらの問いの答えをお願いします」

「あ、はい」

生物の時間にそんなことを考えながらぼーっと先生を見てたらにこりと笑われて当てられた。うげ、聞いてないのバレた。けど生物関連はゼミで専攻してたくらいに美幸さんがめっちゃ詳しいから答えわかっちゃうんだけどね。

「すわりと答えると先生はちよつとだけ驚いたように瞬きをしてから何事もなかったようにまた続きを始めた。

——何を考えてるかわりにくいところも、なんだか美幸さんに似てるなあと思いがら、あたしはその時間を杠葉先生の観察に費やしていた。

「……はあ」

そして費やしてたら呼び出された。なんてこった。真面目にノートも取ってるのに理不尽だ、横暴だと言いたいけど、これも何かの縁、チャンスだと思つて集めたプリントを持つて杠葉先生についていく。職員室に通され、先生はご苦労様と微笑んだ。画になる笑顔だなあとと思う。そんなことを考えていたら、どうしたの？ と首を傾げられた。んーどうしよう、美幸さん、なんか説明してたりするのかな。

「いえ……えと、杠葉先生つて、美幸さんのお姉さんなのを、つい最近知つたので……」
「……美幸？ あら、じゃああなたはあそこでバイトしているの？」

おお、一瞬だけ目が細まった。ホントに美幸さんとそんなに仲がいいわけじゃないんだね。でもあたしがそんなに知ってるわけじゃないと判断したのか、杠葉先生は家も近いのよ、なんてのんきな話をしていた。

「じゃあ今度買物に来てくださいよ」

「……妹が、美幸が買ってきちやうから、行かないのよ」

下手な嘘だ。いや、あたしが全部知ってるからそう思うのかな。幹人さんのこと、美幸さんのこと、あたしは全部知つて、実はそんな幹人さんと両想いになつたのがあつたんだなんて、思いもしてないだろう。

「美幸と、仲がいいのね？」

「まあ、時間帯被るんで、直接の先輩、みたいな感じですよ」

「あら夜なのね、夜道には気をつけないとダメよ?」

なによりびっくりしてるのはあたしが泊まりに来てたことに気づいてないことだね。確かにあの日にいたはずなのに、あたしは一度も顔を合わせてなかった。それがちよつとだけ怖かった。こんなにも明るい表情の先生に、暗いものがある気がして。

「それじゃあ、あたし……これで」

これ以上足を踏み入れない方がいい。幹人さんのためとは言え、なんかあたしの手に余る存在な気がして一歩引いた。

—— だけど、その判断は遅かった。待つて、とさつきより湿気を帯びた声が出た。引いたところからぬるりと、まるでおぞましいモノに足を掴まれた感覚があった。

「はい」

「あなた、美幸の、ううん、幹人くんの……なんなのかしら?」

「……っつ」

愛憎渦巻く、とはこのことなのかと思う瞳だった。瞳孔がさつきよりもほんのわずかに開いて、あたしを捉えてくる。背中に汗が流れる、あたしはその言葉の意味がつかめなかった。呑まれてしまった。

そうして、感情を拗らせた杠葉さんはお返事は貰えるのよね? と首を傾げた。どこ

か真つ黒な穴を覗き込んだような笑顔が、あたしの足を竦ませた。

「……誤魔化して通用、しませんよね」

「ええ……あなたと美幸が幹人くんの……いえ、私の家に行ってるの、知ってるから」

「お呼ばれ、じゃないんですかね？」

「誤魔化しは通用しない、と確認したのはあなたよ？」

お手上げだ。しまった、ラスボスにうっかりエンカウトしちゃったらしい。そろそろ暑くなってきたっていうのに、その瞳には寒々しいものを感じた。

というわけで、どこまで知ってるのかわからないんだから、あたしとしてはあんまりしゃべりたい内容じゃない。というか殺されそう。

「……まあ、今はいいわ。どうやら私のことも知ってるようだし」

あ、しまった。幹人さんとの関係を疑うべきだった。本当に紅葉さんは仕事に関しては賢いし機転が利くって話、本当なんだなって思った。そしてプライベートについては秘密主義だから、逆に相手の言動から自分のことをどの程度把握されてるかはよくわかってるってことね、怖いお姉さんですね、美幸さん。

でもさ、賢そうな言い回しで牽制するだけ。それで幹人さんを傷つけたんだってなら、言い返さないと気が済まない時だって、あたしにもあるっての。

「元カレさんとの関係を把握されただけで生徒にボ口を出すんですね」

「終わったところだよ、行く、こころ」

「ええー!」

何かを言いたそうにしてたけど、流石にあたし以外の生徒に怒りや嫉妬を見られるわけにはいかないようで、何も言わずにあたしに視線だけを送ってきた。

でも、確認できた成果はあった。同棲して結婚を考えた恋人、つてのは思いの他簡単には他人だと思えないってこと。そりゃよっほどのことがあつたらわかんないけど、少なくとも美幸さんですらそうなんだから、杠葉さんにとつてもそうだってこと。

「……大丈夫かしら、美咲」

「ん、そうだね」

「あたしは、杠葉先生も笑顔にしたいわ!」

もう一つ。この一見能天気に見えるお嬢様は実は関係者ってこと。流石にそこまで把握はできなかったみたいだけど。こころはちゃんとあのタイミングであたしに声を掛けてくれていた。

「今日はバイトはないのよね?」

「うん……こころも来る?」

「ええ、花音も、呼んでいいかしら?」

「もちろん」

あたしは、自分の気持ちを秘密にしすぎた結果一度、幹人さんを惑わせた。美幸さんが仲介してくれなかったら、きつと榎葉さんがそうじゃなかったらきつとあたしは今頃、あのバイトをやめてる。だからあたしはもう秘密にはしません。

好きなヒトを誰にも渡したくないって思うなら、ちゃんと幹人さんと向き合ってあげてください。棘を抜けるのは、榎葉さんしかいませんから。

——あたしは確かに無条件で盗られるのは我慢できないけど、だからって幹人さんに棘を残したままなんて、絶対に嫌だから。

「……」

「なあに？」

「先生も笑顔にしたいよ、あたしはさ……」

「そうね、世界のみんなを笑顔にするのよ！」

こころの宣言にあたしは強くなずいた。

やっぱり、あの日こころに出逢えてよかった。あの日、こころのハチャメチャな提案を否定しなくてよかった。諦めなくてよかった。正しくないも知ってもいいものがあると知ってよかった。あたしにとって、この明るい世界全てが、こころと幹人さんに貰ったものだから。

だったら今度はあたしが二人に、そしてみんなにその貰ったものをあげる番だから。

あたしなりの世界を笑顔にする方法、見ててね。みんなの太陽。あたしの大事な……ト
モダチ。

語る必要のない幕間

それは、語る必要がないはずの物語。俺がいて、美咲がいて、美幸がいて……杠葉がいる。それだけの物語。だから、これは俺が語る必要のない……物語には不要の閑話だ。けどどうか、知ってほしい。

——俺以外にも、美咲以外にも、幸せになりたいと叫んでいるヤツは沢山いることを。いらつしやいませ……つて美咲……それに松原さん

「こんにちは」

「どーも」

とある梅雨入り前のこと。そうは思えない湿度の低い快晴の休日の真昼間にもなつて麗しき女子高生二人が店にやってきた。一人は現在俺と半同棲状態の……まだ一応は恋人未満な九歳差、奥沢美咲。このバイトでもある彼女は片手に小さな保冷バッグを持っていた。

「それは？」

「お昼。今週はコンビニ二弁当禁止だから」

「厳しいのか優しいのか」

「優しいに決まってるでしょ？ わざわざ作ってきたんだから」

美咲の弁当、その破壊力に俺は思わずぐうつと腹を鳴らしてしまった。休憩まであと一時間、この我慢ができるかどうかとこころだな。

そんな俺に美咲はため息をついてくる。呆れた、なんて言いそうだなと思つたら本当に言われた。

「全く……これ、事務所の冷蔵庫に入れとくから」

「おう、ありがとな」

「……うん」

——そうだな、変わったところと言えば、この表情かな。前よりもストレートにわかりやすい表情をしてくれるようになった。今のは嬉しい、って感情だ。好きなヒトのことを考えて作った弁当が喜ばれてることへの、幸せの表情だった。

自分で言つててすげー恥ずかしいけど。でもやっぱ、美咲はちゃんと……って言い方はおかしいかもしれないけど、俺を想ってくれてるんだな。

「えと……それで？ 松原さんはどうして？」

「あの……迷子に……なつてて、たまたま宮坂さんのおうちに着いて……成り行きで」

「あ、そう」

松原さんは相変わらずだ。そこにいるかと思つて美咲に連絡して、ここまで付いて

きたらしい。迷子でここまで成り行き、という割には松原さんはなんだかにこにこしている。彼女はかわいらしくて放っておけない雰囲気は確かにあるけど、美咲よりも年上なんだなと感じるフシがある。美幸なんかでも感じるな。笑い方とか、仕草とか。美咲も十分大人びてると思うけど、この子はそれ以上だ。

「いつも美咲が世話になってるな、ありがとう」

「……でも、美咲ちゃんのためだけじゃないんですよ?」

「ん?」

「私は、そんなにイイコじゃないですから」

ほらな、こういうところなんだよ。時折、ものすつごく大人になるんだよ。八歳の差があるのにこんな顔されたらなんて言ったらいいのかわかんねーよ。俺はモテない男なんだね。経験が浅くてどうしようもねーんだけど。

「あの、また時々来てもいいですか?」

「それはどつちに?」

家か店か。店側としては是非いらしてください、だけど。

まあ、家つて選択肢はねーだろ、もしそうなら俺じゃなくて美咲に聞いてくれたらその日行くか行かないかって言ってくれるだろ。

「……どつちも、です……よ?」

「そっか」

「はい」

と、丁度話が切れたタイミングで美咲がお待たせ花音さんと倉庫から出てきた。それから俺がいるのを確認するなり俺の方を見て、今日の晩は？ と問いかけてきた。

なんでもいい。俺は美咲のメシならなんでも好きだからな。

「わかった、行きましよう花音さん？」

「……うん」

「じゃあまたね、松原さん」

「花音です」

「え……つと？」

「——花音ですよ、幹人さん？」

美咲がぎよつとした顔をして、俺もえつ、と声を上げた。振り返って、スカートをふわりとひらめかせて微笑み交じりにそう言い放つもんだから、俺も美咲も二の句が継げぬ、といった状態だった。

呼べ、という意味だろうか。松原さんはその場でにこにこ俺を見つめていた。

「……花音、さん」

「さんもいりませんよ？」

「花音」

「はい……それじゃあ、また会いましょうね」

隣でまた美咲が驚きと、不満を顔に出した。けど俺は松原さん……えつと、花音の呼び方への心境の変化がなんなのかも、美咲のそのヤキモチにもついていけない。いや美咲が嫉妬してるのが辛うじて分かつてる時点で俺は成長してる。

「ほほう」

「……どつから湧いて出てきた、喜多見」

「美幸」

「いいだろ、今仕事中だし」

「まあいいけど」

「つか逆に敬語使え、お客さんに不審がられる」

「はーい、宮坂さん？ これでいいです？」

文句なしだ。美幸的には文句あるっぽいけどな。けど公私は分ける。俺だってちゃんと美咲のことも奥沢って呼んでるし、美咲も宮坂さんで固定されてるからな。

んで、そんな話しに来たんじゃねーだろお前。

「そう、松原ちゃん」

「花音？」

「——気を付けた方がいいよ」

「は？」

「言い方悪いかな、気にかけて方がいいよ」

気にかける、でも悪いけど意味がわからないところあるんだけどな。返事は苦笑い交じりにおにーさまは妙に感情に対して反応が鈍いからね、とのこと。感情に対して鈍い……ううん、心当たりがありすぎて辛いんだけど。紅葉のこととかその典型だし。

「もう、今は私としてもあんまり手伝えないんだから、頑張つてよ……幹人さん？」

「わかってるよ」

心配症な義妹に言われちゃ仕方ねーなと言ったら、そういうのは敏感じゃなくていいの！ と何故か言われた。は？ いや俺お前の隠してる感情とかなんにも掘り起こせてねーんだけど、どうやら良い返しをしてみましたらしい。ううん、辛い。

どうやら幹人おにーさまさんの物語が動き出そうとしているみたい。お姉ちゃんがもの凄く焦った表情で帰ってきて、美咲ちゃんのことを訊かれた。私は美咲ちゃんの味方しちゃったから、教えらんないんだと言ったら、またすごく焦った顔をして部屋に引きこもっちゃった。

相変わらずモテモテなのに恋愛下手だ。この間も男性教師にお食事に誘われたけど断ったんだって。まあそれは私もだけど。しょっちゅうゼミの男の子に誘われるけど、全然行かない。バイトしてた方が楽しいし、お食事相手ならお兄ちゃ……んんっ、幹人さんや美咲ちゃんがいるしね。

「あ、お、おはようございませす、喜多見先輩ー」

「おはよう」

ぼーっと考え事をしていた休憩中に、五月に入ったばっかりの新人君、その中で一番やる気のある子が私に元気よく挨拶をしてくれた。

——彼は私の二つの意味で後輩にあたる人物だ。幹人さんにとっての私と同じ、大学とバイト、二つの後輩だ。そして、更に彼に限って言えば、高校でも一緒だったということがつい最近分かったところだった。

「そろそろレジ覚えたあ？」

「まだ、自信はありません……けど」

「それじゃあ今日もわかんないことあったら呼んでね」

「はい!」

これまた元気よく返事をして、幹人さんに連れられていった。

——やっぱり、あの子なんだなあって思う。高校の時は名前も知らなかった彼に、私は少し、今まで感じたことのない胸の高鳴りを感じた。なんでかわからないけど、なんだか見つけたって気分になった。

「おい」

「あらおにーさま」

「何キヤラだそれ」

「似合わない?」

「かなり」

ひどいことを言うお兄ちゃんだ、あ、幹人さんだ。わざわざ義妹に会いに来てくれたのかと思つたらもう休憩終わりだろつてただの上司からの勧告だった。つまんない。もっと私を甘やかせー横暴だーと喚いてみると、幹人さんは溜息をつけて表情を崩してくれた。

「ほら、帰りに甘いもんでも買ってやるよ、美幸」

「辛いものもいい」

「……お前な」

私は美咲ちゃんじゃないので甘いものより辛いものがいい。おかしも甘いのより辛いのあるチツプスとかの方が好きだし。

でも態度は甘い方がいいよ。私は優しくされたい！ だから頑張つて化粧とかフアツションとか駒沢さんに教えてもらったし、素材はいいからつてキレイになる努力を怠つたわけじゃない。私は私に対して優しい世界であつてほしいから。

「……ねえ、お兄ちゃん」

「なんだその呼び方」

「いいから、もしさ……私が恋煩いをしてる……つて言つたら、どうする？」

特に幹人さんには、お兄ちゃんにはあんまり辛くされたくない。

家族は少し、なんていうか家族としての繋がりが薄い。お姉ちゃんと姉妹らしい話をしたこともないし、なんならお姉ちゃんがカレシと同棲するつてなつても、嫁に行くかもつてなつても、別れたつて帰つてきても、あんまり関心がなかった。私も、あつたらいけないみたいな雰囲気だった。だからこそ、お姉ちゃんは私が幹人さんと仲良くしてたことに苛立ちみたいなのを感じてみたい。

——人間は死ぬ時は独りなんだ。そうやっていつも教えられてきた。

「人間は独りか」

「うん」

「……なんか合理主義の杠葉が生まれたとこつて感じだな」

「イヤミですかあ？」

昔、そんな愚痴をこぼしたこともある。だけど、幹人おにいちゃんさんは笑い飛ばしてくれた。そんなわけねーだろつて。私わたしがその合理主義に嫌な気持ちを持つてることに、彼は笑つていてくれたんだ。

「死ぬときは独りでもさ……人間つて独りじゃ生きていけねーんじゃねーの？」

「え……？」

「美幸や杠葉の父さんや母さんだつて繋がりを持ったわけだろ？　それで、生まれた美

幸は、杠葉つて姉を通じて俺と繋がつてる。これつて、独りじゃねーつて証拠じゃなか

「……そうだね」

優しくて甘い言葉。私にはなかった言葉。この人がお兄ちゃんだつたらいいのにと強く思った。この人のように、誰かにとつてお姉ちゃんみたいな人になりたいと思つた。だから私は、新人教育には積極的にしてきたし、恋バナを沢山聞くようになった。

——高校三年生にはもう、そんな地位は確立してた気がする。背も高めだし、言いたいことはハッキリしてきたつもりだし、頼られたつもりだ。

「……話だけなら聞いてやるよ」

「ホント？」

「どうせあれだろ？ 今来てる新人が気になるとかそういうんだろ？」

あら、お兄ちゃんにしては鋭いなあと思った。けど、このタイミングじゃ流石の鈍感な幹人さんでもわかつちゃうか。

——そう、あの子は特別。誰かのお姉ちゃんでいたいってだけじゃない。彼なら私の弱いところも受け止めてくれるかなって思ったんだ。

「私の理想の人って誰か知ってる？」

「知らん、どつかのアイドルか？」

「ううん」

それは、もつと身近にいる人だよ。独りじゃない世界で、独りでいるんじゃない、誰かに寄りかかって、寄りかかっているから優しくなれる、そんな人。

それでいて、時々酷くて泣いちやいそうなくらい、優しい人。九歳差とかそんなの本当は関係ないって言いきりたくせに、言い切れないところがある弱い人。

頼るだけじゃなくて、頼られるだけじゃなくて、私はそのどっちもがほしいから。だから、とりあえずあの子にはその私の頼りたいって気持ちを察してくれることに期待することにするんだ。

——そのために、頼らせてもらうね、お兄ちゃん？

二人きりになれない団欒

——それは大学時代のダチと飲み会をしていた時の話だった。飲み会の帰り、飲み過ぎたダチを介抱していたところ、ソイツが終電を逃したと言いつ出した。その焦りもあつてか流石にもうだいたい酔いが醒めてきたらしく、今度は顔を青くしていた。

「タクシーかあ……」

「んじゃあウチ泊まるか？ 安くしといてやるよ」

「マジで？」

そんな安請け合いはしたものの、ちよつと待てと一応美咲に連絡をしておく。今日は夜ご飯がいらねーことも伝え、それ以外に確かなんもなかったからもしかしたらいないと思いつつも電話を掛けた。

「え、今美幸さんと花音さんと一緒なんだけど」

「二人は泊まりか？」

「うん」

まづつたなと思って、頭を捻っていたところで、別に私はいいと思うよ、と美幸の声が聞こえた。

そんなのまずいだろと思ったところで別に寝るところ工夫するから大丈夫だよと美咲も言った。

「花音は？」

「わ、私は……顔は出せないと思いますけど……いいと、思います」

「あたしの部屋は鍵掛かるし平気でしょ」

まずいとか女の子三人に見ず知らずの男と一緒に泊めるのが危ないだとかそんなことは言うものの、結局手だてがあるわけじゃねーってこともあって三人の厚意に甘える結果に落ち着いた。

「え、かわいい？」

「手出すなよ」

「いや、かわいかったら……って、わかってるよそんな顔すんなって」

でもやっぱり不安だ。そう思いながら俺は自分の家に通した。

扉を開けるとおかえり、と声がある。美咲の声に俺は後ろにダチがいることも忘れてほっと一息、ただいまと声を発した。

「えっと、あたしは奥沢美咲って言います、初めまして」

「え……なあ、いくつ？」

「レディーに年齢を訊ねるのは野暮だってお前も言ってただろ」

誤魔化しておく。確かに美咲は明らかに十代ですって感じの見た目だしな。美幸とは面識があるためある程度はフランクに接していた。花音は宣言通り美咲の部屋から出てくるつもりはないらしい。

「いいな、両手に花だよ」

「別に俺のじゃねーけど、合意の元で頼むな」

「幹人さん、冗談でも今のはないよ?」

しまった。男同士のクセが抜けてねーのか俺も酔いが回ってんのか、余計なことを言っちゃまったらしい。美幸が物凄く怒ってる。美咲もあんまりいい顔はしてねーしな。

水を飲みながら、客間を案内してやった。けど、美咲の部屋に三人は寝れねーだろ。鍵がついてんのも美咲の部屋だけだし、釘を刺したとは言え心配だな。

「いーじゃん、幹人さんは美咲ちゃんと寝れば?」

「え、ちよ、美幸さん……!」

「だっておにーさまががっちりガードしてれば手は出せないし、私と花音ちゃん美咲ちゃんの部屋で安全に寝てるからさ」

「いやいや、待って……あたしが、幹人さんと……」

それこそ間違いの元である気がするんだが、と俺も思うんだけど、美幸はそれは二人きりの時にしてとあしらわれた。意識してるから余計に一緒ってのは危ないだろ。そ

れだったらまだ花音とかの方がいいだろ。

「それこそ美幸いもつとに手を出すつもりなんてないしな」

「……だって、どうする美咲ちゃん？」

「あたしが一緒に寝る」

「ん？」

さつきと言ってること全然違うんだけど、なんなんだよ。そう怪訝に思っているのはどうやら俺だけのようで、美幸はそれじゃあね、と行ってしまった。リビングに美咲と二人、取り残される。

「やっぱ、あの時とは違うよね」

「……だな」

あの時はお互い傷だらけで、それを舐め合うので精一杯だった。だから一緒にベッドで寝れたのかもな。俺は杠葉の温もりを求めて、美咲を抱き寄せて、美咲も安心したように寝息を立てていった。あの時アヤマチを犯さなかったのは断然、俺が杠葉一色だったからだな。

「幹人さん」

「ん？ どうした、なんか嫌なことでもあったか？」

「ううん……ほんのちよつと、甘えたくなった」

ソファでちよつとだけ近づいて、美咲は俺の肩に自分の頭を乗せた。手はしつかりと繋がれていて、その動きが前までは何か嫌なことがあったり、我慢することがあったりするとしてきたことだった。今は、違うんだな。

「久しぶりじゃん、二人きりなの」

「いるけどな」

「それでも」

美幸はまあ、前々からあの家に居場所がねーって感じてたみたいだからな。あんまり帰りたくねーんだとよ。それを許可したのも美咲だったな。

その時の話は俺は知らねーことなんだけど、あれからより一層美咲と美幸の仲は良くなつたよな。

「ずっと寂しかったところもあつたんだ。幹人さん一人で待つのがちよつとね。でもこうやって二人きりになれるのも……たまにはいいなつて」

「ごめんな……あと、ありがと」

「んっ……急にすんな、ばーか」

ああ、なんか美咲を見てると思うな。俺は杠葉ともつと甘い同棲生活を想像していたんだ。そんなことを考えてる時点で見えてなかったんだらうけど、少なくとも俺は杠葉が同棲することでもつと砕けてくれると思つてた。彼女に告白をして私も好きだった

という言葉をもつと行動にしてくれるんだと思い込んでた。

「あ、あのさ……」

「ん？」

「急に……じゃなかったら、いいよ」

「身構えられると困るんだけど」

そんな攻防をしていると今度は美咲に「ヘタレと言われた。流石にカチンと来る言い方だけど、美咲は煽つたらしてくるんでしょ、みたいな顔をしていた。ヘタレはどっちなんだか。どうにも美咲はまだ恥ずかしいらしく、自分からとれるスキンシップは手を繋いだり甘えるので精一杯らしい。だから、俺はまだ手を出すとかは考えてねーんだけど。

「ほら、そろそろ寝ねーと、明日学校だろ？」

「……幹人さんは休みだよね」

「そうだな」

「……サボろうかな」

やめとけ。あんまり賢いとは言えねーからな。それに、ちゃんと休みを取ってあるからそんな時にいくらでも甘えられるから。頭を撫でてやると、美咲は唇を尖らせてなんか違うと言い出した。何が違うんだろうな。

「あたしは、九歳差を意識したいわけじゃないもん」

「んーつと、どういうことだよ」

「子ども扱いは嫌ってこと」

「はいはい……いいから今日はもう寝ろ」

だつてな、今は子どもだつて思つとかねーとお前と一緒に寝れないだろうが。

まだそこまでの覚悟は俺にできてないから、今のところは悪いけど、前のままのスタイルでやらせてもらう。

背を向けて広いベッドの両端で寝ることになったのだが、電気を消した途端に美咲がもぞもぞと俺の背中にまでやってきた。

「どうした？」

「ん……なんでもない」

「なんでもなくはねーだろ」

「いいから」

仕方ねーなと俺は寝がえりを打ち腕を差し出した。美咲は少し迷った素振りを見せていたが、やがて諦めたように腕に頭を乗せて、いいよ、と頷いた。どういう意味だよと一瞬思つたけど、俺は抱き寄せてほしいという意味だと解釈をすることにした。頭を撫でて美咲を落ち着けたあの頃と同じやり方で、俺はもう傷も見えない少女を抱きとめ

た。

今度は自分勝手な願いのために、ここにいてほしいという想いを込めて。

「キス、つて意味だったのに……」

「また今度な、今日は寝てろ」

「……うん」

今日はこれ以上線を踏み越えるつもりもねーからさ。だから不安がってないで目を閉じてろつての。俺はお前にとつて最も信頼できるヤツになるつて決めてるんだからな。美咲が本当にいいつて思えるまで俺は待つてるつもりだからさ。

「ホントにシてないの?」

「シてないつてば……」

「本当にさ、幹人さんは性欲ないのかと思うよねえ」

「いやいや、あたしもしてほしかったわけじゃないし」

——けど翌日、美幸が美咲とそんな話をしている、俺は顔をしかめることになった。お前らとつとと学校行けよ。ちなみに朝一の電車でダチは帰っていった。おずおずと朝ご飯は、と問いかけた美咲にカツコよく手を振ってな。サンドイッチ、今頃食つてるんだろうか。

「朝からそういう話すんのはやめろつての」

「今じやなきやいつするの?」

「俺がいねーとこ」

おにーさまにも言ってるんだよ、と美幸が何故か呆れ顔をしてきた。美咲としても話を早く逸らしたいようで、もう行くからねと花音と一緒に支度を始めていた。なんか増々美幸と美咲が姉妹に見えてくるな。いつそ本物の姉妹より姉妹だな。

「でしよー、わたしの妹、かわいいでしよー?」

「はいはい、その妹と一緒に学校行きたきやとつと支度しやがれ」

「あ、それは一大事!」

最近、どうにもココが賑やかになった。美咲と一緒に暮らしてるって意識が強いところではあるけど、美幸が来て、花音がやってくるようになって、妙に暖かな空間になってるな。

そんな家族の温もりみたいなものを感じながら、俺は三人に行つてらつしやいと微笑んだ。

美咲と俺がいて、今はそこに色んな人がやってくる家、それは俺が以前は感じなかった幸せだった。

揺るがない愛情

雨が降り続く季節の貴重な晴れ間、ううん、と唸る幹人さんを隣に置いて、あたしは470m1の紙パックのミルクティーをストローで飲んでいた。こんなのんきな状態だけど正直幹人さんにとってはあんまり良い状況じゃない。お店のスマホが鳴って、エリアマネージャーの声が僅かに聞こえた。んー、様子見に来た……という建前の元、恋人未満の大好きな彼に甘えに来たわけですが今日は構ってくれる雰囲気じゃないよね。「ちよつと外行つてくるね」

「ん、わかった」

電話が切れたタイミングであたしはお店の外に出た。丁度そこで美幸さんがスカートの中の私服姿で入店したところだった。あれ、スカートってことはバイトなのに、どうかしたのかな？ と首を傾げていると美幸さんはお兄ちゃんは？ と問いかけてきた。「幹人さんなら今対応に追われてくるところ」

「対応？」

「アレですよ、アレ」

「あー」

いつも盗難や不審者があつた時の店員間でのみ使われる番号を指で示す。それで美幸さんはわかってくれたようで、それはまずい時に遊びに来たなあつて苦笑いをした。どうやら美幸さんの目的は彼のようで、きよろきよろと辺りを見渡していた。

「さつきすれ違つたから納品だと思う」

「そつか……んんっ……別に探してないってえ」

なんでこのヒトはこんなに自分の恋愛のことになるとポンコツになるんだろう。恋愛下手なお姉ちゃんはかわいいんだよって自慢したいくらいにかわいい。ホント、あたしが落ち着いたら全力で手伝つてあげたいくらいにかわいい。なにより自分よりヒトの恋の方に興味が向いちやうところもね。

「最近、美咲ちゃんに対してお姉さんできてない気がする……」

「できてますよ」

よしよしとすると美咲ちゃん、と抱き着いてくる。やめてここ店内だからと言うとしぶしぶ離れてくれた。美幸さんはホントに人懐っこいし、なんだかんだで末っ子だから根つこの部分で甘え属性あるんだよね。

「なにやつてるんですか……っ？」

「あ、んかきほの榊原さん」

「おつかれさまー」

四月に入ってきたバイトの榎原さんがちよつと戸惑つたような表情で近づいてきた。バイト歴的にはほんのちよつとあたしが先輩だけど年上だからお互いがお互いに敬語を使つてる。そんな彼は銀縁の眼鏡を人差し指であげながら、高めの身長で溜息交じりにあたしに向かつて宮坂さんからの伝言です、と前置きをした。

「コーヒー買ってきてほしい、とのことです」

「わかりました」

「えー私もー」

「いいですよ、美幸さんも行きましょう」

コーヒーを買つてこいつてことはひと段落ついてたつてことでしよう、とあたしと美幸さんは事務所に向かった。美幸さんが幹人さんと明るく名前を呼んだのに対して、彼は重苦しい溜息の後に、なんでいるんだよとだけ呟いた。

「美幸さんは恋する乙女だから」

「だから違つてば」

とかなんとか言いつつの目的は彼なんだから、しかも幹人さんにバレてるくらいわかりやすいんだからもう素直になればいいのに。

幹人さんはなるほどなど言いながら伸びをした。大分お疲れなようであたしは甘さ控えめの缶コーヒーを手渡した。

「ありがとな」

「いいえ、大丈夫そう?」

「おう、なんとかか……まあ、始末書あるけどな」

「あらドンマイ」

美幸さんがへらへらとにやけながら幹人さんの隣に座った。あ、あたしの場所、と思う間もなく、美幸さんはあるうことか幹人さんの肩に顎をのつけて柿の種をどこからか出してきて食べる? と幹人さんの唇に押し付けていた。

「あーん」

「なんだよ……」

「あーん」

「今辛いものは勘弁してくれ」

そっか、と美幸さんは幹人さんにくつつけていた柿の種を戻し、あろうことか口に放り込んだ。咀嚼して、こんなに美味しいのに、ともう一つ口に放り込んだ。

ちよつと、ちよつと待つて、今サラつと……関節キスした。あたしが焦っていると、美幸さんと幹人さんがほぼ同時にんく? とあたしの方を向いた。すぐくそつくりな仕事は本物の兄妹みたい、じゃなくてさ、二人ともなんとも思つてないの?

「え、いや……えつと、間接キス……」

「ん？ ああ、気にしてなかった」

「美咲ちゃんには気にするタイプか、ウブだ」

「かつ、からかわないですよ……もう」

ヤキモチ妬かせてごめんねえ、とそこでもうやく美幸さんは幹人さんの傍から離れていった。もしかしてさつきからかった仕返しかと思つたらホントに仕返しだったみたいで、美幸さんとはとってもいい笑顔でどぞと幹人さんの隣を指した。

「それは納得できるものじゃないんだけど……」

「つてか二人とももうちゅーしたんでしょ？」

「えっ」

「……美咲」

カマをかけられた……ということに気づいたのは幹人さんがパソコンに向かいあいながらあたしの名前を呼んだ時だった。しまったと思つた頃にはさておき、美幸さんの恋バナスイツチがオンになったようで、ほうほうほうほう、とあたしに詰め寄ってきた。

「ちゅーしたの？ いつ？」

「美幸」

「気になるんだもん」

「もん、じゃねーよ落ち着け」

幹人さんがあしらってくれてるけど、この手の話は苦手だ。顔が赤くなってるのがよくわかった。

確かに、あたしと幹人さんの仲は進展した。進展はしたけど、未だに二人の間には九歳差って壁があつて、お互いの傷という触れられたくない壁があつて、それでなんとかそこまで漕ぎつけたけど、どうしたらいいのかわかんない。

——お前の好きはなんでそんなに重いんだよって、言われてしまう気がして。

「美咲ちゃん？」

「……あ、えっと」

「ごめん……調子に乗っちゃった」

しゅんと美幸さんは項垂れてしまった。あ、悲しませたかったわけじゃない。美幸さんの追及が嫌だったわけでもない。純粋な興味だけじゃなくて、あたしを応援してくれてるのが伝わってるから、だから嬉しいって気持ちすらあるのに。

——好きでどうしてそこまで悲しませられるの？ と頭の中で声が響いた気がした。傷ついているのはあたしじゃない、なのにどうして傷ついたフリをするんだ、そんな風に過ぎ去ったものがあたしの胸をナイフで抉ってくる。

「美咲」

「……あ、み、みきと……さん？」

「大丈夫だ美咲」

「……美咲ちゃん」

フラッシュバック。最近はなくなってきたのに、またあたしはありもしない言葉のナイフに傷ついていた。正しくないと詰られ、全部を失って……いつそ死んだ方がマシだとすら感じた。あたしが世界を笑顔にするなんておこがましいにも程があるとすら思った。

「美咲ちゃん、私がいるしお兄ちゃんがいる。美咲ちゃんはもう、間違つてすらないから」

「間違つて……ない」

「うん」

ああ、やつぱり美幸さんはお姉ちゃんみたいだ。さっきまでの態度がなんだったのつてくらい、美幸さんは優しくして、ほっとする匂いと声であたしを包んでくれた。

杠葉先生も、近づくとこんな匂いしてたっけ。家もそんな匂いもしてたしアロマの匂いなのかな、と考えていたらいつの間にか不安や怖い気持ち^{おねえちゃん}が落ち着いた。

「ありがと……美幸さん」

「どういたしまして」

にっこりと微笑んで、美幸さんがあたしの頭を撫でてくれた。幹人さんも心配そうな

顔をしてくれる。

当たり前のようなことが今更胸の中に湧き出てきた。あたしは今、満たされてるんだ。好きな人に好きでいてもらえて、あたしを理解してくれる頼れるヒトがいる。あたしにとって今が一番幸せなんだ。

それならあたしができることは一つだ。この場所を守る。幹人さんがいて、美幸さんがいるこの前は夫婦ごっこだった家族ごっこを守ることに

「ねえ、美幸さんも幹人さんのウチにおいでよ」

「ん？」

「あたしは美幸さんのこと、お姉ちゃんだと思ってるから」

「美咲ちゃん……でも」

幹人さんがふっふ、と笑顔を浮かべた。そんな遠慮しなくていいのにな。

美幸さんがあたしや幹人さんにとって安らげる相手だっというなら、美幸さんにとっての安らぎでありたいよ。こころの理論だけど、世界を笑顔にするってのは、誰かが笑顔になって、その笑顔を誰かにあげる。そうやって世界は笑顔になっていくのよ、ってさ。

あたしもそう思う。誰かに優しくしてもらったなら、誰かにとって優しい存在でありたいんだ。

「いいじゃん。つか美咲も」

「え？」

「そろそろ、誤魔化さなくていいんじゃないの？」

「……うん」

ぽん、と頭に手を置かれる。子ども扱いはちよつとむかつとしたけど、確かにそうだ。両親にはいいよつて言ってもらってる。前までは誤魔化してたけど、あたしとしてはもう遠慮することがないんだから。

「親に話してくる」

「時期は？」

「一学期終わってからかな？」

「じゃあ私も前期終わったら準備する」

そんなのんびりした当たり前のような感じで、あたしと美幸さんは幹人さんに一旦の別れを告げて、店を後にした。

これからたくさん用意するものがあるよね、まずは空き部屋になつてるところを美幸さんの部屋にしないと。そのために必要なものを買に行こう。そのためのリストを、二人で作ることにしよう。

——来月が楽しみだな。三人で毎日を過ごせるようになる、その日があたしはめっちゃ

くちや、楽しみでしようがない。

語られない始点

「喜多見さんと奥沢さんって、最初姉妹かと思った」

始まりは新しくバイトに入ってきた男子三人組の一人、酒井くんがこぼした呟きからだった。

私はそだねえ、と相槌を打ちながら幹人さんに頼まれた事務作業をしているところで、早めにやってきた二人がそんなことを言っ、確かに、ともう一人の本田くんが返した。

「んー、まあ美咲ちゃんと私は今や姉妹と言っても過言じゃないからねえ」

「仲いいつすよね」

「前から知り合いだったんですか？」

「どーしたキミたち？ 私のが気になるのかな？」

それとも美咲ちゃんの方かな？ と笑うと少なくとも奥沢さんはないですねと二人が顔を見合わせた。まあそうだよ。美咲ちゃんかわいし愛想も割といいし仕事ができるで最強の優良物件だとは思うけど、狙うおバカさんがここにはいなくてほつとした。

「宮坂さんなあ」

「羨ましいですよ、正直」

そうなんだよね、美咲ちゃんは見ればわかるしなんなら幹人さんが仕事以外は二人そろって隠す気ないんだよね。あの二人が一緒に閉店まで残ってれば明らかにデキることが伺える雰囲気出すからプライベートの二人は。

「でも僕、最初は喜多見さんと宮坂さんが付き合ってるのかと思ってました」

「それ！ めっちゃ距離ちけーしこれは、って思っていました！」

「そう？ ー私と宮坂さんは長く一緒にいるからかも」

高校生になって、他者とのかわりに無関心というよりも他者とのつながりを持つことが弱いと考える自分の両親の方針に嫌気が差したのがきっかけだったんだよね。だから接客業にしたんだ。そこで、私は家族のように思える相手に出逢った。ちょうど美咲ちゃんと同じ年に、私はお兄ちゃんに出逢ったんだ。

「二年からだからー、もう四年？ そのくらい」

「四年っすか」

本田くんがそんな風に感心していた。なんだか、初々しさがあっていいよねえ。そしてなにより元気が良い。本田くんも酒井くんも、榊原くんはちよつと落ち着いた感じするけどそれでもカノジョさんラブでかわいいところあるんだよねえ。あとは……手塚く

んかな。

そんな話をしていたせいかな、私はふと、美咲ちゃんも初めて会ったときのことを思い出した。大学二年生、成人式が終わってすぐのことだった。幹人さんに中途半端な時期だけど、とちよつと明るい顔で言われて紹介されたのが美咲ちゃんだった。

「奥沢……美咲です」

「……喜多見美幸です、よろしくね？」

「はい」

第一印象は、大丈夫かなあつて感じだった。何せ暗い。せつかくのかわいい顔が台無ししてくらいに顔には影が付きまどつていた。まるで自分を痛めつけているような顔、私は教育係に任命されたことでどう接すればいいんだろうと、幹人さんに相談したくらいだった。

「……ねえ、幹人さん」

「なんだよ、みゆ……喜多見」

「呼び方……それ本気で言つてたの？」

「当たり前だろ……じゃなくて、なんだよ」

「奥沢さんどう接してあげればいい？　なんか暗くて、抱え込んでる感じするから」

「そうだなあ」

直観的に、幹人さんは知ってるんだってことはわかった。けどお姉ちゃんと別れたせいで距離を置かれて、私はそれ以上聞くことはできずに、答えを待った。うーんと腕を組んだ幹人さんは、ほんの一瞬だけ柔らかい笑みを浮かべて一言だけアドバイスをくれた。

「お前が思う通りでいいんだよ、少なくとも俺は喜多見の教育をやった時にはそう思った」

「……そっか」

「はい、タメ語禁止。少なくとも仕事中はな」

「わかりました……宮坂さん」

「ごめんな」

謝るなら線を引かないでほしかったけど、そうでもしないと幹人さんは泣いちゃうんだと思ったら、何にも言えなかった。やっぱり家族にはなれないのかな、なんて失望も少しした。だからかな、私と美咲ちゃんの初対面は決していいようにはならなかった。

「ほらほら、スマイル！ 接客業なんだから」

「……すいません」

「怒ってるわけじゃないよお、ね？」

空回りしていた私は、美咲ちゃんに歩み寄ることができなくて、表面的で薄っぺらな

言葉しか掛けられなかった。だから歩み寄ろうとして、その実ほとんど溝が深まっていくのが日に日に明らかにになっていった。

「奥沢さん？」

「……どうも」

「どうしたの？」

そんな溝から二週間くらい経ったある日、私は半に上がったはずの美咲ちゃんが閉店後まで事務所に残っているのに遭遇した。

最初は何かトラブルがあつて帰れないのかと心配になつて幹人さんを見上げたら、幹人さんははあ、とため息をついた。

「残るなつて言つただろ」

「別に……いいじゃ、ないですか」

「よくねーよ」

おや、と思つた。何やら上司とバイトの枠を越えた匂いに私はここでようやく、溝を埋めるものを見つけた気がした。やっぱり気を遣うのつて私らしくないんだなつてこゝとによろやく気付けた。

「宮坂さんと奥沢さんつて、そういう関係なんですか？」

「なんのこゝとだ」

「お泊り、もしくは送ってくような関係？」

「違います」

呆れたように否定する美咲ちゃんが、そこで初めて私を見てくれた。きつと上辺だけの言葉じゃない私を認識してくれたんだという喜びが私の胸の中にあつた。同時に幹人さんが別に踏み込んでやればいいさ、みたいな顔をした。そんな表情したら増々私は怪しんじゃうからね。

「じゃあじゃあ、恋バナしよ美咲ちゃん」

「…………え」

「喜多見…………コイツは恋バナに食いつくヤツなんだ」

「そう…………なんですか」

「うん、喜多見美幸は恋する乙女の味方なんだあ」

なんだその言い方、と幹人さんが笑い、くすりと美咲ちゃんが笑った。おお、初めて素直に笑った顔を見たけど、やっぱりかわいい。

——私はこの子と仲良くなりたいな。業務とか関係なく、幹人さんが大切にしているらしきこの子と、私はただの先輩後輩じゃない関係がほしいんだ。

それは私がかつて幹人さんと結んだ関係のように、温かくて優しいもの。それを目指していた。

「みーゆーきさん」

「わ、美咲ちゃん、お疲れ様。練習終わったの？」

「ん、だから弁当持ってきたんだ」

「ありがとー！ 流石美咲ちゃん！」

それから数ヶ月経って、私はすっかり美咲ちゃんと仲良しになりました。今じゃかわいかわい妹妹ですよ。お弁当を机に置いて、今日は美幸さんの好物だよ、と楽しそうに中身の解説してくれる。

「どうしたの？」

「昔のことを思い出してたんだ」

「そっか」

「あの頃の美咲ちゃんとはんがってたよねえ」

「とんがってたんじゃないかって、ちよつと人間不信気味だったんだけどね」

事情を知らなかったとは言え、私は美咲ちゃんにちゃんと接してあげられてなかったんだよね、少なくとも最初の二週間はね。でもあの関わりがあるから、今私は美咲ちゃんと姉妹でいられるんだなって思うと後悔はしないで済んでるかな。

「今日は幹人さんのとこ」

「うん、今日からまた連勤あるから」

「じゃあ私も泊まろうかな」

「それがいいよ、あたしもそっちのが楽しいし」

ほら、こんな感じ。微笑んでくれるとこれがまたキュートなんだよね。こうやって許してくれるんだよね、私のことをお姉ちゃんだと思ってくれてくれるところあたりはホントにそう思うんだ。思わずにやけちゃうくらいに。

「ねえねえ、美咲ちゃん」

「んー？」

「ここなんだけど……修正した方がいいよね？」

「あ、うん。これヤバイよ」

そしてなんと事務作業に至ってはキャリアのある私より優秀なのです、なんて出来た妹なんだろう。お姉ちゃん感激してると同時に戦慄してるよ。おにーさまはどんだけ美咲ちゃんに頼り切りなんだろう。

「流石美咲ちゃんだとは思うけど、私ココで働こうかなって思ってるのに負けた気がしてるんだけど」

「頑張つて、あたしのは幹人さんが楽をするための技術だから」

「でも私に教えてほしいくらいなんだけど」

「教えてあげるよ」

流石すぎるよ美咲ちゃん。こうして甘えて甘えられて、私と美咲ちゃんは家族のような繋がり強くしていく。

いつか私は、幹人さんと美咲ちゃんの壁の間にある九歳差の壁を壊して、手を差し伸べてあげるからね。その日まで私は、こうして家族でい続けるんだ。

本当ではない家族

あたしの家族のお話。家族って言っても本当の家族じゃなくて、お姉ちゃんみたいな存在って意味だけど、家族みたいなヒト。

喜多見美幸さんの様子が少しおかしいことに気づいた。なんか元気がない感じ。疲れてるのかなって思った。

「美幸が？」

「うん」

「俺には普通に見えたけど」

「鈍い」

「はあ？ 今のはムカつとした」

と、そんな鈍い幹人さんは放っておいて、あたしは美幸さんのところに向かっていた。丁度ビューティーコーナーで顧客とかの情報を取り扱ってるから、オフのあたしはカウンターのところに座る。

「お疲れ、美咲ちゃん」

「うん、お疲れ」

「今日はどうしたの?」

どうしたの? と言われてちよつと迷つた。これをバカ正直に美幸さんに話してもいいのかな。案外美幸さんは隠し事上手で、隠しがちなタイプだしね。

でもあたしとしてはやっぱり、美幸さんに元気がないならあげたい。こころに影響されまくつた感じだけど、大切な家族なんだもん。そう思うと回りくどいのはよくないよね。

「美幸さん、最近……元気がないから」

「あ……もしかして、心配してくれた?」

「そりやそうだよ、だって」

あたしは美幸さんのこと、本っ当にお姉ちゃんだと思つてるから。

ごつこだとかなんだとか言われても、関係ないよ。あたしは美幸さんのために何かをしてあげたい。

「疲れてない?」

「うーん、疲れてるといふより、最近お姉ちゃんがね」

お姉ちゃん、というところか。幹人さんの元恋人。そして最近幹人さんの周りに女性の影があることに遅まきながら気づいたらしいヒト。

そんな杠葉先生がどうやら美幸さんが最近どこに通っているのかを知つたつぽそう

だ。あたしの予想通り、美幸さんは姉に問いたただきされていることを明かしてくれた。

「ホントさく、お姉ちゃんが凄い顔するんだよね……」

「あのヒト、すごい表情読めたくない？」

「そ！ けど怒る時はすごく分かりやすくてさ」

「そうなんだ……でもわかる気もする」

優しい雰囲気だけどそこはかとなない深みを感じる笑顔だもんね。あたしも一度あの笑顔の真の怖さを目にしたことがあるからよくわかる。

元カノってこと自体、あのヒトは認められてない。別れたとか言いつつ、全然別れたつもりもないらしい。

「そ、そうなんだ……お姉ちゃんが」

「そそ、表情がすつと冷たくなった感じで」

「わかる、お姉ちゃん怒ると温度下げるパワーあるよね〜」

しばらく杠葉先生に関するトークで盛り上がる。このお店はセーフポイントだもんね、なにせ元カレがいるから。

そうやって言うとうと美幸さんは、ちよつとだけ引き攣ったような笑みを浮かべた。

「み、美咲ちゃんも案外挑戦的だよね……お兄ちゃん関連は特に」

「そりゃあね」

幹人さんのことを好きでいるということを、幹人さん自身に認知されて、恋人未満とはいえ両想いを確認したあたしだもん。美幸さんにはない杠葉先生に対する有利があるから、なんなら美幸おねえちゃんさんはあたしが守ってあげる、くらいのテンションだからね、今は特にさ。

「頼もしい義妹だよ……」

「あはは、義姉ちゃんが強くしてくれたからね」

「よしよし、じゃあ今日はお兄ちゃんところ行つといで」

「はい」

あたしと話しているうちにすっかり元気を取り戻したらしい美幸さんは事務所の方を指さした。今日は美幸さんと幹人さんはなんと珍しいことに早上がりの方らしく、一緒にご飯の準備をしようねって約束をしていた。

事務所に戻り、一人でパソコンに向き合っていた幹人さんの背中にもたれかかった。

「重い」

「女の子に重いつて言う男はモテませんよ」

「うるせーよ」

「別にモテなくていいけど」

「なんだお前」

だってモテモテになったら困るし。今は幹人さんの魅力はあたしと、あとお姉ちゃん
の美幸さんだけが知ってればいいんだけど。

肩に顎を乗せていると、手が伸びてきて、あたしの頭をちよつとだけ乱暴に撫でてく
る。苦笑交じりのその顔が、なんかム力つくんですけど。

「子ども扱い」

「甘えてくるから、リクエストに応えてるだけなんだけどな」

「……ばーか」

「今日はどうした？」

どうもしてないけど、ただ美幸さんと分け合った笑顔を幹人さんにも伝えたいってだ
け。あとそのギフト券の金額間違ってる。

そんなことを言うと、なんでそんな計算はえーんだよとため息をついてきた。

「美幸と何の話した？」

「女のヒミツ」

「あそう」

「うそ、杠葉先生のことちよつとね」

「……美幸のやつ、なんかあつたって？」

義妹想いのお兄ちゃんですこと。仕事終わったらゆつくり話してあげるとあたしが

逆に幹人さんの頭を撫でた。すると恥ずかしそうにこつちを向いて、吐息がかかるくらい近さにお互いの目線がぶつかった。

しばらく、固まって、これはキスする流れだなとあたしは目を閉じた。

「お疲れ〜！」

「っ！ み、美幸さん」

「お疲れ、終わったか？」

「ふーん……美咲ちゃん顔真つ赤だよ〜？」

「なっ……そんな、こと……」

頬に手を当てたらめちやくちや熱かった。逆になんで幹人さんがそんな平気そうなのかわかんないんだけど。それどころかお前のリアクションのせいで弄られるじゃねーかみたいな顔してるの悔しいんだけどさ。なんで、なんでそんな……ドキドキくらいしろって言いたい！

「肩痛い、爪立てんな」

「うるっさい、ばか、ばかばか、ばーか」

「タイミング悪くてごめんね、美咲ちゃん」

「——っ、美幸さんもばーか！」

「……っ！ み、幹人さん」

「知らん、というか俺はまだ仕事が終わってねーんだけど」

言外にうるさいと言われて休憩用の椅子に座る。美幸さんは思いのほかシヨックだったようで項垂れているから変わりに備品の電気ケトルに水道水を入れていく。

美幸さんは家からマグカップとティーバッグを持ってきてるから、その準備なんだけど。あの、ごめん……謝るからそんな落ち込まないでほしい。そんな想いを籠めてのお茶だった。

「へこみすぎだろ、美幸」

「だつて、だつて」

「俺なんかそんなんで落ち込んでられんくらいに言われてるからな」

確かにね、あたし口癖みたいになってるかも。ばーかつて。よよよく、とわかりやすくりアクシヨンしていた美幸さんは、紅茶を一口すすつて一瞬だけ、あ、おいし、と笑顔になってからまた机に突っ伏した。忙しい人だなあ、いつものことだけど。

「すっかり元氣じゃねーか」

「美咲ちゃんとお話できたもーん」

「そうですか」

「あ、そういえば今日は手塚くんとお話した？」

「そ、それは今なし！」

くすつと笑いが漏れた。幹人さんが楽しそうに笑って、あたしも笑って、頬が赤くなりながらも美幸さんがつられて笑ってしまう。

——と、そこに幹人さんのプライベートのスマホが着信を知らせてきた。

「……ん？ はいもしもし」

「誰かな？」

「浮気？」

「幹人さんが？ ないない」

「花音だようるせーなお前ら……あ、ごめん、うん今二人とも事務所において」

浮気だった。花音さん、いつの間に連絡先を。というかこのタイミングってことは幹人さんも終わる時間を教えてくれてたってことだね。やっぱ浮気じゃん、最悪、許せないからね流石にそれは。

そういえば花音さんがいたのすっかり忘れてたところもあるんだよ。でもこんな力タチで思い出させてくるなんて思わなかった。

「あれだね、あの子のことナメてたらかさられるかも？」

「やめて、これでも一応幹人さんのこと信じてるから」

「付き合っていないのに？」

「……ばーか」

「またー」

「なんやかんや言い合っていたら花音さんが今日一緒に晩御飯を食べることになった。いた。」

「ホントに花音さんは花音さんで頑張ってるんだなあと何故か他人事のように思ってしまった。は、これが勝者の余裕？ そんなこと言うから美幸さんに付き合っていないじゃんとか言われるんだよね。あれでも美幸さんだつて両片思いみたいなもんじゃん。あたしと一緒にすることで。」

「むしろあたしより進んでないよね、お姉ちゃんつてさ」

「……反論できない」

「まだまだ美幸さんの恋路は前途多難らしい。それこそあたしと幹人さん程じゃなさそうだけど。」

「結局、三人でご飯は協力して作ることになった。杠葉先生のことでも大変だけどそれに関して、というかそれに関してだけは花音さんも協力してくれることを約束してくれた。」

「とりあえず来週の旅行、美幸さんはどうする？」

「え、行つていいの？」

「別部屋にしてるんだよ。美咲が寂しがらるだろ？」

「ばか、言わなくていいっての」

「そういうことなら、行く！」

こうして、一泊二日の旅行に行くことになった。夫婦ごっこをした相手との旅行じゃなくて家族旅行になるだけだし、あたしとしては、お姉ちゃんと一緒にお出かけしたかったからさ。

すっごく楽しみだよって、それだけは本当だ。例え、この家族の関係が前の夫婦ごっこと同じ、本当のことなんか何一つない、ごっこ遊びのような間違いだったとしても。

救えない過去

なんだかんだありながら旅行も終わり、美咲と美幸は夏休みに入った。

夏休みつていい響きだよなあ、と思う。夏に一ヶ月超の休みがあるんだもん、こつちとしても嬉しいことにバイト勢が沢山入ってくれるからいいんだけど。

そんなことよりも大きな問題が待っていた。俺は今、休みをもらつてとあるところへと来ていた。そもそも家からそんなに離れているわけじゃないけど、心の距離はどうしても離れていた場所へと。

「えーつと、コーヒーでいい?」

「あ、ええ、コーヒーでお願いします」

——奥沢家客間。俺は今奥沢美咲のご両親と対面していた。こういうの、一回やつても慣れないもんだよな。しかも相手は九歳差。より胃が痛い。杠葉の時は、両親の反応としてもああそしてみたいなところもあつたしな。

「そんな畏まらなくていいのよ」

「けれど」

「そんなに知らない仲でも、ないじゃない?」

ん、何か誤解のある言い方ですね。美咲と美咲の父親が物凄い顔をされてるんですけど。いやいや確かに知り合いではある。何せ美咲の母親はよくウチに買い物に来てくれる。美咲のことがあつてからは俺に薬のことや世間話を振ることもあるくらいだ。それくらいお客様と店員として良好な関係を結べていると言えるだろう。

「それで、宮坂さんまでわざわざ呼んで……話というのは？」

父親の方もよくついてきて買い物をするし、俺が接客をすることもレジを打つこともある。こちらと同じように良好な関係を結べてる常連の方だ。

——とはいえそれは店の中での話。外に出たなら、俺は娘をたぶらかし、あまつさえ家に連泊させていた張本人だ。なんも言つてねーとはいえ、そうなったら余計にそういうことをしてると思うのがフツの反応だろう。

「あの、さ……父さん、母さん。あたし、夏休み中か、二学期前には幹人さんと、一緒に暮らしたいんだ」

「あら」

「……なに？」

切り出してくれたのは美咲の方だった。流石にそれがどういう意味なのか、どれだけヤバいことを言っているのかわかっているようで、美咲の顔は俯き気味だった。

その証拠に両親ともピタリと固まった。沈黙が恐怖を運んでくる。背中に嫌な汗を

掻いてる気がする。

「宮坂、いや、幹人さん」

「は、はい」

「娘とは、お付き合いを？」

「えーっと、それをどう説明したらよいのか、まだまとまっていなくて」

そう。一番の問題はまだ俺と美咲は付き合いをしてないということ。どうしようかわからないままここまで来てしまった。とりあえず、恋人ではないこと、恋人とするようなアヤマチは一切ないことを事前に決めていったのでそれを説明した。

「なるほど」

「なのはどうして？」

「……恥ずかしい話なのですが、私は一人じゃ何もできない男でして、途方に暮れていたところで、お互いの傷を埋め合うようにして彼女と出会いました」

彼女の両親には一度だつて話してこなかった。俺の身の上話。そして美咲との出逢いの話。特に悲しくも楽しくもない。

単なる下らない感傷だ。でもその感傷は、九歳差という壁を越えて、俺と美咲の指に、切れない縁を結んでいる。

寒い冬の日だった。俺は息を切らして走っていた。

いるはずのヤツがいなかった。帰ってきたら、杠葉がいなかった。たったそれだけ、それだけだけど、喧嘩をしてしまっただけに、どうしたらいいのかわからなくて、ただ探すことしかできなかった。

「くそ……い……どこ行つたんだよ……杠葉」

世間はクリスマスという空気の中、俺はいなくなってしまった恋人を探していた。スマホに連絡しても全く応答がない。相当怒ってんなということもわかって、俺はどうしたらいいのかわかんなくなっていた。

アテがないわけじゃねえ。けど、向こうの実家なんて連絡行つても知らんで済まされるだろうしな。悪態をついてもまったく意味がない。

「……アテもねーのに、なにやってるんだろうな俺は……ん？」

それならいつそこんなに待ってやる意味はない。俺も出ていこうか、そんなことまで考え始めた時、俺は道路の片隅にうずくまる影を見た。雪でも降るんじゃないのかとい

うほどの冷えた空気の中で俺は、黒髪を垂れ下がらせ、涙に顔を濡らした少女がいた。なんでこんなところに、そう思ったらバツチリ目が合っちゃまった。

「……なあ、お前……もう夜中だけど、大丈夫か」

「……っ、ほつといて、ください」

いや放っておけるかと内心でツツコミを入れた。今日はマジで寒いんだからな。そんなカツコでこの夜中に座ってたら命の危険だつてある。

事情はさておくとして、これは良識ある大人として通報するしかねーよな、と頭を掻き、スマホを構えたところだった。

「……かえりたくない」

「家出か？」

「違う、けど……いまは、そつとしておいてください」

「いやそんなこと言われても、このままじゃ凍死コースなんだけどな？」

「それなら……それでいい」

袖を引つ張られ、俺は少女に懇願された。家に帰れねー理由があつて、でもどこにも行く場所がなくて、人差し指でおもちやみたいな安物の指輪を触る弱々しい少女。

凍死体が見つかったとか聞きたくもなかった。正義感とかじゃなくて、コイツも俺と同じ迷子なら放っておきたくないって感傷だった。

——それだけの理由で、俺はだったら、と彼女の腕を引っ張った。

「え、ちよつと」

「死なれちや気分悪いんだよ、つかめちやくちや冷えてんじやねーか！　いつからそこにいたんだよ」

「……しらない」

「なら来いよ。別に子ども興味ねーけど、風呂くれーは貸してやる」

「なんで……？」

なんで、なんて理由を問われても俺もわかつてねーし、そんなこと訊くのはやめてほしい。こんなの、所謂家出神待ちつてやつだし。その報酬にそういう少女たちが何をするのかも知ってる。たぶん、コイツもそれを知つて強張つてるんだ。

でも俺はやつぱり、たぶん女子高生くらいだと思われる少女と身体を対価に、つて言う気にはならなかった。そしてなにより。

「こんな独りぼつちで死んじまうなんて、つまんねーよ」

「……うん」

だから泊めるつもりは正直そこまでなかった。風呂を貸してメシでも食わせて、それからなんか事情があんならネカフエでも行けよつて金を渡すつもりだった。

それが崩れたのは、単に俺も弱つてたからだった。やつぱり俺一人じやなんにもでき

ねーことを思い知らされた。ただ肉を焼いただけ、んで風呂に入ってる最中に炊いてたご飯をよそつて、少し焦げ臭い匂いのするそれを風呂上りのソイツの前に出した。

「ありがとうございます……ございます」

「つつてもヘタクソだけどな……」

「うん、まずい」

「……うるさいな」

素直な感想を言い出す少女に俺は唇を尖らせた。杠葉がいたら、ちゃんと美味しい料理でも作っただらうか。

いや、杠葉はそういうのに興味を示さない。料理の一つも振る舞うこともなく、風呂に入れることの一つもしなかっただろうな。杠葉は、きつと実家に帰っただらうなということはわかった。荷物も何もなくなっていた。いつの間にか。きつと俺が気付かなかっただけで、仕事に行ってる間に、なんだろうな。

「なにがあった？」

「……カレシに、捨てられた」

「は？ このクリスマスに？」

「うん」

食べ終わった彼女の口からはポツリポツリと言葉が紡がれていった。

カレシの家に招待されたこと、行為を迫られ、それが怖くて突っぱねたら灰皿を投げつけられ、まるでそれまでの優しさが嘘だったように暴力に訴えかけてきたこと。

「……マジかよ」

「ん……」

「つか傷見せてみる」

「……え、うん」

肩に青あざ、それが灰皿が当たった部分らしい。そして唇を切った跡、脚の打撲、結構な傷だった。それをてきぱきと湿布やガーゼ、包帯を持つてくる。

それを彼女はポカンとした様子でそれを見守っていた。

「なんか……手際、いいですね。ものも、沢山」

「一応、そういうのを取り扱ってる店で働いてるからな」

「あ……近くの」

「知ってるのか」

「母さんが、偶に買い物に行くから」

投げやりな会話を繰り返して、俺は気が変わった、なんて適当なことを言っただけ泊めることにした。対価は必要ない。いや一つだけ対価を要求したか。

——別に居場所がねーんならここを家だと思っただけいい。お前はここをただいまって

言っつていいし、おかえりつて言っつていい場所なんだつて。

「変なヒト。ホントに何にもしないの？」

「女子高生に手を出すほど、俺は落ちぶれてないもんで」

「そ……じゃあ、信用する」

「はっ」

「ごつち」

ベッドに寝転がり、俺に向かつて手を広げてきやがった。信用するにしても無防備すぎない？　と思つたけど、そつか。本来はコイツはカレシの傍にいるはずだったんだ。そう思うと、俺もそうなんだよなつて思いが増した。本当だつたら、杠葉と一緒に寝るはずだったのに、そう思うと拒否できなかつた。そのまま甘い誘いに乗せられ、俺たちはまるで恋人同士のように、お互いの欠けたものを埋めるように抱きしめ合つて寝てしまった。

「……おはよう、ございます」

「おはよ……えつと、そういや名前聞いてなかつた」

「確かに……あたしも」

順序がおかしいよな。こうして意味は違うけど一夜を共に過ごしたつてのに名前も知らない。少し、笑えた。つられたように彼女も微笑みを浮かべた。まだまだお互い傷

だらけで、特に相手は凍傷気味で、傷跡とかもあってマジの傷だらけだったけど、それでも救われた表情をしてくれた。

「今更かもしれないけど俺は宮坂幹人、キミの名前は？」

「……みさき、奥沢、美咲」

こうして、宮坂幹人は奥沢美咲としばらく共同生活を過ごすことになった。

お互いの傷が癒えるまで、そんな感じの約束をした。それからもう、実に半年以上の時間が経っていた。

いつの間にか感傷はお互いを想う気持ちに発展し、夫婦ごっこは家族ごっこになっている。その始まりだった。

苦味のない幸福

「……どうだった？」

「開口一番それか」

俺が帰ってきたら、パタパタと駆けてくる足音があった。美咲はアイツんちに置いてきたから、家に入れるのは後一人だけ。

やっぱこうして見ると若干似てるんだよな……なんてことを考えたのはコイツに、ましてや美咲のやつには内緒だ。

「み、美咲ちゃんいないじゃん」

「……おいてきた」

「え……じゃあ」

美幸の顔が曇る。そりやそうだろう置いてくに決まってる。

本格的にこの家に住むんだったら色々必要だろう？　そういうと美幸ははつとした表情をしてから漸く俺に謀られたことを察したらしい。

「わごとでしょ」

「せっかちなだけだろ」

「美咲ちゃん、明日には来る？」

「その予定だな」

「楽しみだなあ、あ、荷ほどきとか手伝ってあげなきゃね」

「すごいいうきうきしてるな。彼女にとつてはやつと得た理想の家族みてーなもんだからな。それも仕方ないのか。」

「つか明日は休みだな。美幸も美咲も合わせてくれてるが、なんか食いに行くくらいはできそうだな。」

「辛いもの！」

「却下、お前しか食べねーだろ」

「おにーさまのケチ」

「カレシとでも食いに行つてこい」

「……カレシじゃないもん」

「じゃねーのかとツツコミを入れたらカウンターでいつ美咲ちゃんと付き合うのとか言われそうだから黙つておこう。」

「とりあえず今日はテキトーになんか……頼むか。」

「私が作ります〜」

「美幸が、料理？」

「できるに決まってるじゃん」

決まってると思うが。いつも美咲のメシをつまみ食いするタイプじゃなかったか？ 能ある鷹にしてはバカを晒し過ぎだと思うんだよな。なにおうとおどける美幸だったが、作ってくれたペペロンチーノはめちやくちやおいしかった。本当に料理できただんだな。

「まあ、ほら喜多見家の流儀は独りで生きるだから」

「なるほどな。ただ」

「ただ？」

「……辛い」

そう？ とか首を傾げてるがむちやくちや辛いからなこれ！ 唐辛子どんくらい入れたんだと思うくれー辛いけど、と思つたら美幸はそこに更にタバスコを掛けていた。味音痴のすることだろそれ。

「なんか、辛味って味覚じゃなくて痛覚らしいよ」

「へー、つまり私って痛みに強い!？」

「ううん、鈍感なんじゃないかな、美幸さんの場合」

翌日、その時の話をするとう美咲が苦笑い気味にツツコミを入れていた。

鈍感って言われて不満そうに俺の顔を見んな。鈍感代表みたいなそういう反応はや

めような。

「……間違つてないと、思います」

「花音まで」

今日は引つ越し祝いつてことで花音も来てくれていた。あと一人やつてくると思うんだけど。そんなことを考えていると、呼び鈴が鳴り美咲が俺よりも素早くはい、と応答した。

——瞬間、大音量でみさきー！ と声が出た。今日も変わらず元気な子だな。

「今開ける……つたく、近所メーワクだつての」

「ふふ、かわいいなあ」

「そう言える美幸は豪胆すぎるんだよ」

「ホント、あたしじゃ無理だよ」

「あはは、こころちゃんはいっつも元気だから」

そういう美咲もふふ、とほほ笑んでるしさ。弦巻こころのことが好きな証拠なんだよ。というかあの人間性が嫌いになれる人間はよっぽど性根が腐つてるとしか言い様がないと思うんだよな。

「いらつしやい」

「おじやまするわねー！」

眩しい。キラキラ金髪が太陽を反射してるだけじゃなくて、もうオーラみたいなのがキラキラだ。

美咲が入って入ってと促し、こころは靴をきちんと揃えてからまだ完全には部屋に入り切つてない荷物を見て嬉しそうに笑みをこぼした。

「こころが美咲の新しいおうちになるのね」

「うん」

「幹人、ちゃーんと、美咲と仲良くしないとダメよ?」

「わかってるよ」

知らないはずなのに、ここの確にクリティカルを抉ってくるんだろうねこころつて子は。美咲に確認したけど首を横に振っていた。でしようね、そう簡単にしゃべつていいことじゃないししゃべれねーよな。花音にも言つてないはずだし。

「わわ、ほんとにキラキラだ……私は喜多見美幸! 初めまして」

「ええ、美幸ね! 素敵な名前だわ! あたしは弦巻こころ!」

「うんよろしくこころちゃん」

なんか心なしか美幸もキラキラしてる。こういう踏み込んでくるタイプが好きだつてことは知つていたけど、まさかここまで波長が合うとは……ところで義妹さんが若干拗ねてるけどどうする?

「お姉ちゃん、浮気?」

「美咲ちゃん? 浮気じゃないよ? ホントだってホント! 私のかわいいかわいい義妹は美咲ちゃんだけだよ!」

「ふうん、その割には……」

この義姉妹コントにもだんだん慣れてきたな。花音も同じようで苦笑いをしている。こころはというと首を傾げてからケンカかしらと言っていた素直でよろしいことです。それを花音が補足する……と。そういう感じでいつも過ごしてるんだなあというくらいに自然な流れだ。

「おにーさまはなんで他人側なの?」

「なんでだろうな」

そういう流れだからなんじゃないかな。

——それにしても、こういうのが前よりももっと日常になるのか。騒がしくて、もうきつとしんとした、無駄に広い部屋だなんて思うこともねーんだろうな。

「幹人さん、嬉しそう……ですね」

「もう、独りじゃないから」

傷を埋め合うように始まった夫婦ごっこは、こうやって切れない繋がりを生んでくれた。杠葉との関係がなくなってもいつだって俺のことを家族のように接してくれてい

た美幸と、いつだって傍にいてくれる美咲。

そんな美咲がくれた新しいつながりである、花音やこころも。

「私も……」

「うん、花音も」

「いいんですか？」

何が、と問い返すとちよつと呆れたような顔をされた。なにか思うところがあつたつぼいけど察せてはないな。

けれど彼女はそのままの呆れたような表情を崩して、それじゃあ私もと手を握ってきた。

「か、花音……さん？」

「私も幹人さんの傷、癒してあげたいから」

まるで雨を受けた蕾が朝日を浴びてしつとりと花開くような、女性的な艶やかさのある表情でそんなことを言われると、不覚にもドキつと反応してしまう。

すかさずこころが反対側にやってきてあたしもよ！ と太陽みたいな笑顔で言ってくれなかつたらしどろもどろになるところだった。

そうだよな、世界を笑顔にするのがキミたちだもんな。

「……花音さん」

「私も、高校卒業したらおじやましちやおうかなあ……♪」

「いやいやダメに決まってるじゃん」

「そもそも四人住むにはちよつと狭いな」

「それならお隣の部屋を繋げちゃえばいいんじゃないかしらっ」

無茶苦茶言ってるけどやめてよねと美咲が本気で止めてるところを見るとどうやら不可能ではないらしい……いや、不可能でしょ現実的に考えて。しかし花音もまだ大丈夫だからと必死で止めていた。

「……そんなことってできるの？」

「知らねーよ」

「こころちゃんって、もしかしてすごい？」

「知らねーって」

俺にとっってはいつも元気いっぱいの美咲の友達ってこと以外なにも知らねーんだから。あとなんか黒い服のお姉さんたちがいつもついて回ってるってことくらいかな。お嬢様なのかなーとは薄々感じていたけど、もしや超裕福？

「物理的に無理じゃなきゃこころは大抵なんでもできるよ」

「そうなんだ」

それを機に美咲に同じバンドの仲間たちや学校のことをたくさん訊いた。先輩も同輩も後輩もいい子ばかりなんだなあってことがわかって俺は少し安心したよ。

二人の引越し祝いにところが大きなケーキを持ってきて、まるで誕生日かっけらに楽しい時間を過ごしていった。

花音は最後まで泊まりたそうにしていたが翌日は用事があるらしくこころと一緒に黒服さんが運転する車で帰っていき、美幸ははしやぎつかれたのか既に眠っていた。残るは片づけを終えた俺と美咲だけ。

「あの子」

「ん？」

「これから……よろしくお願いします」

「なんだよ改まって」

「ほら、これからは……同居人なわけだから」

アイスコーヒーを飲みながら頭を下げてくる美咲は、幸せそうに笑ってくれる。同居人、これからは美咲がこの家に来てくれる。

そんな気分の高まりが、俺にアイスコーヒーの苦味をくれた。

「……幹人さん」

「よろしくね、美咲」

「……うん」

苦いはずなのに、その味は蕩けるようなはちみつのような甘味があつて、俺と美咲は

その甘さとコーヒーの苦さをお互いで共有し続けた。
幸せの味を、唇に乗せて。

引けない覚悟

「おっはよー」

「おはよ」

美咲と美幸がこの家に来てから、朝はとんでもなく賑やかになった。

まず俺が起きてリビングにやってくる二人の声が部屋に優しく響いた。その日々が今日だけでないことに俺はついつい笑みを零してしまう。

「なにニヤニヤしてんの?」

「してねーよ」

「してたよ、ねえ美幸さん?」

「してたー」

してたじゃねーよ見えてねーだとツツコミを入れつつ、俺は美咲の作ってくれた朝食を三人で食べる。

夏休みの間は三人で出勤することも多くなりまた噂は広まるんだろいうなあという気がしている。俺は先に出勤するって言ってるのにコイツら基本的についてくるんだもんな。今日は休みだからのんびりしてるけど。

「だってしょうがないじゃん。心配だし」

「夏休みの間だけにしとけよそれ」

学校が始まってでもその扱いはやめろよな。俺はお前らの、特に美咲の両親ほどお前らを見てやれるわけじゃねーし、養つていけるわけでもない。美咲は既に半年以上ここで半同棲状態で泊まってを繰り返してるから百も承知だろうけど。

「じゃあ私は友達と遊びに行つてくるからー」

「いつてらっしやい美幸さん、夕飯は？」

「食べてくる！」

「わかった」

朝食を摂り終わった後、美幸が慌ただしく出かけていった。最近とみに美幸のやつは明るくなつた気がするな。昔なんて割とミステリアス的で近寄りがたいと思われてたつて自己申告受けてたし、なに考えてるのかよくわからんのは事実だからな。

「確かに、仕事の教え方とか雰囲気とかいいんですけど、壁はあつたかも」

「けど最近はどうも明るくなるつてきてる。友達なんかできて、俺たちが知ってる美幸にどんどん近づいてる」

「……嬉しそう」

そりゃ嬉しい。俺の義妹はかわいくて頼りになるつてことをみんなが知ってくれる

んだからな。

お義兄ちゃんだねホントにと言われて俺はそりやそうだって返すしかない。それが俺にとってアイツにしてやれる家族ごっこだからな。

「美咲」

「はい……って、なに？」

「なに……って、なに？」

「なんですかこの手はって言ってるの」

洗い物をしている美咲の後ろから腰に手を回すとちよつとトゲトゲしい言葉が返ってきた。

——なんとなくだよなんとなく。ダメだったかなと離れようとすると、くるりと頭が上がつて頬にキスをされてしまった。

「……最近、幹人さんは甘えんぼになった」

「そうかな」

「うん。ヤじゃないから……ううん、すき」

その言葉はまるでちみつのように甘く胸の中に蕩けていった。

なんだかんだ言いながら受け入れてくれるどころか、俺が欲しかったものよりずっとずっと甘いものくれるんだな、と思うことが、嬉しかった。

「あのね、でも二つだけ文句言っている？」

「なんの？」

「一つはあたし、洗い物してるから甘えるよりか手伝ってほしいなっていうこと。もう一つは……いちおうあたしら、付き合ってるじゃないよね？」

「……そうだな」

「ああもうそんなしゅんとしないでよ……ほら、手伝ってくれたらいいから」

なんだかどつちが年上かわかったもんじやないな。俺のこと、優しく受け入れてくれる美咲になんだか年上のような甘さを感じてしまった。

——俺が求めていたのは、そういう甘さなのかな。恋人に求めてるのはそういう感じの甘さだったのかも。

「ん、手伝ってくれてありがとう」

「どういたしまして」

やがて終わりがやってきて、俺の隣に美咲がやってくる。これからどうしようか……そんなことを言うと美咲はさあ？ と首を傾げながらさつきと同じような態勢を今度はソファに座ったままする。テレビを見ながらのんびりしていると、美咲がもぞもぞと居心地が悪そうに提案してくる。

「あの……さ」

「ん？」

「……このまま、のんびりするの？」

「え、おう。お昼くらいに買い物こうとは思ってるけど」

俺の提案に、美咲はんー、と考えるような仕草の後、するりと俺の腕の中から飛び出てどつか行こうよと提案してきた。

どつか、か。なんでまた美咲はそんな提案してくるんだろう。家でのんびりじゃ何か不都合だったか？

「あーもうばか鈍感」

「は？」

「いいから、出かけるー！」

なんか怒られたのでしぶしぶ出掛けることになった。行先はショッピングモール、これはさてはデート気分だなどと思わなくなかった。今まで美咲と二人で出かけることなんてそうそうなかったんだけど、その中でも特に……手を繋いだことなんて記憶にないレベルだ。

「美咲？」

「このくらい……いいでしょ。デートなんだから」

「デート」

「……反芻すんな、ばーか」

理不尽だろそれは。デートって言われたらデートって感慨深い感じになるでしょ。反芻するでしょ普通は。

ただ、手は離さずに美咲は恥ずかしそうに買い物、と俺を引つ張ってくる。今日は本当になんで急に一緒に出掛ける気になったんだよ。

「秘密」

「秘密にしておくほどの理由があるのか？」

「うっさいばか」

耳まで真っ赤になるほどの秘密があるらしいと俺はそれ以上の追及を諦めた。折角美咲とのんびりした休日だったのに。どうやら美咲にはそれが不満だったらしい。あれか、甘えられるのがやっぱ嫌だったって感じかな？

「それは……ヤじゃないけど」

「じゃあどうして」

「なんでわかんないかなあこの鈍感さんは」

美咲は唇を尖らせてしまう。なんで拗ねてるんだよと言っても知らない、とそつぽを向かれた。ひどくねーか？

まあでもコイツはあんまり表情を見せてくれねーからな。ただ繋いだ手を離さない

ことから怒ってるってわけじゃなさそうだ。

「……ホントにわかんないの?」

「まったく」

「……はあ」

溜息ついたな? 今溜息ついたらだろ。言葉にしていなのに俺がわかるようになってるわけじゃないか?

わかるの、と美咲はそれでも譲るつもりはないらしい。なんなら美幸さんにでも聴いてみたらと言うくらいに譲らないらしい。

「どっか寄り道しないの?」

「……どこがいい?」

「いや美咲の好きなお店いいよ」

好きなお店かあ、と美咲は考えてから俺の方を漸く見た。どうやら鈍感なことは無罪放免になったらしいな。

美咲は顔をじつと見てからおおずおおずとここ、と指さした。カカオ豆がたくさん置いてあるお店、ログハウスのような内装とほんのりとコーヒーの香りがした。

「ほら、美幸さんも幹人さんもあたしもコーヒー派でしょ? こういうのあつたら嬉しいくない?」

「……確かにな」

コーヒーは俺も香りが好きだからな。美幸もコーヒー派だし、美咲だって寝起きはよくコーヒー飲んでるからな。というか色々種類あるんだなって思った。キリマンジャロとかブルーマウンテンとか。

「挽き方とか豆の種類でも味が変わるらしいよ」

「ふーん。普段使ってるのは？」

「美幸さんが持ち込んだやつだから……知らない」

結局美幸が詳しくかったから色々訊くとして、俺たちはまた歩いているとアクセサリーシヨップを見つけた。

ヘアゴム……はあんまり美咲は髪が短いからなあ。そうすると……ネックレスとかリング？

「……そんなの、見てどーするのさ」

「ど、どうするんだろうな」

俺ができることと言えば想い人へのプレゼント、的なやつかな。いや俺にしているのは隣で手を繋いだままの九歳下の……美咲くらいだけだ。

美咲は俺がぼつりとつぶやいたことに過剰反応しだした。

「なっ、なな……」

「付き合ってるわけじゃないけどさ……ほら、だからこそカタチにしたいなあって」
「……ばーか」

なんでここでばーかって言われた？ 俺が今日一番の理不尽を感じていると、美咲は顔を真っ赤にしながら今日は最初から幹人さん変だよと言われてしまった。

——そんなこと言われても、美咲もいるし、これから花音やこころが頻繁に来る以上、伝えておかなきゃって思ったんだから。

「あたし、ずつと意識してるんだよ？」

「……なにが」

「幹人さんが甘えてくれて、キスをしてくれてる日々でさ、一つ屋根の下だもん……その先を意識、しちゃうでしょ」

「……意識」

それは……キスのその先とかってことだよな。

だから今日ずつと、不機嫌だったのか。抱きしめて俺は安心しきってたけど、美咲はその先を認識していたのか。

「あたしは……幹人さんが好きだよ」

「……俺だって」

「じゃあ、あたしを……抱ける？」

抱ける……ってな。俺にとつてまだ美咲に手を出すのはハードルが高い。

というかこの質問があるっていうのは……美咲は俺に抱かれる覚悟があるってことだよな。ホントに、俺と美咲の年の差はあるのかどうかわからなねーレベルだよな。

「あたしは、幹人さんとその先に進みたい」

「……美咲」

「わかってる、正直あたしもまだ怖いし……幹人さんだつて怖いのはわかるけど」

そうだ。美咲は襲われかけて捨てられた。俺はまだアイツとの棘が刺さつてて、伝えきれなかったって悔しさを引きずってる。

ここで一步を踏み出せば、俺は傷つくのかもしれない。美咲を傷つけるかもしれない。

「……その覚悟だつて言うなら、あたしにネックレス、買つてよ」

なんかとんでもない藪をつついて蛇を出してしまった気がする。

でも美咲は真剣な目をしていて、俺も覚悟を決めなきゃいけないんだな。美咲に出逢つてから僅かに半年、けど、密度の濃かった半年に俺は、試練に遭遇してしまった。

誤魔化せない欲求

あたしは幹人さんのことが好き。だから一緒に住み始めてからのスキンシップは正直幸せをくれる。抱きしめてくれて、ふわりと優しい匂いがしたり……その、キス、とかもねしてくれたたり。恋人って名前じゃないだけでここ数日はまるつきり恋人みたいな生活を送っていた。

でも、だからこそ困ってることが一つだけあった。美幸さんにはもう相談してあったことなんだけど。

「いいことじゃないの?」

「それがよくないから」

「うん? でもおにーさまは甘え下手なんだからそれは美咲ちゃんにとって嬉しくないの?」

嬉しい。でもだからこそなんだよ。幹人さんがスキンシップを取ってくれるからこそその問題があるんだよ。美幸さんはん? と首を傾げてわからないようだった。

ドキドキするし、好きって気持ち伝わる幸せがある一方で私は、どうしてもその先を考えちゃうんだよね。

「その先……って、あ」

「うん……そ」

男女が好き合ったその先にあるもの。あたしが失敗しちゃったもの。

いやまあね、あたしがそれでヒドい目に遭ってるから幹人さんもソレを頭の中から除外してるんだと思う。あと幹人さんの中にまだ杠葉さんがいるから……って言うのも理由かな。

「もしかして、怖い？」

慌てたように美幸さんはあたしを抱きしめてくれる。怖くないよ……平気。きつという雰囲気になって二人が裸になって、つてところまで来たら怖くなっちゃうのかもしれないけど。幹人さんは優しくて甘えんぼだから、あたしに合わせてくれるだろうしさ。

「じゃあ……なに？」

「覚悟を持つてほしい。部屋に二人きりで、密着するなら。愛してるって言うてくれるなら……あたしをすぐに抱けるくらいの覚悟を持つてほしい」

「……抱く」

もちろん幹人さんにその覚悟があるはずがない。あの人はただ単純に触れ合いを求めてるだけだ。両親に関係を話して吹っ切れたのか、九歳差を意識することが減ったつ

てだけ。

ある意味じゃ子どももの恋愛だ。でもあたしはそんな子どももの恋愛ごっこじゃ嫌だ。触れられて、繋がりたい。

「待って」

「ん？ どうしたの……って美幸さん顔真つ赤だけど？」

「美咲ちゃん自分が何言ってるか自覚ないの？」

あーえつと、なんていうかこの義姉は全くもって初心だなあ……と実感してしまった。ミステリアスで大人っぽくなりすぎるとこうなるのか。そんなんじやカレとお付き合いた時に苦労するよ？

「うぐつ……美咲ちゃんだって、苦労してるじゃん」

「あたしはまた別方面だからね」

その相談はまた後で訊くことにしておいて。とにかくあたしとしては後ろから抱きしめたり、耳とか唇とかにキスしてくるなら、そういう覚悟をしてほしいってこと。

好きだから、好きだからこそ大切にされすぎると嫌なんだからさ。だからあたしは幹人さんに覚悟を突き付けた。これからもこの関係を進めていくという覚悟を、中途半端じゃ嫌だってあたしの気持ち、受け止めてほしい。

「……その覚悟だって言うなら、あたしそのネックレス、買ってよ」

不満が爆発した、のかな。その日は美幸さんが出かけてて……幹人さんはいつも以上にくっついてくるからなんだか……その、悶々としちゃうところもあつてこのままじゃ、勢いに任せて襲ってしまいそうだと思つたあたしは幹人さんを連れ出してデートをした。デートって言われるとまたさっきのを引きずつちゃうからやなんだけど。

——でも結局、幹人さんは鈍感でそんなこと気付くことなく暢気にデート気分で……アクセサリーなんか見てるんだもん。

「俺は、美咲にとつて負担には」

「大丈夫だよ」

「でも」

「覚悟がないなら……いいよ」

それならそれでいい。あたしだつて正直ここで急にじゃあつてネックレスを買われても困るし、帰つてからどうなるかを考えると……ちよつとだけ怖い。幹人さんと元カレは全然違ふつてこともわかつてるけど、急にくっつかれるだけでも一瞬だけビクッと反応してしまうくらいだから。

「ただいまー」

結局、それから先はその話を一切せずに、買い物をして帰つてきた。帰つてくる頃には夕方になっていて、あたしはご飯の準備を始めて、幹人さんがお風呂を洗い始めた。

——はあ、やっちゃったなあ。幹人さん、落ち込んでるよね。どうしたらよかったのかなあ、こんなんだから、好きになるくらいいいよねって花音さんに言われちゃうんだ。「み、幹人さん？」

もし、俺は美咲を抱く覚悟なんてないから、先には進めないとかわれたらどうしよう。というか幹人さんなら言いかねないとあたしは火を止めてソファに座った彼の隣にいく。

またなんでも一人で頑張ろうとする幹人さんなんて見たくない。あたしはホントは、弱いところを見せてくれるのが、そのままの幹人さんの傍にいられるのが幸せだったのに。

「あの、ね……あの質問、意地悪だったと思う。でも、あたしは本気で幹人さんといられて幸せだから……幹人さんのこと、ホントに大好きで……くつつかれるのもヤじゃないし——っ!」

手を握って縋るように言い訳を並べていたら、腰に腕が回ってきてキスをされてしまう。

いつもの甘えるようなものじゃなくて、ぞわぞわしてしまうほど激しいもの。触れるというより吸われるような勢いにあたしは何がなんだか理解できないまま受け入れてしまう。

「……な、なっ、なにして……っ！」

「美咲の」

「ん？」

「美咲の言う覚悟って……こういうことをする覚悟、だよな」

「そ、そだけど……」

ドキつとするほど、透き通った瞳で幹人さんはあたしを見つめてきた。透き通ってるのに、その中には今まで見たことがないくらいに、男性としての欲を感じる。手つきも唇も、今までと全然違う。

「み、みきと……さん」

「ごめん俺さ、美咲に言つてなかったことあるんだけど……あと先に言っておくべきだったこと」

手を離され、ちよつとだけ息を整えてからそれは？ と問い返す。それはあたしも、それどころか美幸さんも知らない……杠葉さんだけが知ってる。幹人さんの真の男性としての顔がそこには眠っていた。

「俺、どうやら性欲強いらしくて……アイツに、杠葉によく文句言われてんだよ」

「……幹人さんが」

「やつぱりイメージないよな。まあ美咲のことそういう目じや見てこなかったし」

でも、今のは紛れもない、誘ってる触り方だった。甘く痺れるような手つきも、熱い吐息の混じる唇も、今までとは全然違う……くらくらしてしまうくらいに男女の関係を匂わせるようなものだった。

「忙しいとそういうことする気にもならなくてアレなんだけどな」

「……じゃあ、今は？」

そんなこと言ったら、どうなるか。あたしだってそのくらいわかる。でも確かめてみたくなかった。怖さよりも好奇心が上回ってしまった。幹人さんに覚悟がないのはそうだとして、それ以上に実は……彼はあたしをそういう目で見ないようにセーブしていた可能性を、そしてキスをするのは実は、あたしのリアクションを見て徐々にそのセーブしていたものを解放していたんじゃないかって仮説を、証明したくなった。

「メシ、作ってたんじゃないの？」

「お腹減ってる？」

「……まあ、それなりに」

じゃあ、とあたしは幹人さんの方に倒れ込んだ。抱き着いた、って言った方が正しいかな。すぐさま腰に回ってくる手、首元にキスをされる愛おしさ。

——怖くない。全然怖くない。なんでだろう、目の前であたしという欲に負けそうな幹人さんが、トラウマなんて全部吹き飛ばすくらいに……大好きだ。

「知ってる？ 人間の性欲と食欲って……似た感覚らしいよ」

「……へえ」

「もう一回訊くけど……お腹、減ってる？」

最後のひと押しをしたら、あたしはそのままソファに寝転がされてしまう。あ、そういえば元カレに押し倒されて抵抗しちやったのもソファだったなあ。ちようどこんな感じで、覆いかぶさってきて、あたしのシャツをゆっくりめくって……ふふ、こんなこと思いついてるのに、嫌じゃないなんてあたしも変なヤツだ。

でもそうやってあたしを変えたのは幹人さん、目の前にカレだ。あたしはあの日幹人さんに拾われて……全部を変えられてたんだ。

「——めちゃくちゃ腹減ってるな……食ってもいいか？」

「どうぞお好きに」

あたし初めてだからね？ と問いかけるけど美幸帰ってくるの遅いだろと返されてしまう。えつといやそうじゃなくてね、ご飯が……まあいつか。親子丼、もうできてるようなもんだから後であつたためなおせば。

痛くはなかった。全然、これっぽっちも。幸せで、大好きで大好きって気持ちにおぼれて、あたしと幹人さんは……やつと、ごっこ遊びじゃなくなつたんだなあって思うことが、幸せだった。

ただウチにはお義姉ちゃんいるから、次からはホテルにしようね。後、シない時にあ
あいう触り方したら殴るから。とりあえず、そんなところ。あと次のデートではネツク
レスを買ってくれること、ちゃんと期待してるからね？

必要のない憂慮

幹人さんや美咲ちゃんと一緒に暮らすようになって、だんだんと日常に慣れてきた頃。二人が正式に付き合い始めたことを報告してもらった。

嬉しいな。だって家族より家族みたいな温かさのあるお兄ちゃんと、そんなお兄ちゃんのこと大好きな義妹だよ？ そんな二人が幸せになるために、お互いの気持ちをぶつけあえるっていうのは私の心も温かくなった。

でも、その日から私はふと溜息を吐くことが多くなっていった。

「なんで？」

「……なんで？」

「まさか、ホントはその幹人さんのことが好きだった、とか？」

違う違う。もちろん嫉妬とかじゃない。幹人さんのことは本当に恋愛感情じゃなくて、欲しかったのは恋人としての愛情じゃなくて、家族としての愛情だった。お姉ちゃんにもらいたかったものを、両親にもらいたかったものを、幹人さんに求めていた。

それ以上の気持ちはないんだけど……どうしてかな。

「それよりさ美幸」

「ん?」

「その……声とか、大丈夫なの?」

「んん?」

「コソつと友達がそんなことを訊いてくる? 声?」

ああ、なるほど。あの二人がね……美咲ちゃんはすっかり幹人さんの部屋で寝るようになったちゃったし、そうだよ。好き同士なんだもんえっちくらいしてるよね。

「全然。美咲ちゃんが知り合いになにやら相談して工事してたっばいから防音してるかも?」

「妹ちゃんの知り合い……ってリフォーム会社かなにか?」

「うーん、違うとは思うけど」

多分こころちゃんのとびつくり度合いなんて言ってもわからないだろうから省くけど、私たちがバイト行ってる間に全部解決させちゃうんだから、ホントにすごいんだよねえ。

こころちゃんのお金持ちっぷりにはびつくりすることが多いんだよ。旅行先の紹介とかもしてくれるし、なんか無人島とかの土地をプライベートリゾートにしてるところもあるらしくて、色々ぶつとんでる。今はなんか数日くらい知り合いを連れてそつちでバカンスしてるみたいだし、住んでる世界が違うよ。

「……はあ」

「また溜息だ」

「うーん」

ふと溜息はついちゃうけど不満はない。私の中にある感情はいつだって二人の幸せを応援できる幸せと、家族のような暖かさに包まれる幸せの二つ。

三人で食べるご飯も、同じところに帰ることも、おはようって言ってくれて、おかえりって言ってくれることが、幸せだ。

「じゃあなんなの」

「私にわかつたら苦労はしないな〜？」

そんなくだらない話をしていると、美幸先輩、と声を掛けられる。その元気でまつすぐな声に、私はちよつとだけ話しかけてきてくれて嬉しいという気持ちを込めて手を振った。

バイト先にもやってきた大学の、そして高校の後輩。

「それじゃ、サークルに顔出してくるから」

「あ、もう行くの？」

「ごゆつくり〜」

あ、あからさまに私と彼を二人きりにしてくれる友達に感謝しかないけどちよつと強

引すぎない？ とツツコミを入れたくなった。

あーもう、そんな気をつかわなくなつていいのにさあ、後彼の前で溜息を吐きたくないんだけど。原因を突き止める話を忘れ去るのやめない？

「どうかしたんですか？」

「ああえつとね……」

訊かれちゃつたか。訊かれたら答えるしかないよね、なんでもないつて言つたら彼がめちやくちやへこむことくらいは関わつてきてわかつたことだからさ。まあ当然幹人さんのことも知つてるし美咲ちゃんのことも知つてるし、二人が男女の仲だつて言うのくらいは察してるもんね。

「一緒に？ 暮らしてる？」

「うん。ほら……私の家族の話、ちよつとだけしたでしょ？」

「は、はい……」

それで私はすごく満たされてるのに、なんか心にわだかまりが残つてるのか溜息ついちゃうんだよね。

彼は、少しだけどうなんでしょう、と首を傾げてから嫉妬、つてわけじゃないんですよね？ つて確認してきた。

「違うね」

「それじゃあ……二人が恋人になって気まずい、とか？」

「気まずくもない」

「気まずい、かあ。それもないなあ、二人ともきょうだいみたいな関わりしてきたし、そんな二人に挟まれればそれだけ三人できようだいみたいなあ……あ！」

——そういうことか。確かにそれは私の気持ちにある。

「罪悪感だ」

「罪悪感……ですか？」

「うん」

「簡単すぎる動機だったよ。私は二人の邪魔になってるんじゃないかなって思ってたんだ。」

「恋人になって、恋人としての時間がほしいってなった時に私がいると、なんかイチャイチャできないなあなんて思ってたら悪いなって。」

「でも、ホントのところはどうなんだろう。幹人さんや美咲ちゃんは、どう思ってるんだろう。」

「はあ……」

「でも、美幸先輩と一緒に暮らそうって言うてくれたのは、奥沢さんなんですよね？」

「うん、だけどほら……その時はまだ、そういう雰囲気なかったから」

「あー」

美咲ちゃんは、幹人さんや私のために温かさをくれる役割を持つてくれてる。でもそれはあくまで夫婦ごっこをしていたから。本物の恋人になった以上、その繋がりには邪魔なのかな。結局、家族ごっこは……どこまでいってもごっこ遊びみたいなものだったのかな。

「……あ、ごめん電話だ」

「ごうぞう」

ちよつと暗い思考を巡らせていたら、電話がかかってきた。美咲ちゃんから？ またちよつと胸がモヤモヤとするのを抑えながら私はなるべくいつものテンションを保つたままもしもし？ と電話に出る。

『もしもし』

「うん、どうしたの？」

『あのさ、今日はどのくらいに帰ってくる？』

それがまるでどれくらいに帰ってくるか気を遣いながら幹人さんとイチャイチャするかの作戦立てのようになって感じて、胸がチリつと痛んだ。

最初はあんなに幸せだった美咲ちゃんからの電話が、今は頭が重くなるくらいに、辛い。

「どのくらいだろう。もしかしたらご飯行くかも」

『もしかしてデート?』

「さあて、どーでしょう?」

でも電話の向こうで今日バイトだろうあの子と声がする。やっぱり、傍にいたんだ。表面上は取り繕ってバレたか、と大きく笑う。

「じゃあちゃんと帰ってくる?」と美咲ちゃんはちよつと怒ったように言ってきた。帰ってこない方が嬉しいんじゃないの?」

「順当にいけば六時には着くよ」

『そっか、あたし今お店にいるから。そっからご飯行こうよ』

「幹人さんは?」

『今事務作業中だよ?』

だから一緒においでよ、と美咲ちゃんは明るく言ってくれる。その声が、そのあとでちやんと美幸さん来るまでに終わる? という声に手伝ってくれたらすぐ終わる、というじゃあいが聴こえてきて、私は……自分が今まで抱えていたモヤモヤが晴れていくのを感じた。

「二人は……デートしなくていいの?」

『デートじゃん。あたしとお姉ちゃんの』

は？ 俺もいるんだけど？ と幹人さん……お兄ちゃんの声がする。ああ、あつたかないなあ。変わんないんだ。幹人さんと美咲ちゃんの関係は、全然変化してない。いくら二人が恋人になっても、私を含めて三人で過ごしていることが、当たり前なんだ。

何を勘違いしてたんだろう。考えすぎてたんだろう……私がいることなんてとつくに、二人は考えてくれてたのに。

「それじゃあ、すぐ向かうね〜」

『……うん、じゃあ待つてるから』

それから私は彼を引っ張るようにしてバイト先の薬局に向かつていった。

美咲ちゃんはどうやら私の様子がちよつとだけおかしかったことに気付いていて、それがまた嬉しかった。誰かに気付いてもらえるっていうのは、こんなにも嬉しいものなんだなあって。

やつぱり私は二人のことが大好きだ。お兄ちゃんのこと、美咲ちゃんのこと、どつちも大好き。

どうしようもない醜悪

——それまでの騒動が嘘のように穏やかだった日常だったが、それもいつかは終わる時が来る。精算してない過去から逃げることはやはり不可能なもので、俺が溜め続けた借金は、ある日突然、取り立てられる時が来た。

「美咲、弁当」

「ああごめん、行つてきますー！」

「行つてら〜」

ハロハピの練習に行くために部屋からパタパタと出ていく美咲を見送り、俺は伸びをして美幸があくびをする。お前は出かけなくていいのかよ、と問いかけるとおにーさまを一人にしちや悪いと思つてとか言われた。いらん世話を焼いてくるな。

「今日は折角だからお兄ちゃんとデートするんだよ」

「あつそ」

「服買いにね！」

そろそろ秋物だも〜ん、と美幸は着替えるために部屋に戻つていく。まだまだ秋といふには暑い季節なんだが、常に季節を先取りしなきゃ売れねえつてのは辛いよな。一応

俺だつて販売業のはしくれだし、幾らおおまかな棚割りは上が指示してくるつつつても、店によつて売れるもん売れないもんは違つてハナシなんだよな。

「あとさ、お昼は火鍋——」

「それは別のヤツとにしてくれ」

俺の胃と舌はお前より繊細なんだ。あんまりいじめると明日の仕事に差し支えが出るつつの。却下するに決まつてんだろ。

美幸はケチーとおどけてくる。最初はなんか遠慮してたっぽい美幸もすっかりこの調子だ。思つた以上に、この緩くて幸せな家族ごっこは充実していた。

——それゆえに、俺は考えることをやめていた。今が幸せで、俺はそれに満足しちまつてたんだ。

「いや、まさか本気で一緒に選んでくれるなんて思わなかつた」

「お前が頼むからだろ」

「でも、前までの幹人さんだったら絶対店の前でスマホ触つてたのにさ」

確かにそうだな。でもそれじゃあつまらないからと美咲に言われてからは、なるべく似合うのを考えたりするんだよ。いつも美幸には服選んでもらつて……というか今日もこの袋ん中の幾つかは俺の服も入つてるんだよな。

昼めしはラーメン屋にした。そのセンスはどうなのかと思うが、麻辣に惹かれたやつ

がいたもんでな。

「今度は美咲ちゃんの服探しに行きたいな」

「それは二人で行ってこい。俺は置いてかれるだろ」

「もちろん！ お兄ちゃんとのデートにピッタリな服探してきてあげる」

それは美咲が真つ赤になるぞと笑っていた時だった。美幸があつと立ち止まり前方を見て、俺もそこに視線を向けて、同じように立ち止まった。

どうしてここで出会うんだろう。そう思わざるをえない。けれど俺たちは過去に置いてきたものをないがしろにしすぎた……その報いを今受けてるのかもしれない。

「奇遇ね、二人で仲良く買い物？ 美幸がそんな風にきょうだいというものに幻想を抱いていたなんてね」

「……お姉ちゃん」

「お姉ちゃん？ 家を捨てて、赤の他人を兄と呼ぶあなたにお姉ちゃんだなんて呼ばれたくない」

「やめろ杠葉」

偶然、そう誰かが追いかけたわけでもなく偶然、俺たちは杠葉かこに遭遇してしまった。姉であつたはずの彼女、恋人だつたはずの女、喜多見杠葉は冷たい目で俺たち二人を刺してくる。

——なんでお前たちが幸せそうにしているのかと。

「姉を捨てた子と恋人を捨てた男、お似合いじゃない」

「お似合いだと思ふんなら放っておけねーの？」

「身内の醜態を？」

「……お前」

「たかがひと月一緒に暮らしてもう身内ヅラ？ 相変わらず手は早いのかね？」

相変わらずつてなんだ俺は奥手だ。と顔をしかめたら同じことを思ったように美幸が何やら怪訝な顔をしていた。こんな時にそのリアクションはやめろ。確かに美幸には実質手を出してから付き合ったという見方もできれば、去年の冬からだから優に半年以上もキスすらもせずに付き合ってきたという見方もできるんだからな。

「はあ……まあいいや。借金取り立てならウチで話すか」

「お邪魔していいの？」

「……一応、出てっただけでお前んちだろ」

それが認められるようになったのもつい最近のこと。美咲と恋人になって、杠葉のことに決着をつけねーとつて話していたからこそ、この言葉が出てきた。借金の取り立てが突然やってきたのには驚くが、別にタイミングが最悪だったわけでもねーからな。

同時に、これを解決しなきゃ俺たちの家族ごっこは、いつまで経っても本当の平穏と

幸せを手に入れることはできねーんだ。

「そういう意味じゃないんだけど……まあいいわ」

「美咲ちゃんにも連絡しておく。必要でしょ？」

「……そうね」

多分今のタイミングで連絡したら余計なのが二人くらいいついてきそうだが、まあいいや。

美咲たちが来るまでの少しの間、本当の家族になるはずだった俺たちでお互いの気持ちでも確認しとこうか。特に杠葉はそういうの苦手だしな。

「……私はね、家族が欲しかった。お父さんやお母さんの言っていたことは、今なら少しだけわかるけど……それでも、疲れちゃった時に寄りかかれる家族がほしかった」

それを美幸は俺の中に見つけた。だから家を出てって、ここに来た。本当にこのひと月で笑ったり、くだらないことでケンカもちよつとして、でもお互いの毎日あったことを知れて、食卓を囲んで、たまにテレビの前で寝落ちした美幸がもたれてくるのを受け止める。そんな日常こそを美幸は求めていた。

「俺は、ケジメをつけたい。どういう風にとかは全然、逃げてたからな……わかんねーけど、やつと素直に好きって言えるやつができたから」

過去にケジメをつけて、俺は美咲と一緒に、そして美幸と一緒にこれからも家族ごっ

こを続けていきたい。いつかは美幸が離れて、美咲と俺が本当の家族になつて……でもやっぱり俺たち三人がごっこを続けたことの幸せを、未来で笑つて振り返れるようにやりたい。

——それは、杠葉にも似たようなものを感じた。でも俺とお前じゃ、どうしようもなく大人過ぎたんだよ。

「もつと子どもみてーに素直になれば、泣きわめけばよかつたんだ。一緒にいたいって」「そうすれば……一緒にいられたの？ あの日も……あのクリスマスも」

「杠葉」

「幹人くんの好きは、奥沢さんに向けている好きも、変わらない……ごっこ遊びよ」

グサリと胸を抉られる言葉だった。怒り、は少しある。けれどいつだつてフラットで感情の読めぬー普段の杠葉のまま、俺を抉ってきた。

——そのタイミングで美咲が帰ってくる。案の定こころと花音も一緒にいて、二人は熱の入りすぎる当事者たちじゃねー客観的立場としてもらうことにした。特に花音は俺の味方をしたそうにしてたが、これ以上は杠葉に負担をかけるからな。

全員揃つたところで、と杠葉は今度は自分から口を開いた。そして矛先を美咲に向けていく。

「奥沢さん」

「……はい」

「彼とは別れた方がいいわよ」

場が凍り付く。美咲が教師としてじゃない、一人の女性としての喜多見杠葉から放たれた言葉は……別れるということだった。

その奥に個人的な感情はない。淡々とした杠葉の、熱されることのないクールで確実な根拠を持った言葉だった。

「……は？ い、いやいや、なんでそーなるんですか」

「いずれ、あなたも私と同じになるからよ」

「意味わかんないんですけど……あたしは、同じには」

いえ、と杠葉は首を横に振る。同時にそれは奥沢さんのせいじゃないからとフオロも一緒に。

いずれ同じになる。それは美咲の尽力とかには関係なく、俺が俺である限り変わららないのだと彼女は突き付けた。

「幹人さんが？」

「私の時と同じ。彼はあなたのことをわかってるうだなんてちつとも考えてないわ。ただあなたの熱に反応しているだけ。誰にでも同じよ」

そんな突き刺すような指摘に啞然とする美咲に向かって、杠葉は語りだす。俺が知ら

なかった。俺と杠葉の日常を杠葉から視たものを。

——そこにある、俺すらも知らなかった、俺の醜さを明るみにしよう。

見えない真実

枉葉、喜多見先輩は俺の高校、大学の先輩つてのは前に言ったと思う。高校の時から先輩は容姿端麗で清楚な雰囲気でありながらまるで冷たくて鉄鎧を纏っているような感覚すらあるヒトだった。男子人気はあったけど誰もお近づきになろうとするようなのはいない。そんな雰囲気的女性、それが喜多見先輩だった。

「先輩」

「宮坂くん、こんにちは」

「こんにちはは……じゃなくてなんスかその段ボール」

「部室にあった無駄な資料よ」

そんな学校のアイドルと言うべき先輩とお近づき……つて言うて聞こえは悪いけど、モブとしてじゃなくて名前を呼んでもらえるようになったのは部活、いきものの飼育や観察を主に行っているという、おおよそ青春を謳歌したい高校生には人気のなさそうな部活において彼女は部長で俺が部員の一人だったということだった。

「持ちますよ」

「その言葉がなければあなたのことを血も涙もない冷血漢と罵ったところね」

「……言い過ぎでは？」

「女性が重いものを持つているのを知りながら横でニコニコとそれを眺めていたら、罵倒のひとつでも言いたくなるでしょう」

溜息をつきながらまったく表情は動かさずに、俺を見上げる先輩はでもやつぱりキレイで、クラスメイトに先輩目的で入部したと疑われても仕方ねーなどと納得しちまうほどだった。言ってることはちよつと変な気もするけど。

「通りがかってくれて助かったわ」

「通りがかつたというかフツーに部活動しにきただけっすけど」

「それにしたつてタイミングがいいわね。もう少し、持ち上げて運び始めるより早かつたほうがもつと嬉しいけれど」

部員の何人かは部活の掛け持ち、一人は生徒会との掛け持ち、一人は委員会との掛け持ちのため毎度顔を出す暇人は部長を除けば俺一人だったこともあり、自然と二人きりの時間と会話が増えていくものだった。

「暇ですね、この時間」

「暇なら勉強しなさい。理科以外の科目、それほど成績よくないでしょう？」

「……先輩も似たようなもんじゃないっすか」

「いいのよ、平均点より上だもの」

よくねーと思う。このヒト万能人間みたいな顔して得意と不得意の差が激しいのは、知り合ってから知ったことだった。そんな完璧じゃないところは、近寄りがたく感じていた先輩の隙である気がして、俺と喜多見先輩は時間とお互いを知るといいう行為を重ねていくうちに、惹かれあつていった。

「——それは嘘よ。美化している」

そう、語りを進めていた俺に対し、杠葉はピシヤリと思い出を打ち切ってくる。嘘、とか美化してるなんてそんなつもりはねーから、と反論するがそれでも杠葉は首を横に振る。現実はずっと残酷だったと。そんな甘いロマンスなんてなかったと否定する。

「じゃあ」

「幹人くんを好きになったのは私。惹かれあつたのではなく私の片思いだった」

「……おかしいだろ、その理屈は」

「少しもおかしくないわ」

いやおかしい。なぜなら付き合つてほしいと告白したのは……誰でもなくて俺だからだ。確かにそれは嘘でもなんでもなく事実だろ。今だつてその時の緊張や甘酸っぱい胸の痛みなんかを思い出せるくれーなんだから。

「……はあ」

だが、杠葉は俺の訴えを溜息であしらつてくる。じつと俺を見つめて、本当にと呆れ

た口調で、表情で、俺が抱いているすべての勘違いを指摘していく。淡々と、だが静かな怒りを込めて。

「確かに、そういう気持ちも少しはあったのかもね。でも幹人くんが私に告白しようと思ったときつかけは覚えているわ」

「その……きつかけって？」

黙ってやり取りを見ていた美咲が思わずといった様子で口を挟んできた。本当に、言葉通り美咲には一切怒りを出さず、そうねと苦い顔をした。悲しい顔、それでいてただ一人、俺を詰るような表情で杠葉はその残酷なきつかけを告げた。

「その前に幹人くんのことを相談していたのよ。お節介で口が軽い、おしゃべりな部員にね」

「……ん、つまり幹人さんは」

「その相談を知っていたの。私が宮坂くんのことを好きだという情報を得たことで告白をしてきたわ」

タイミングの問題だろ……という反論は、喉で詰まって出てこなかった。杠葉の声には予想ではなく確信に満ちたもの。俺はその声と視線で反論を奪われたように固まってしまった。

——自然と、語りの主導権は彼女に流れていく。視線も、続きの言葉も。

「そうね、そんな打算だったなんてことも知らず、恋する乙女だった私はあなたのととても短い告白に舞い上がったものよ……とても、嬉しかったし、世界で一番幸せだとすら思っていたわ」

俺からはとてもそんな風には見えなかったけどな。けど、ああそうか。その時の俺が無機質にいいわよ、というとても短い返事で付き合えたという喜びがあつたのは、安堵があつたのは、既に杠葉の気持ちを知っていたからだつたのか。

「そう、奥沢さん」

「……はい」

「これが彼、幹人くんなのよ。彼は、自分を好きでいてくれるヒトが好きなの。ただ、それだけ。それ以上の感情は持ち合わせてなんかいない」

「でも……幹人さんは、あたしに」

「愛を囁いてくれた？ 欲を見せてくれた？ 甘えてくれた？ それはあなたが許可したからに過ぎない。現に、許すまで一切、そういう触れ合いはなかったんじゃない？」

美咲が何かを言おうとして閉口した。思い当たるフシがある、って感じの反応だった。思い返してみればそうだ。全部美咲が先だった。甘えたのも、好きだと囁いたのも、恋人としての情事を欲しがったのも、全て。

「九歳差なんて言い訳よ。幹人くんは与えられた熱をそっくりそのまま返すだけ。模倣

するだけの、ごっこ遊びなのよ」

そう切り捨てて、杠葉は、きつと誰にも話したことがないであろう胸の内を、思い出とともに明らかにしていく。冷たくて、いつだって錬成された鉄の塊のような無機質さを感じさせた喜多見杠葉が本当に持っていた、気持ちを。

私が花咲川への就職を決めた頃、既に幹人くんとは数年のお付き合いをしていた。当時の彼といえ、人懐っこくて、独りで生きると教えられてきた私にとつては知らなかったもの、なにより欲しかったものをくれる大切なヒト、大好きなヒトだった。

「杠葉」

「なに？」

「呼んだだけだ」

「なにそれ……ふふ」

居心地がよかった。幸せだった。彼の家にある一人用の狭いベッドで一緒に寝る瞬間も、普段は使われない台所で料理をするのも、名前を呼ばれるだけの小さなことでも全てが色づいていた。そんな中で彼と過ごす時間をもっと増やしたい、愛されていた、と願っていた私が結婚を前提にした同棲という彼の提案を受け入れるのは自然な流れだった。

「でも幹人くん。薬剤師試験落ちたのよね？」

「……そうなんだよな」

「どうするの？」

「しばらくはバイトしてるドラッグストアで店長見習い、的なヤツかな」

美幸から訊いた限りではどうやら彼はうまく息抜きもできて、けれど信頼されているようだし、所謂ブラック気味の接客サービスという業種に対して柔軟にやっつけていける人物だろうという信頼の元、幹人くんがそれでいいならと頷いた。今思えば無理にでも私が頑張るか一年遅らせて薬剤師試験を受けさせるべきだった、と後悔しているけれど。

——彼が期待に込める人物、というより期待に込めることしかできない人物だと気付いたのは丸二日あったはずの休みが一日、また一日と無くなっていた時だった。

「幹人さん、ずっと働き詰めだよ」

「……そう」

「お姉ちゃんからも言っておあげてよ。てかしばらく会話してないんじゃない？」

「美幸には関係ないでしょう？」

ここで私も親の教育という鎖を壊せなかったのも、崩壊の一因であるのはそうよね。肝心なところで、独りでなんとかしようとしてしまった。独りでいようとしてしまった。

結果として、その私の心を映し出したかのように幹人くんと私は同じ家にいるのに別々に暮らしているようになってしまっていた。

「そこからは、二人も知っている通りよ。クリスマスの際に、私はその空間に耐え切れなかった。久しぶりに一緒にゆつくりできると喜んでしまったことで逆に、我慢できなくなってしまった」

「……紅葉」

私はずっと、ずっと……高校生の頃から幹人くんは私のことを愛してくれていると思っていた。でもそれは私の勘違いで、彼は十年前からずっと私の幼い恋を映し出す鏡でしかなかった。誰かを映すことでしか自分の価値を見出せない、愚かな男だった。

「でも、俺は……変わった。お前に出ていかれて、美咲に会って……美幸に、たくさんのヒトに教えられて」

幹人くんはそんな風に首を横に振るけれど、いいえ変わってない。だって……だってあなたは今も奥沢さんの幼い恋を映す鏡でしかない。

——そしてなにより、まだ私を映しているんだから。そうである限り、あなたはまた……あなたを愛してくれるヒトを、傷つけるのだから。

「もうやめにしましょう、幹人くん。幼稚なごっこ遊びはおしまい」

「お姉ちゃん、それは……！」

「私と結婚して。まだ私は、幹人くんを愛しているわ」

ごっこ遊びはこれでおしまい。

夫婦ごっこでもなく、家族ごっこでもなく、ホンモノを私が一緒に探してあげるから。だからあの時付けられなかった指輪を……銀色の約束を私に頂戴。

——そうしたら今度こそ、二人で一緒に、幸せになれると信じているのだから。

忘れられない相愛

まずあったのは、沈黙。驚きに目を見開いて何も言えない幹人さんと、どこかその言葉を予想していたものの、見守ることしかできない美幸さん。そして、あたし。

——いや知ってたよ？ 未練がましく机に指輪置いてあったし、写真もあった。でも、まさかこの状況でプロポーズまでとは……その真剣さを帯びた口調はさすがに口を挟めるものじゃなかった。

「ごっこ遊びはおしまいにしましょう？ 今度こそ……ホンモノを見つckerのよ」
「杠葉……」

幹人さんの瞳が揺れる。助けを求めるようにあたしを、そして美幸さんを映している。でもそれじゃあダメなんだってのは、杠葉さんの話で嫌というほど思い知らされた後だったから。いや、あたしだって嘘だ、そんなの勘違いだって首を振りたい気持ちでいっぱいだよ。だけど、そんな子どものワガママで論破できるほど二人が過ごした時間は短くない。

去年のクリスマスまでの約九年……そう九年。奇しくもあたしと彼の間にある年月と同じだけ、杠葉さんと幹人さんは一緒にいたから。

「これ以上、誰かの鏡でいるのは……おしまいにして。そうじゃないと、幹人くんは一生ごっこ遊びから抜け出せないの」

「幹人さん……お姉ちゃん」

あたしが、あたしがああの時、幹人さんに甘えなければ……美幸さんも杠葉さんも、こんなに傷つかずに済んだのかな。大好きな幹人さんを悲しませて、傷つけてきた敵だと思っていた杠葉さんの口から出てくる言葉は、どれも幹人さんを本当に、心の底からやり直したい、間違いを正したいっていう真摯な想いばかりで……ここにあたしがいることが場違いなんじゃないかと思ってしまうくらい。

「俺は、俺は……」

「わかってるわ。今ここですぐ、とは言わない。今日はお暇させてもらおうね」

そう言って、杠葉さんはコレは預けておくね、とクリスマスラのラッピングが施された箱を置いていく。中身は、彼女が机に置いてあったものと同じ、指輪に違いない。

そして、次にあたしの方をくるりと向いて優しく、けれどやっぱりどこかあたしにだけは一線を引いたように厳しく最後の言葉を残していく。

「大人になりなさい、奥沢さん。そして恋に曇っていない瞳で、幹人くんを見つめることね」

「お、お姉ちゃん」

「美幸は……今までごめんなさい。あなたに家族の温もりをあげられるのなら、私が頑張るわ」

ああでも……やっぱり味方ではない。どんなに憐れみを向けられてもそれは感じてしまう。難しい立場にある美幸さんを取り込まれるカチチになって、あたしは家族を奪われたように茫然としてしまつて。勝利宣言に近いものをこの場の余韻に残していく。杠葉さんのその横顔を、あたしは眺めることしかできなかった。

「美咲ちゃん」

「美咲……大丈夫？」

——いや、味方がいなくなつたわけじゃない。ここには幹人さんと美幸さん以外にも二人、あたしの側に立つてくれるヒトがいるんだつた。花音さんはすごく苦しそうな表情で、こころはあたしを気遣うように眉を下げながら視線を向けてくる。だからあたしはまだ、まだ自分の想いを見失わずに済んでいた。

「幹人さん」

「……美咲。俺は、俺は……」

十年の付き合いなんだから、杠葉さんが幹人さんを指した言葉は的確で正しいものだったんだろうなあつてのは、そうだよ。このヒトは鏡のようなものだったんだ。かつては杠葉さんの想いを映して……今はあたしの想いを映してる。だから、あたしがで

きるのは願うことだけ。杠葉さんと同じ願いを、だけど少し違ってあたしの幸せでもあ
る願い。

「杠葉さんの……言う通りだと思う」

「——そう、か。そうなんだな……」

「ごっこ遊びはもう終わりにしよ。間違いなら……それを正さなくちゃ」

杠葉さんは幹人さんの気持ちを全て否定した。そこに彼の気持ちなんて存在しな
い。いつてくらしいの勢いで、強引にその虚像を砕こうとした。あたしはその虚像を砕くつて
ことには同意する。他者に依存しない、本当の幹人さんが言葉を紡がなきや意味がな
い。

「でも、あたしは知ってる。幹人さんがただただあたしや杠葉さん、みんなの気持ちを反
射してるだけじゃないってこと」

「……どういうことかしら？」

だって、あたしはあのクリスマススの日の幹人さんを知ってる。本気で、本当にどうで
もよかった。死んだっていいとすら思っていたあたしに対して、幹人さんは放っておけ
ないって言ったんだから。

「そんなの、別に俺は……」

「ホラ、あたしはそんなのだなんてこれっぽっちも思っていない。あの時、幹人さんはあた

しを抱きしめてくれた。それ自体はあたしの寂しいって気持ちを映したただけかもしれないけど……おつきな意味を持つてるんだから」

幹人さんは、怖がって鏡を置いてその後ろに隠れてるだけ。そうなるまでに何があつたのかは知らないけど、鏡なだけじゃない。どこかに、本当の宮坂幹人さんがいるはずなんだ。それをあたしは知ってる。あたしはその幹人さんに触れたことがあるから。

「杠葉さんの言う通りごっこ遊びは終わり。あたしは……ごっこじゃなくて、幹人さんとホントの恋人に……ううん、家族になりたい」

「でも、俺は」

「え、幹人さんあたしのこと嫌いなの？ いっぱいキスしてくれたし、ほら……えっちなも。なのに嫌い？」

「……美咲ちゃん。なんか話逸れてない？」

逸れてないですー。確かに、そこまで確認取る必要はなかったかもしれないけど。でも、あたしが言いたいのはただ許可されたから、ただあたしが幹人さんのことを好きでそういうことをしてほしいからした、ただだって思えないってこと。

「どういふことなの、美咲」

「触り方がなんかやらしいって言うか、熱い感じって言うか……うーんなんて言ったらいいんだろ」

「触り方が……う？」

「ふ、ふええ……美咲ちゃん、そういうの、こころちゃんにはダメだよお」

あ、つい。でも、あたしが言いたいのはただただ鏡として映してただけって、思えなかったなあってこと。

だって、ハジメテの時……あの時の瞳をあたしは一生忘れない。あの透き通った、欲を孕んだあの瞳を……ってのを伝えようとしていたら杠葉さんに話が逸れてるわよ、と不機嫌そうに言われた。

「俺は、その言葉に頷ける自信がない。それも、美咲の期待に応えただけって言われれば、そうなのかもしれねーし」

「ふうん。そんなつもりであたしを抱いたの？　へえ……う？」

「い、いやっ！　だって……俺は」

もう、ホント、いつもいつも言ってる気がするけど……今日こそは力いっぱい、気持ちをいっぱい込めて言ってる。思いつきり嘲るように、思いつきり蹴とばすくらいの勢いで、あたしは息を吸って、そして吐き出した。

「ばーっか！」

「ば……なんで」

「いいじゃん。好きなら好きって言えば、どーせ、杠葉さんのこともまだ忘れられない、

とか考えてるんでしょ？」

「う……なんでわかるんだよ」

「ばーか、ばか、ばーか……わかるって。あたしだって、幹人さんのことずっとずっと見てたんだから」

十年には遠く及ばない、一年にもならない時間だけどあたしは、杠葉さんが見てこなかった、失った悲しみを持っていて、それがあたしや美幸さんと関わっていくうちにどんどん元気になっていく幹人さんを見てきたから。

「そうだな……俺は、一度だって杠葉を忘れたことなんてねーんだ」

「あたしを抱いてる時もね」

「……あなた」

はいはい。黙ってますよ。忘れられるわけないよね、だって、幹人さんにとつてはクリスマスのあの時、あの瞬間まで一緒にいることが当たり前で、名前を呼ばれることが当たり前で、愛し合ってるってことが当たり前だったんだから。そんなんだから、ちよつとくらい妬かせて余計なことくらい言わせるばーか。

「いなくなつて、美咲を代わりにしていく中で杠葉があの時言つたこと、わかんねーつてなつたことがたくさん、ホントにたくさんあつた。けどな、わかつたこともたくさんあるんだよ」

「わかったこと？」

「ああ、杠葉がどんな気持ちで俺の傍にいてくれたのか、とか。なんで怒ったのか、とかかな」

それ、概ねあたしと美幸さんのおかげだけど、と言うと美幸さんがそーだよと唇を尖らせた。うるせーじゃないよ、だって幹人さん、杠葉さんにしたミスをあたしにもしてるんだからさ！

「それがうるせーっての……んで、杠葉が何を望んだのか、俺に何を期待してたのかわかった。つい最近……あいつらのおかげだけ」

「それじゃあ、答え合わせくらいしましうか？」

「しなくても、もうわかってんだろ……杠葉」

ええ、そうねなんて言うけれどその顔は、今にも泣き出しそうだった。なにせ十年だもんね。遠回りの恋だった……って感じなのかな。やっと好きなヒトに自分の気持ちを伝えられたって安堵の涙。その瞬間だけ、あたしには杠葉さんが制服を着たあたしと同じ歳くらいの子どもに見えた。

「ごめんな杠葉、もつとちゃんと、デートとか行けばよかった。好きって言えればよかったです」

「そうよ。あなたはいつつも、私と並ぶとスペックが、とか言い訳ばかり連ねて……一度

だって、あなたに好きだなんて面と向かって言われたこともなかった」

「わかってなかったんだ。杠葉が……俺のことをどうして好きになつてくれたのか。なんで……家族になりたい、とまで思つてくれたのか」

そういうところあるよね、幹人さんは。ホントに、一体杠葉さんと会う前に何があつたのやら……つてのは今は関係ないよね。

杠葉さんも親の教育で他者に甘えることができなかった、助けを求めることも。だからその想いも不満も胸に降り積もらせることしかなかった。そうして出来上がった杠葉さんの外面を、幹人さんは歪んだ形で映してしまつてたんだ。

「——でも、俺にとつて……今の俺にとつて夫婦、とか家族つて言われて思い浮かぶ相手は……杠葉じゃない」

「幹人、くん」

「ごっこだったのかも知れねーし、それに反論なんてできるわけねーけど、今の俺を、ここまでバカで欲張りしてくれたのは……美咲なんだ」

それだけは、杠葉の気持ちを受けたわけでも、美咲の期待に応えたわけでもない。そんな風に弱々しく笑う幹人さんに、杠葉さんは何かを言おうと口を開いて……そして、それを一旦閉じてからため息を吐いた。

「バカね、本当に」

「だよな」

「ええ、本当に……バカなのよ、幹人くんは」

「ごめん」

「——っ！」

あーあ……うん、今だけは見過ごしておこう。十年間、あたしがまだピカピカのランドセルを背負ってた頃から今日までの時間、ずっと、ただずっと愛したヒトに、愛してくれていると思っていたヒトに、ふられたんだもんね。ここでむっとするのは、幾らなんでも大人気がない。いやあたしまだ子どもの範疇だからヤキモチに喚きちらしてもいいのよ、あ、どうしよっかな。ここであたしもわんわん泣いて空気ぶち壊しても許される？ ない？ やっぱりない？

——という冗談はさておくと、紅葉さんはこのひとときだけは、愛するヒトの腕の中に納まって子どもみたいに泣きじゃくって、幹人さんがそれを優しく包み込んでいた。

「お姉ちゃん……よかったね」

「美幸さん」

「……ん？ なりに？ 私のかわいい義妹ちゃん？」

「もうちよつとで追い出すところだったよ、裏切者さん？」

「うぐつ!？」

モヤモヤは愛しの義姉で発散しておくとしよう。なーにが私は恋する乙女の味方だからね、だよ。思いつきり杠葉さんの訴えに流されてたクセに!

よよよと泣きかれ、言い訳を超早口で並べてくる美幸さんをあしらっているとその様子、目許を腫らした杠葉さんがきよとんとした顔で見ている。

「……美幸、あなたってそんな風に甘えるのね。知らなかったわ」

「……甘やかしてくれるって、知っちゃったから」

「姉として謝っておくわ奥沢さん。うちの愚妹が迷惑をかけているわね」

「本当に」

「そこは社交辞令でしょ!？」

「違うわよ?」

「肝心なところで美咲を放っておくからだな」

「いやおにーさまがそれを言いますか?」

雨が降って、上がって、空に虹ができていくように。杠葉さんはなんだかすつきりと晴れやかな顔をしていた。きつともう、雲はかからないだろうな。

これで二人はやつと、過去という借金を返済しきった。随分と延滞したせいで利息がついていたけど。過去を返済して、幹人さんは未来へと向かおうとしていた。

始まっている未来

あれから一晩経過して、少しだけ余裕を持って教室へ向かっていると後ろから奥沢さん、と声を掛けられる。透き通った声、アロマのような優しい香り、振り返るまでもなく誰かはわかっていたけど、杠葉先生だった。

「おはようございます」

「うん、おはよう」

「……えと、何か？」

「あなたにいいものをあげようと思って……いらないお節介かもしれないけれど」

いいもの？ と首を傾げたあたしに、杠葉先生は何冊かの料理本をくれた。使い込まれているようで、ところどころ汚れており、付箋がたくさん貼ってあった。

——いや何かわかったけどこれ重いんですけど。いや本の重さじゃなくて、本もまあそこそこ重いけど。

「幹人くん、ああ見えて相当好き嫌い多いから」

「はあ……まあ知ってますけど？」

「……かわいくないわね。美幸の好みも入っているのよ？」

「それはありがたいです。あの二人が合わさると毎日考えるのもめんどうさいんで」

幹人さんは幹人さんで……まあ杠葉先生が言った通りだし、美幸さんは味覚崩壊してののかなんのかわからないけどすーぐ辛味を足そうとしてくる。餃子のタレが真っ赤になるまで豆板醤入れたうえにラー油ドバドバかけるようなヒトだし。だから辛味が介在しなくなると絶対こそこそとお夜食だもん。

「作る側としてはああも味をいじられるとへこむんですよね」

「そうね、特に美幸のは……何度寝ている間にハバネロを鼻に捻じ込もうと思ったことか」

あはは、そりや面白い冗談ですね、あははは……あは、は……え、冗談だよね？

うわ目が笑つてない。怖すぎるんですけどこのヒト！ 杠葉先生、時折言動がバイオレンスなのなんなの？

「……ごめん、しばらくはまだ引きずっているから」

「大丈夫……ではないですけど、理解してるんで」

和やかな雰囲気ではあるけど、こうして杠葉先生が関わろうとしているってことはつまり、それだけ落ち込んでるってこと。

あたしが選ばれた、幹人さんはあたしを選んでくれた。だから、自然と選ばれなかったという悲しみを背負うヒトがいる。

「それじゃあ」

「はい」

「……幹人くんが幸せになれることを、願っているわ」

—— 杠葉先生は、あたしや美幸さん、幹人さんにとつて重要な存在に位置付けられていた喜多見杠葉さんはそうしてゆつくりと、最後まで幹人さんだけを名指しして言葉を送りながら舞台から降りるようにして去っていった。その背中をあたしは忘れないようにしよう、見えなくなるまで見送った。

「さて、今日は——」

いやまあ、すぐに授業で会うんだけどさ。あとあたしに目を付けるのはやめてもらっていいですか？ 教師としてそれどうなんですか？ 文句を言いに行ったら社会人と同棲している、なんて子は注意深く見守る必要があるわよ、教育者的にはねとか反論された。あなた担任じゃないですし教育者的にじゃなくて元カノ的にでしょ。

「ま、お姉ちゃんらしいと言えそうかな」

「それで済ませていいの？ もはやアレ、嫁いびりの亜種だつて」

「あはは、じゃあお姉ちゃんが姑さんか」

暢気に笑つてるけど美幸さんはまだ話終わってないから一度帰ってきなさいとか言われてたよ。あれ絶対怒ってたよ。

あたしがそう伝えると美幸さんは、心底嫌そうな顔をしてからあたしに抱き着いてくる。

「助けて美咲ちゃん！ 私のかわいいかわいい義妹みさきちゃん！」

「妹的にそれはどうなのかな〜とか思うんだけど」

一人で頑張るところだと思おうんだあたしは。そりやまあ……あたしの大事なお姉ちゃんだし？ 帰ったら慰めたりフォローしてあげたりだとかは、するけどさ。美幸さんだってもうちよつとちゃんと、落ち着いた状態でお姉さんと言葉を交わすべきだよ。

「うう……うん、頑張る」

「うん、頑張れ、よしよし」

ところでこのお姉ちゃん、最近特に年上としての自覚が無くなってる気がする。甘い気質なのはわかってたけど、わかってたけどさ。最初の頼れる年上のお姉さんオーラどこに置いてきちゃったの？ お店？ ちゃんと忘れ物は取りに戻ってほしいところなんだけどなあ。

「……なにやってんだ、休憩室で」

「ん〜と……百合営業！」

「誰に向けての営業だよ」

「おにーさま？」

「疑問符つけちゃうんだ……あはは」

このミステリアスもどきの美幸さん、ノリと勢いで生きてるかのよういきようだい愛もいよいよねとか言って幹人さんにまで抱き着こうするからさすがにそれは止めた。ダメ、それあたしの役目。いやあたしはノリと勢いで抱き着いたりとかは……しないけど？

「美咲ちゃんはヤキモチ妬きさんだな」

「まあ……カレシがあんなのだからね」

「あんなの……つてなあ」

ちやんと見張つとかなないとどつかふわふ飛んでいきそうなヒトだよ？ ちやんと掴んでおかないと、届かないところにまで上つていったらもう……あたしには見上げるしかないんだから。

「はいはい、そこまでにして夕礼始めるからな」

「は〜い」

「んじや、今日はチラシクーポンとアプリの電子クーポン両方あるから、対応間違えないように」

「結構います？ アプリのやつ」

「そこそこ普及してきたーって感じだな。ただそれだけに使い慣れてないお客さん多い

から」

「はい、宮坂さん！　なんか違うんですか？」

「なんかつて言うか……ちゃんと対応しねーと何回も使いちやうからつてことだな」

また、日常が始まっていく。プライベートは解決したけど、相変わらず店長代理としての宮坂さんの仕事量は半端じゃない。スマホアプリの配信を開始したことでそのイベント関連やら会員登録の進捗だとか……また色々新しいことが導入されていって、忙しいとてんやわんやになっっちゃう。

「ねえ美幸さんとあたし、ここでレジ代わってもいい？　……ですか？」

「ん、なんでだ？」

「ほら、まだそこそこなん……ですよ？　美幸さんに登録の窓口のやつ、前結構入ってくれてたし」

「あー、でもみさ……奥沢には、手伝ってほしいことがあって」

「……また事務作業ですか？」

「おう」

おう、じゃないよ。でも、そうやって素直に手伝いを申し出てくれるところはなんだか嬉しくなってしまう。うん、それでいいんだ。もう誰かの期待に独りで応えようと鏡を置かなくなつて……大丈夫なんだよ。

「私がやるよ、事務作業」

「……あたしがやります。あたしと宮坂さんの二人で」

「うわー、わかりやす……」

「はい？ 何か言いました？」

「なんでもないです」

「美幸さんはフリーになつてますけどあのヒトに発注教えてあげてくださいね？ ついでにデートの約束でもしてきてください」

「それどこまで仕事の範疇なのかな!？」

あたしはきつと、ここで長い間働くことになるだろう。就職まで……はどうかまだ決めてないけど、少なくとも幹人さんがちゃんと一人で仕事しても休めるようになるまで。

お兄ちゃんだの、お姉ちゃんだの、妹だの、呼び合ってみてはいるけどあたしたち三人の関係はまだまだごっこ遊びを抜け出そうとしてるところ。だからあたしと幹人さんの関係も、まだ恋人っていうには手前を歩いてる。

でもこのごっこ遊びは、遊びじゃなくなつて……いつかホンモノになる。九歳差を越えた本当の恋人に、生まれがバラバラでも本当のきょうだいに、そして本当の家族に。

「……幹人さん」

「ん？」

「すき」

「……俺も、美咲が好きだ」

「うん」

だからその時まで、あたしと幹人さんは恋人未満のまま。いつか家族に、夫婦になる、恋人未満な九歳差。

ホンモノへの道を一步一步進んで、時々振り返って、ケンカして仲直りをして。あたしはたくさん時間を、このヒトと過ごしていく。ただいまもおかえりも、いつてきますもいつてらっしゃいも、おはようもおやすみも、愛してるも全部、このヒトに言えるあの家で。

——恋人未満な九歳差 THE END

Thank you for reading.